

その錬金術師は儘なら
ない～彼に薬を求め
るのは間違っているだ
ろうか～

獣ノ助

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼に英雄願望はない。

大切な人を守る事が出来れば良かった。

しかし、守れなかった。

強くなるために力が欲しかった。

しかし、彼の血が抗った。

そんな彼も、冒険者となる。

神の恩恵は今度こそ力を与えてくれると思っていた。

しかし、彼が手に入れた力は…

彼の進む道はどうにも、——儘ならぬらしい。

／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／＼／

・ 原作とは異なる独自解釈を含む場合があります。極力原作の世界観を壊さぬよう努めますのでご了承ください。

・ 本作は処女作となりますので文章力、表現力等至らぬ点も多いですが、どうかお付き合ってください。

- ・ 感想は随時受け付けています。お気軽にどうぞ。
- ・ もし文章やタグなど気になる点がありましたら、ご指摘ください。

目次

序章：『錬金術師、サポーターを雇う』

Recipe. 1 | ソロ冒険者

+ 日雇いサポーター | 1

Recipe. 2 | 悪評 + 錬

金 | 12

Recipe. 3 | 種族 + 帰

還 | 22

1章：『錬金術師、駆け出しに出会う』

Recipe. 4 | 猛牛 + 一

級 | 34

Recipe. 5 | 金欠 + マ

ズポ | 44

Recipe. 6 | 劍姫 + 眠

り神 | 57

Recipe. 7 | 黒衣 + 白

髪 | 67

Recipe. 8 | 無茶 + 炉

の神 | 78

2章：『錬金術師、オラリオを駆ける』

Recipe. 9 | 怪物祭 +

悪戯神 | 89

Recipe. 10 | 新種 +

大虎 | 100

Recipe. 11 | 少女の戦い

+ 少年の戦い | 111

Recipe. 12	才能	+	思わぬ再会	185
茨道				
Recipe. 136	3章：『錬金術師、リヴィラを訪れる』		執着	198
Recipe. 13	お誘い	+	Recipe. 18	九魔姫
場違い			Recipe. 19	魔導書
Recipe. 14	冒険者の街		思惑の交差	211
+	事件	148	Recipe. 20	報い
Recipe. 15	食人花	+	救い	224
調教師			Recipe. 21	奪還
Recipe. 16	鍛冶師	+	結成	238
折り返し			5章：『錬金術師、小さき英雄を見る』	
Recipe. 17	神の嫉妬		Recipe. 22	落とし物
4章：『錬金術師、パーティを組む』		172	+	変身魔法
Recipe. 23			Recipe. 23	焦り
Recipe. 251			+	

	白巫女	—		263
	Recipe.	24	強襲 +	
	とある受難	—		276
	Recipe.	25	痛し痒し	
	+ 震撼	—		290
	Recipe.	26	魔剣鍛冶師	
	+ 小さき新人	—		305
	Recipe.	27	上層の長	
	+ 中層への道	—		319
	6章：【過去偏】『錬金術師、弟になる』			
	Recipe.	28	手伝い +	
	恐竜 + 射手	—		332
	Recipe.	29	激マズ +	

忠犬 + 獣好き

序章：『錬金術師、サポーターを雇う』

Recipe. 1 — ソロ冒険者 + 日雇いサポーター

その街には多数の『神』がいる。

神々は神界での退屈な日々から抜け出し、地上へ各々の欲望を満たしにやってきた。

その街には多数の『冒険者』がいる。

冒険者は神の名を冠するファミリアに入団することで神より恩恵を受け、モンスターの蔓延るダンジョンへと向かっていく。冒険者が求めるものは多種多様。金を求める者がいれば、力を求める者もいる。

…もしかしたら、『出会い』を求める冒険者もいるかもしれない。

そんな迷宮都市『オラリオ』には、今日もダンジョンへ向かう冒険者やそれを見送る神の姿があった。ダンジョン入口でパーティーメンバーを待つ冒険者もちらほら。

そんななか、冒険者というにはあまりに華奢な女の子がポツンと一人、ダンジョン入口近くのベンチに腰かけていた。

「はあ、これからどうしましょうか…」

彼女は困っていた。理由は至って単純、彼女を雇う冒険者が、その日のダンジョン探索をドタキャンしたためである。ドタキャンと言っても中止の連絡など未だにない。過去にも同様の出来事があったために、彼女がそう結論付けただけだ。それでもその予想が間違っていないという確信が、彼女にはあった。

——実際、そうなのだが。

”雇う”という言葉が示すように、その冒険者と彼女は雇用関係にある。

彼女は『サポーター』としてダンジョンで冒険者の戦闘、探索を助ける役割を担っている。小人族、通称『パルウム』と呼ばれる種族である彼女は、前線で武器を振るい戦うことには向かない。

しかし彼女には神の恩恵『ファルナ』によって得た、重量補正のスキルがあった。これにより彼女はサポーター、いや、”荷物持ち”として同行することができる。ドタキャンされることもあるが、探索に向かつてもパルウムの少女である彼女を見下し、お荷物扱いし（荷物を持つている立場なのである意味では正しいかもしれない）、分け前は雀の涙。しかしそれも慣れっこであった。

「とりあえず、ここにいても仕方ありませんね。」

既に長時間待った。今更契約した冒険者が現れるとは思えないし、万が一にも来たと

ところで、言い訳に足る時間は経ったはずだ。…言い訳をしたところでどんな罵詈雑言が返ってくるか分かったものではないが。

彼女は腰を上げ、その体にはあまりに不釣り合いな大きいバックパックを背負った。そして予定のなくなった今日をどう過ごすか考え始めたその時、

「あー、間違つてたら悪いんだが…、もしかしてサポーターだったりするか?」
彼女を呼び止める声でした。

その声ができる方を振り向くと、そこには一人の青年が立っている。

一般的にも長身の部類となるであろうその体に軽装ながらもしっかりと鎧を纏っており、背中に背負う少し細身の大剣も合わせれば彼が冒険者であることが分かるだろう。

「たしかにり、…私はサポーターですが、あなた様は?」

「あ、悪い悪い。俺はアルク・サルマン。冒険者だ。」

冒険者と言う自己紹介に「でしようね」とは言わない。ドタキャンで多少不機嫌であつてもそれを態度には出さない。相手が冒険者であればとりあえず顔を買っておいて損はないだろう。それが彼女が経験から得た知恵なのだ。

(しかし、アルク・サルマン…。どこかで聞いたような…)

青年の名前に引つ掛かりを覚えたが、記憶を辿る前に彼は本題を話し始めた。

「で、なんだけど、もしパーティ探しとかしてるんだったらさ、俺の探索に付き合ってくれないか？」

渡りに船とはこういうことを言うのだろうか。元々探索に行く予定がご破算となった彼女には願ってもない依頼だ。

「あなた様のレベルと、パーティについて伺っても？」

とは言え事前に確認をとることも必要。サポーターとしての仕事を難なくこなしてきた彼女であるが、急にダンジョンの奥深くに連れていかれては困りものだ。

「俺はレベル2。パーティはいない。ソロでやってる。」

見た目にはしつかりとした装備であり体も鍛えているようだったため、レベル3の可能性も考えていたが、そこまでではなかったらしい。ソロでやっているために成長も伸び悩んでいるのかもしれない。

「では私も。私はリリルカ・アーデ。レベル1のサポーターです。今日は契約している冒険者様が来られなくなつたということで、予定が空いたところでした。荷物運びと簡単な援護射撃程度しかできませんが、それでもよろしければ、本日限りの契約ということとぜひ同行させてください。」

契約済であることを伏せるか少し迷つたが、後にトラブルとなつては何かと面倒だ。彼女——リリルカは偽ることなく現在の事情を話すことにした。

「それは良かった。俺もちよつと今日は必要な数が多くてな。1人じゃ何往復か必要かと思つてたんだ。助かるよ。」

「ということは、何か探索の目的となるものがあるのですか?」

「ああ、中層手前あたりで薬草をな。」

「(薬草…) 中層手前となると、11、12階層あたりでしょうか。それでしたらり、私でもお力になれるかもしれません。」

薬草という言葉に再び引つ掛かりを覚えたが、どうにも思い出せそうにないためリリル力は気にしないことにした。

「じゃ、早速出発するか。用意とかは、今のままで大丈夫か?」

「はい、上層であれば個別に対策が必要なモンスターもいませんから。」

「だな。ま、分け前のこともあるし、モンスターはなるべく狩つてこう。」

(分け前…)

多くのモンスターを狩ることができれば、雀の涙も多少マシになるだろうか。

そんな淡い期待を胸に、リリル力はダンジョンへ向かう青年——アルクの後を着いて行くのだった。

「オラアーン！」——ドカアーン！

ダンジョン探索は特に問題もなく順調だった。

「ウォリャーン！」——ボカアーン！

中層の探索も可能なレベル2のアルクがいるのだから、上層で順調なのは当然と言えば当然なのかもしれないが。

薄暗いダンジョンの中、アルクは今も単眼の蛙型モンスター、フロッグシューターの群れを蹴散らしている。その豪快さはモンスターに同情してしまいそうになるほどである。

そのせいだろうか、いつもより気持ちに余裕があるリリルカは、アルクについてあることが気になっていた。

「あの、差し出がましいとは思いますが……。」

「うしつ、終わりつと。……ん？何かまずかったか？」

「いえ、先ほどからひたすら拳でモンスターを殴り飛ばしていますが、その背中の剣は、お使いにならないのですか？」

それは、アルクの戦闘スタイルだった。彼は襲ってくるモンスター全てをパンチのみで倒しているのだ。確かに頑丈そうな手甲をしているため、拳闘士といえればそうなのか

もしれないが、そう考えた場合、背中に抱える大剣は邪魔にしかならないのではないだろうか。

「ああ、これか？一応近接戦闘が面倒なモンスター相手だと使うこともあるが、基本使わないな。」

「では、なぜ持つて来たのですか？上層であれば、レベル2のサルマン様なら刃物を持つとしても小型のもので問題ないように思えるのですが。」

「小さい頃から引きずりながらもずっと背負ってたからな。落ち着くんだよ。それに、いざって時のための備えにもなるしな。」

「サルマン様が宜しいのでしたら、私は何も言いません。お時間を使わせてしまいすみませんでした。先へ進みましょう。」

「おう！と、ちよつと待つてくれ。少し体力回復しときたい。」

「休憩ですか？そこまで疲れているようには見えませんが…。」

現在は9階層を進んでいる。10階層では出現するモンスターやその戦闘方法も変わってくるが、それを加味しても休憩が必要になるほど疲れているようにはとても思えない。

「いや、ポーションでさっさと済ませるさ。休憩をとるほどじゃない。」

「ポーション、ですか？」

リリルカは驚いた。ポーションを使えば確かに短時間で体力を回復できるが、決して安いものではない。上層よりずっと下へ向かう冒険者であれば何本も常備して当然なのかもしれないが、ここは上層で、しかもアルクはレベル2だ。もしかすると、僅かな体力回復にもポーションを使えるほど彼のファミリアは裕福なのだろうか。

そういえばファミリアのことはお互い話していなかった、とリリルカが考えていると、アルクはあるものを取り出した。流れからすればそれはポーションであるはずなのだ、それはリリルカが知るポーションとは少し様子が違っていた。

「少し、濁っているような……これ、大丈夫なんですか？」

通常のポーションは透き通った明るい青色をしている。しかし、アルクの取り出したそれは、明らかに透き通ってはいなかった。色も青っぽくはあるが、どちらかと言えば紺色に近い。リリルカは考えを改めた。この男は、腐ったポーションを安価で売り付けられているのかもしれない、と。

リリルカがそんなことを考えているとは知らず、アルクはポーションらしき何かを一気に呷った。

「ああ、まじい……。まったく未だにこの不味さとはなあ。」

「やはり、悪くなっているのではないですか？」

「ん？あーいや、これは仕方ないんだ。俺の腕がまだまだだつてことだからな。」

俺の腕、という言葉がリリルカは気になった。葉草採取が目的であることと合わせて考えると、1つの答えに行き着く。

「もしかして、サルマン様は薬屋の方なのですか？」

「よく分かったな。俺は『ミアハ・ファミリア』所属なんだ。うちの医神様は顔が広いからな。聞いたことくらいはあるだろ？」

「ミアハ様……。あの、傷ついた人には無償でポーションを与え、数多の女性には無駄に笑顔を振り撒くという……」

「まあ、……間違っちゃいないな。」

多少悪意を感じる解釈ではあるが、概ねその通りなのでアルクは否定しなかった。

ポーションについてはファミリアの存続にも関わるため少し控えてもらいたいものではあるが、アルク自身そんなミアハの優しさに救われた身なので強くは言えない。女性の方は、あまりに誰彼構わず惹きつけてしまうため、客引きとしての効果はほとんどない。皆のミアハ様状態である。

アルク以外では唯一の団員となる団長様は、そんな神様に日々頭を抱えていたりするのだが――。

「では、そのポーションはサルマン様がご自分で調合されたんですか？」

神様の話もそこそこに、リリルカはアルクが飲んだポーションについて尋ねた。

「俺が作った、のはそうなんだが、調べてわけじゃない。」

「え？ 調合しないでポーシオンを作ったんですか？」

リリルカは混乱した。ポーシオンを調合しないで作る。それはつまり、材料を調理せず、に料理を作ると言っているようなものだ。 ”作る” というからには ”調合する” という過程は必要なのだ。

「ま、方法はかなーり特殊なんだけどな。」

ポーシオンを作る上で ”調合” という過程をすつ飛ばして完成させられる方法。

その答えに行き着く様子もなく首を捻るリリルカに、アルクは解答を口にした。

「俺は『錬金術』が使えるんだよ。最も、薬関連限定なんだけどな。」

仮にポーシオンの製法をアルク側から問題として出題したならば、この解答はあまりに理不尽だ。

オラリオで人気の食べ物である『ジャガ丸くん』の作り方を聞いて、 ”ジャガ丸くんを作る魔法を使った” をいう答えが返ってくるのと同じだ。それで解答になるなら何でもありだ。

「錬……金……。あ——」

しかしリリルカには、その答えを導くことができる記憶があった。

——レベル2、——ミアハ・ファミリア、——ポーシオン、——そして錬金術。

ようやくリリルカの中で引っ掛かっていたものが分かった。
もしかして、サルマン様はあの『災禍^パの薬箱^ド』なのですか!？」
その不名誉な『二つ名』に、アルクは苦笑するしかなかった。

Recipe. 2 | 悪評 + 錬金

『災禍の薬箱（ハンドラ）』。

それは、アルクがレベル2にランクアップした際に神々によって与えられた二つ名だ。

ダンジョン探索において偉業を為し、ランクアップを遂げた冒険者に”災禍”とはあまりに酷い二つ名ではあるが、それには当然理由がある。

それは、彼の使う”錬金術”だ。

彼の錬金術を正確に言うのであれば、魔法『錬金混成』^{アルケミックサ}。この魔法の厄介なところは、一重に”何が出来るか分からない”というギャンブル性である。

主にドロップアイテムを使用して薬を錬成する魔法なのだが、素材が上層のものであるためか、はたまたアルク自身の未熟故か、出来上がるのは不良品ばかり。飲んだ者も状態異常にする薬もあれば、そもそもまともに口にできない味や臭いものもある。魔法の行使に必要な精神力^{マインド}はもちろん消費するのだが、下級モンスターを倒していれば手に入るといいう手軽さから、主神・ミアハが無償で渡す分には丁度良いと提案し、出回ったが最後。顔の広いミアハの影響もあり、アルクの薬の不味さは広く知れ渡ったのだ。

そしてそんな面白い話を神々が放っておくはずもなく、アルクがランクアップした際には、ミアハの健闘する間もなく不名誉な二つ名が与えられることになった。

レベル2になったことで良品が出来る確率や薬の味も多少は上がったのだが、“災禍の薬箱”という二つ名はオラリオ中に広まり、一部では“マズポ（不味いポーションの略）のアルク”とも呼ばれている。

「ランクアップから結構経つけど、やっぱ簡単に忘れてはもらえないか。」

そもそも二つ名については切っても切れないものなので、その由来となる彼の薬の評判も変わりはしない。

「薬の質についてはあまり気にしていませんでしたが、“錬金術”が使えるという点ではとても珍しい魔法ですので、結構噂になっていたと思います。」

「まあそうだろうな。不味い薬の“犠牲者”はそう多くなかったはずだ。」

状態異常を引き起こす薬はアルクには分かる。悪臭を放つ薬などは言わずもがなだ。つまり街に巡回したのは、悪臭のしない不味い薬、あるいは軽い副作用のある薬だ。

「状態異常になるやつは無理だが、ただ不味い”だけ”のポーションはもつたいないからな。探索の時に使うようにしてるんだよ。」

「えつと…、く、苦勞されているん、ですわね…。」

珍しくも使いづらい魔法に悩まされるアルクに、今度はリリルカが苦笑することになった。

ちよつとしたアルクの身の上話を終え、2人は1-1階層へと辿り着いた。アルクの目的である薬草は、この階層からよく見られる。10階層より雰囲気が変わったダンジョンもレベル2のアルクには問題ない。アルクが薬草を見つけ、リリルカがそれを採取する。その間、アルクは周りの警戒に当たる。即席パーティではあったが、それぞれの役割がはつきりしているため、薬草集めは思った以上に順調だった。

「いつもなら1-2階層に行く前に荷物が結構いっぱいになるんだが、アーデがいてくれるから、1-2階層での採取もいけそうだな。」

「お役に立てているのなら、何よりです。」

リリルカの”硬い”返答に若干肩をすくめながら、アルクはドロップアイテムを拾っていた。

そしてリリルカはそんなアルクの様子をジッと見ていた。

(また何かを拾ってる。魔石は確認しましたから、ドロップアイテム？でも別のモンスターに出ているのも同じようなアイテムだった気が…)。

モンスターを倒した際に、得られるものは、基本2種類となる。

1つは魔石。モンスターの核とも言える石で、それを破壊すればモンスターを倒すこ

とができるし、破壊せずに倒しても魔石は消えないため、そのまま地上に持ち帰り換金することが可能だ。

そもう一つは、ドロップアイテム。モンスターの一部がアイテムとして残ることがあるのだ。もちろん持ち帰って換金することも可能だが、アイテムによつては加工して武器や防具にしたり、粉にして薬の材料にすることもできる。

ただ、アルクが回収しているアイテムは、そのどちらともつかないものだった。

魔石のように、形状はどのモンスターからも同じようなものだが、その頻度はドロップアイテムのように低い。

何よりリルルカが気に入らないのは、その謎のアイテムをアルクが全て拾っていつてしまうことだ。サポーターであるリルルカは重量補正のスキルもあるため荷物持ちとしてその力を遺憾なく発揮できる。それなのに前衛で戦うアルクが荷物を増やしていくのは明らかに効率が悪い。

それにアルクが拾っているのは、リルルカも知らない魔石やドロップアイテムとは違う第3のレアアイテムかもしれない。それを独り占めにしようとしている可能性がある以上、リルルカも放つてはおけない。

(やはり、この人も……)

しかしただの小間使いとして扱き使われてきたリルルカは、何か納得したような気分

だった。貴重なアイテムをただのサポーターに分ける訳にはいかない。つまりはそういうことなのだろう。別にいつもと変わらない。サポーターにはおこぼれで十分。そういうことだ。

リリルカが諦めたような視線をアルクに向けていると、それに気づいた様子のないアルクは何かを考えていた。

「やっぱやめとくか?…でもなあ、1回くらいならー。」

その手には先ほど拾った謎のアイテム。それを手の上で転がしながら、何かを決めあぐねていた。自分に対する当てつけとしてアイテムを見せびらかしているのだろうか、と思考がどんどん暗いほうへと向かっていくリリルカだったが、突然アルクは何かを決めたように頷き、リリルカの方へと歩いてきた。

「なあ、”錬金術”、見てみるか?」

「え?」

唐突な提案に、リリルカは戸惑った。いったいどんな流れで錬金術を見せるという話になるのだろうか。

「少しは使つとかなないと、魔力も上がらないからな。」

確かにステータスの中の”魔力”は、魔法を使用することで上げることができる。そのため魔法が発現しなければ、魔力は0のままなのだ。しかしそれならば、道中で使っ

ても良かったはずだ。なぜこのタイミングなのだろうか。

「なぜここに来るまで使わなかったのですか？」

特に聞かない理由もなかったため、リリルカは尋ねた。

「いや、鍊成には素材が必要だろ？その素材に魔石やドロップアイテムなんかも使うんだよ。1人なら心置きなく使うんだが、今回は収穫の配分もあるからな。」

「—え？」

リリルカは耳を疑った。アルクは収穫の配分の為に魔法を使っていなかった。つまり、リリルカに気を遣い魔法を使っていなかったというのだ。今までリリルカが契約してきた冒険者であれば、そんな事はまず気にしなかった。おそらく同じような状況になったとしても、躊躇いなく、リリルカの取り分^①を使っただろう。

「でも、鍊金用^②のアイテムが貯まってきてな。これで補填すればかなり節約出来る。」
そう言つてアルクがリリルカに見せたのは、先ほどアルクが拾っていた片手に収まる程の小さな石だった。紫色をした魔石と違い、その石は暗い赤色をしており、透き通つてはいない。リリルカはその石を間近で見ると最初に、「まるで血を固めたみたい」と思つた。

『血晶』^③つて言つてな、”鍊金”の魔法が使える俺専用のドロップアイテムなんだ。」

その名前は、まさしくリリルカの印象そのものだった。

「専用、ですか…。でしたら換金すれば、いいお金になるのではないですか？ 魔石のように魔力が込められているかは分かりませんが、希少価値は高いと思います。」

「換金は最初に試したよ。それこそ錬金より先にな。でも、鑑定中に血晶が消えちまつたんだ。どうやら錬成に使わなければ時間経過で消えるらしい。換金後に消えてたら、金をちよろまかしたと思われたかもな。」

つまり、錬成に使用しなければ荷物になるばかりのアイテムということだ。

(リリに分けるのを嫌って独り占めしていた訳ではなかったんですね…。)

アルクの言っていることが、血晶というアイテムについてごまかすための嘘という可能性もある。それでも、リリルカは不思議とアルクの言葉を疑う気にはならなかった。それに少し、”錬成する瞬間”を見てみたいという気持ちが湧いてきていた。

「血晶もそこそこ集まったし、使い道のない俺用のアイテムをアーデに持たせる訳にもいかないしな。で、だ。素材には多少魔石が必要になるんだが、使ってもいいか？」

「錬金術に必要ということなら構いません。どれくらい必要なのですか？」

「今回は血晶を多めに使うからな。ゴブリンかコボルトのが3個もあれば十分だ。」

リリルカにはアルクの使う錬金術のことは分からないが、どうやら魔石は必須だが血晶を使うことでその必要数は減らせるらしい。アルクの言う魔石の量であれば、アルク自身が倒してきたモンスターの数を考えれば、ほんの一部に過ぎない。

「それだけでよろしいんですか？ 配分を気にされていたので、てつきりもつとたくさん使うものかと思ってました。」

「ははは……。零細フアミリアだしな。貧乏性は否めない。」

（いったいミアハ・フアミリアは、どれだけお金に困っているのでしょうか…）

そんなリルルカの心の声を知る訳もなく、「じゃあ」とリルルカから魔石を受け取ったアルクは特に焦らすような素振りも見せず、魔石と血晶を地面に置いた。

「礎となれ、”結合”」

あまりにも短い詠唱で紡がれたそれは、まだ”錬成”に至る前準備。リルルカには何の変化も確認することは出来ないが、アルクの目には手に持つ血晶が細い光の線で結ばれる様子が見えていた。

”結合”は錬成に使用する素材の選択だ。素材にしたいアイテムに意識を集中し、光の線をつないでいく。ドロップしたモンスターとの相性があるのか、時折この結合で失敗することもあるのだが、今回は特に問題なく準備が整った。右手に空のガラス瓶を取り出す。ここに来る途中でアルクが飲んだポーションの空き瓶だ。

「”錬金混成”」

結合という前段階を考えなければ無詠唱となるその魔法により、魔石と血晶が引き延ばされるようにガラス瓶へと吸い込まれていく。その収束点となるガラス瓶が発光し、

それを見たりリルカは目の前の不思議な光景にただただ驚くばかりだった。

やがて魔石と血晶は消え、光も収まっていく。残ったのは、ガラス瓶の中に溜まった、濃い緑色をした液体だけだった。

「今のが、錬金術、…ですか？」

「ああ。とは言つても、あくまで俺の魔法としての錬金術であつて、本物の錬金術がどんなものなのかは俺もよく知らないけどな。」

元々発現した魔法の名に“錬金”とあるため錬金術と言っているだけである。魔石や血晶といった限定的な素材で、何の効果があるかも分からない薬を生み出す力を実際の錬金術と同一視してもいいものかは分からない。

「それで、その、薬…でしようか？ それには何の効果があるのですか？」

「ちよつと待つてな。→」
アナライズ「解析」

アルクが再び無詠唱で発動したのは、生成物の効果を知るための魔法。

”結合”、”錬金混成”、”解析”。アルクの錬金魔法はこの3つがセットとなったものだ。錬成した薬から、アルクはそれに何の効果があるのかを読み取った。

「えつと、効果は…一時的な敏捷上昇大…」

「ステータスアップですか？ いいじゃないですか！ 素材から考えれば十分にお釣りが来ます！」

アルクの評判と彼自身の話から効果についてはあまり期待していなかったりリルルカだったが、ステータス上昇という効果を聞いて、少し興奮気味になっている。しかし、効果の説明はそれだけではなかった。

「一定時間の耐久低下大、あと副作用が、上昇効果後の筋肉痛だそうだ。」

「…はい？」

リルルカの興奮は一気に冷めた。上昇が”一時的”なのに低下は”一定時間”。しかも上昇効果が切れると筋肉痛に襲われるというデメリットの追撃まであるという。

「それじゃあ、敏捷上昇の効果が切れたが最後、筋肉痛でまともに動けないうえ耐久まで低下してやられちゃうじやないですか！」

「今まで作った中じゃ、結構当たりなんだけどな。素材も低コストだし。」

「ええ……」

”災禍の薬箱”、その一端をリルルカは知ったのだった。

Recipe. 3 | 種族 + 帰還

1 2階層での薬草採取を続けていたアルクとリリルカだったが、荷物の量と帰りの時間を考え、探索を終え戻ることにした。

2人で処理するには厳しい程のモンスターの群れもなく、上層における階層主とも言われるインフアントドラゴンとの遭遇もなかったため、比較的安全な探索だったと言えるだろう。

「最後にあそこに生えてる薬草だけ採取していいか？」

「分かりました。では、私はここで荷物を整理しておきますね。」

だからだろう。あとは戻るだけだと気を抜いた2人は、それぞれ離れて単独行動をとってしまった。辺りにモンスターの気配はなく、葉の擦れる音が聞こえるほどに静かだ。しかしそれは、ダンジョンで気を抜く理由としては余りに足りない。”それ”は、着実に迫ってきていた。

「よし、こんなものかな。」

アルクは薬草を取り終え、リリルカの待つ場所へと戻ろうとしていた。しかしそこで、何かに気が付いた。リリルカがいる方のさらに遠く。階層特有の霧を掃う様に迫る

影が複数。

「っ！っ！っ！っ！っ！っ！」

アルクはリリルカの元へと駆け出した。

一方リリルカは、荷物の整理を終え、バックバックを背負い直したところだった。静かだった階層内で何かが聞こえたと思いい見してみると、こちらへ駆けるアルクの姿があった。

「アーデー！後ろだ!!」

意識を向けたことではつきりと聞こえた声。その瞬間背後に気配を、そして足元に僅かな振動を感じた。振り向いたリリルカは、ようやくその身に迫る危機を察した。

「ハード……アーマード……」

アルマジロ型モンスター、ハードアーマード。それが凄まじい速さで転がってきていた。その数4体。リリルカを狙った、というよりは何かから逃げるような勢いで向かってきている。

「逃げないっ！、あつ！」

突然の事態に体が追いつかなかったのか、リリルカは足がもつれてしまった。その間にも、ハードアーマードはリリルカへと迫ってくる。すぐさま立ち上がろうとしたリリルカだったが、一心不乱の勢いで転がってくるその群れに、自分の死を悟った。——そ

の瞬間だった。

リリルカの見える景色が一変した。視界に広がるのは空。自分がハードアーマードに跳ね飛ばされたのかと思ったりリリルカだったが、一向に痛みがやってこない。もしかしたら一瞬の内に死んで、天に昇ろうとしているのだろうか。

(天になって、昇れる訳ないか…)

自分のこれまでの生き方を顧みて、その考えに自嘲した。だが、
「間に合ったっ」

その声の主は、すぐそばにいた。

アルクの顔が、今日一番近い位置にある。なぜ、という疑問は、頭が冷静になるにつれ明らかになった。アルクがリリルカを抱えていた。その姿は、状況次第では”お姫様抱っこ”と言えただろう。しかし、大きなバックパックのせいでその光景はとても”お姫様抱っこ”と呼べるものではなかった。

リリルカが恥ずかしがるところかどうか悩む間に、アルクはその足を止めた。ゆっくりとリリルカを下ろし、…そこまでが限界だった。

「いつってえ…」

モンスターを警戒し大声は抑えているが、その体は痙攣し、少し動くのにも苦しそうにしている。

「さ、サルマン様!? 大丈夫ですか!?!ど、どこかお怪我をつ!?!」

一方でその光景に慌てたのがリリルカだった。声を抑えるのを忘れ、アルクの状況にあたふたしている。

「大、丈夫だ。ただの、筋肉、痛、だから。」

「え? 筋肉痛? ……つてまさか!」

リリルカは理解した。アルクは、12階層に入る前に錬成したあの薬を飲んだのだ。薬の効果は“敏捷上昇大”。その効果を使ってアルクはハードアーマードより先にリルカの元へと辿り着き、その場を一気に離脱したということになる。今アルクが苦しんでいるのは、薬の副作用である“上昇効果後の筋肉痛”というわけだ。

「すみません。私が警戒を怠ったばかりに…。」

「それはお互い様だろ。—つ。薬が役に立って何よりだ。—ぐつ」

未だに痛み顔に顔を歪めるアルクだったが、リリルカが無事だったことに心から安堵していた。

「流石に重くて大変だったけどな。」

「ふんっ!」 —バキッ!

安堵ついでに出た余計な一言。大きなバックパックのせいだと分かっているけど、リルカも年頃の女性なのだ。アルクに制裁が下るのも、仕方がないと言えるだろう。もっ

とも、

「ちよ、い、…今は、た、耐久がつ」

「サルマン様?！」

筋肉痛の上に”耐久低下大”の効果が残っている状態で受ける一撃は、例えパルウムの女性であるリルルカのものだったとしても、半端ではない。

アルクは、副作用の有効活用を、その身を以て学ぶことになった。

それから少し経ち、アルク達は改めてダンジョンを戻り始めた。

幸いにもアルクが筋肉痛に苦しむ間、モンスター襲撃もなく、痛む体に鞭打って戦う必要はなかった。

9階層まで戻り、ダンジョンが再び洞窟のような姿に変わると、2人はそつとため息をついた。12階層から10階層までは、遠方からの襲撃にいつも以上に気を配っていたため、気が張っていたからだ。

「そういえば、サルマン様は、ハーフエルフだったんですね。」

人心地ついたためか、思い出したようにリルルカがアルクに聞いた。抱きかかえられた時、顔が近い位置にあったため、その尖った耳が目に入ったのだ。エルフのようによく尖った耳ではなく、短く尖った耳。それは、ハーフエルフの特徴であった。

「ハーフ、というかクォーターだけだな。母親がハーフだったんだよ。」

「ではクォーターエルフ、ですか？聞いたことないですね。」

「分類としては”ハーフエルフ”になるらしい。血が薄まって耳なんかの特徴がなくなるとヒューマンになる。」

「へえ。初めて知りました。」

「ハーフエルフ自体、そんなに多くはないらしいからな。」

異種族で結ばれることもあるが、やはり多くは同種族での結婚になる。中でもエルフには他種族に触れられることも嫌う者もいるらしい。そのためハーフエルフはハーフとしては珍しい部類となる。

「エルフは魔力が高いということだったので、サルマン様が終始力技で戦っていたのが少し気になりましたが、そういうことだったんですね。」

「いや、魔力は他のステータスより全然高いぞ。」

「え？じゃあなぜ力押しでの戦い方を好まれるんですか？」

魔力が高いのであれば、それを生かした戦いの方が効率がいいはずだ。しかし、アルクは試しにやって見せた錬金術以外、魔法を使ってはいない。

「俺の師匠が根っからのパワー型だったからなあ。俺のスタイルも完全にそつちで固まっちゃった。」

「そうなんですか。お母様からは教わらなかったのですか？」

本人は気づいていないが、リリルカは普段以上に饒舌になつていた。最初は日雇いであつたためにアルクに対しほとんど関心はなかつた。しかしその豪快な戦い、二つ名、そして錬金術の実演と来れば、興味を抱かずにはいられない。

「母親は、とうるか両親は俺が小さい頃に死んだよ。」

「あ——」

だからこそ自分が踏み込み過ぎている事に気が付かなかつた。口から出た言葉を戻すことは出来ない。リリルカの顔色は次第に青くなつていく。

「ああ、気にしなくていいぞ。それこそ物心つく前の話なんだ。上級冒険者だつたとは聞いたが、その勇姿はもちろん、家族としての記憶もない。」

リリルカには、それが他人事には思えなかつた。リリルカもアルクと同じように両親が冒険者であり、そして、どちらも小さい頃に死んでいる。

（私の親は、とても誇れるような最期ではありませんでしたけどね。）

アルクの親がどのような最期を迎えたかをリリルカは聞かなかつた。聞けばきつと、自分の親と比べてしまう。比べればきつと、自分は惨めな思いをすることになる。そう考えたとき、少しだけ背中中の“恩恵”が疼いたような気がした。

その後は特にイレギュラーも発生することなくダンジョンを進むことができた。今日の戦利品を換金してもらうため、ダンジョンを抜けた2人はギルドへと向かう。

「15, 000ヴァリス! 結構稼げましたね。上層での採取メインの探索であれば十分です!」

「いや、やっぱりサポーターがいると違うな。薬草も予定より多く手に入ったし、これなら大手を振って帰れそうだ。」

換金と採取、共に満足のいく成果であった。レベル1の冒険者が1日探索しておおよそ5, 000ヴァリスの稼ぎとなるため、レベル2であるアルクがいる2人パーティであれば上層探索での15, 000ヴァリスの換金結果はそこまで高くない。しかし、今回のメインは薬草採取。モンスター討伐による魔石集めが目的ではないため、手に入れた薬草も加味して総合的には上々というわけだ。

「それじゃあ分けるか。薬草はほとんどこつちがもらうことになってたから、ヴァリスはこんなとこか?」

「…あの…サルマン様? 袋が逆ではないですか?」

薬草については出発の際に2人で話をしていたため、そのほとんどがアルクのものとなる。次いでヴァリスの配分となるのだが、リリルカはアルクが差し出したヴァリスを詰めた袋に、疑問を呈した。

「そうか? まあ薬草集めはこつちの都合だったしな。俺の配分はもつと少なくてもいいか。」

「ち、違います！リリが多過ぎるんです！サルマン様の倍はあるじゃないですか！」

アルクが5, 000ヴァリス、リリルカが10, 000ヴァリス。これがアルクの提案だ。金額的に10分の1でももらえれば御の字だろうと考えていたリリルカが慌てるのも無理はない。

「おかしくないだろ？」

「おかしいです！サポーターなんかに自分の倍のヴァリスを渡すなんて！」

「なんかじゃない。おかげで薬草もたくさん手に入ったし、戦闘も楽だったんだ。妥当だよ、妥当。」

主に荷物持ちとして同行したりリルカであったが、戦闘中には後ろで蹲っていたというわけではない。彼女は腕に装着したボウガンで援護射撃を行っていたのだ。群れを相手にする時など特にその援護は有難かった。処理できるとしても、援護があるのとなしいのでは劣する体力が段違いなのだ。

「で、でもっ」

「でもはなし！少ないってことなら考えるが、多いうってことなら遠慮なくもらつとけ。」

未だの納得のいっていないリリルカだったが、アルクが半ば押し切る形でその場は納まった。

「稼ぎも悪くないし、食事に誘おうかとも思ったが、今日は荷物があるからな。これでお

開きで良いか？」

「はい、それで構いません。」

未遂に終わってはいるのだが、アルクがやろうとしたことは詰まる所、デートのお誘いだ。特に気にした様子もなくこのようなことが言えるのは、もしかしたら彼の主神の影響かもしれない。

「今日は本当に助かった。また機会があつたらよろしく頼むよ、アーデ。」

「こちらこそです。もしその時はリリからもよろしく願います。」

一期一会という言葉もあるが、アルクは冒険者、リリルカはサポーターだ。このオリオでダンジョンに潜り続けていれば、いずれまた出会うこともあるかもしれない。

「その時は、”私”なんて固いのは最初からなしな？慣れないことはするもんじやない。」

「え？……あ。」

リリルカは、いつの間にか一人称が”リリ”になっていたことに気が付いた。初対面かつレベル2の冒険者ということで、なるべく印象は良くしようと呼び方を”私”と呼んでいたが、最後の最後でボロが出たらしい。

「じゃあな！」と別れを告げ、薬草の詰まった袋を手に帰っていくアルクの姿を、リリルカはただただボーっと眺めていた。

「…変な人でしたね。アルク・サルマン。」

ボソリと呟き、リリルカもヴァリスの詰まった袋を手に、軽い足取り歩き出した。ただし――

「どうしたんだあ？サポーター。随分とご機嫌じゃねえか。」

リリルカの現実には、そう甘いものではないようだが――。

「ただいま戻りましたー！」

「おかえりアルク。壮健そうで何より。まもなく食事の時間だ。汗や汚れを流してくるといい。」

「はい、ミアハ様」

ここはミアハ・ファミアの本拠『青の薬舗』。アルクが店に入ると、主神自らがポーションを棚に並べているところだった。

「とりあえず頼まれた薬草を渡したいんですけど、姉さんは台所ですかね？」

「そのはずだ。それだけあれば、ナアーザも喜ぶだろう。」

ナアーザとは、ミアハ・ファミアの団長である。医神ミアハの眷属は現在、アルクとナアーザの2人だけ。団員の少ない零細ファミアだが、アルクはこのファミアを気に入っていた。

「姉さん、薬草取ってきたぞ。」

「ああ、おかえりなさいアルク。かなりの収穫だったみたいだね。とても助かるよ。」

「たまたまフリーのサポーターがいてな。今日限定だけど採取に付き合ってもらったんだ。パルウムなのに大きなバックパックを背負っててな——」

アルクはその日の出来事をナアーザ、そしてミアハに話した。

ハードアーマードから女の子を救ったことを称賛するミアハ。

その時に飲んだ薬の副作用と、締まらないオチに呆れ顔のナアーザ。

今日もまたいつものように、一日が終わっていくのだった。

1章：『錬金術師、駆け出しに出会う』

Recipe. 4 — 猛牛 + 一級

冒険者アルク・サルマンは、今日も今日とてダンジョンに潜っていた。

薬草を取りつつモンスターを狩っていく。レベル2で中層の探索も許される彼だが、中層へと足を踏み入れる事はあまりない。理由の一つは彼がソロの冒険者だからだ。中層以降はモンスターの強さが上層とは大きく異なり、群れに遭遇する事も多い。一級、二級の冒険者であればともかく、三級であるアルクではソロで対処するのが困難になる。

それに理由はそれだけではない。摘んだ薬草はあまり時間が経つと劣化してしまうのだ。有効な保存方法もあるが、零細ファミリアで実現可能な保存方法では高が知れている。中層まで行って帰るのでは、日帰りにしても時間はかかる。”調合”のアビリティがあれば薬草を摘んだその場で薬ないしはその材料を作ること容易だろうが、アルクに”調合”のアビリティはないし、そもそもソロでそんなことをしていたらモンスターに狙われてお終いだ。

やはり打開策は”パーティを組むこと”らしい。ただ、多額の借金を抱える零細ファミ

ミリアに入団するような冒険者もおらず、アルク自身、”災禍の薬箱”^{パシンドラ}という二つ名のこともあり、冒険者の多くからはいい印象を持たれてはいない。名前を出した時点で気づかれるか、気づかなくともレベル2と明かせば二つ名を聞いてくる場合がほとんど。この間のリリルカ・アーデのようなケースは非常に稀なのだ。出発前に素性を明かしていれば、彼女は同行を拒んだかもしれない。

そもそもミアハ・ファミアにはもう1人、団長のナアーズがいるではないかと思うかもしれないが、彼女はとある事情で現在冒険者としては活動していない。理由はファミリアの借金の理由と共に追々語ることになるだろう。それは、アルクにとつても決して忘れられない記憶だ。

少し話が逸れたが、つまりはアルク自身が汚名返上し、パーティを組んでもらえるようにしなければ今以上の成果は見込めないということだ。

「礎となれ、”^{コネクト}結合

”そのためには、彼の悪評の原因でもある魔法”錬金混成”をどうにかしなくてはならない。

錬成される薬の質が上がれば、アルクの評判も良くなり薬屋であるファミリアの助けにもなる。

”錬金混成”^{アルケミクサ}

とは言え、その素材にダンジョン探索での稼ぎの要となる魔石を使用するため、多用する訳にもいかない。素材を補填する役割を担う専用アイテム”血晶”も、ドロップ頻度は決して高くないためあまり当てにはできない。

”解析”^{アナライズ}」

そうして稼ぎの一部を糧として生み出した薬の効果を確認したアルクはやはり今日も肩を落としていた。

「体力回復微。麻痺効果付与。一定時間の力低下小。：麻痺は流石になあ。」

ステータス低下だけならば、戦闘を回避するなどによって対処も可能になるが、状態異常については完全に探索の邪魔になる。体力を少しだけ回復するために麻痺する事を選ぶ冒険者などいるはずもない。上級冒険者であれば力、耐久などの基礎アビリティの他に、発展アビリティというものが発現する場合がある。先ほど挙げた”調合”もその1つなのだが、その中に”耐異常”というものがある。その名の通り状態異常に対する耐性を上げることができのだが、そのアビリティもアルクの劇薬の前では意味がなかった。デメリットが麻痺効果付与だけであった薬を耐異常持ちの冒険者に飲んでもらったところ、その冒険者はしばらくまともに動く事が出来なかった。

「魔石も使っちゃったし、埋め合わせにモンスター狩つとかないな。」

アルクは今9階層を先へと進んでいる。魔石も小さく血晶もほとんどなかったため、

鍊金の素材として結構魔石を消費してしまった。その見返りが麻痺薬ではため息しか出ないが、いつもの事と割り切り、アルクは減った魔石の補填に動き出した。

その時だった。アルクの耳に、何かが聞こえた。

「モンスターの鳴き声、か？だが—」

それはおそらくモンスターの咆哮。しかし気になるのは、この階層に咆哮を上げるようなモンスターがいたかどうかである。小型のモンスターが上げる咆哮にしては、重厚感があるようにアルクには感じられた。

「オークが10階層から上がってきたか？」

頭は豚、体は人のモンスター、オーク。10階層から出現するモンスターであるが、モンスターが本来の出現階層から移動することは珍しくない。自分が追っている冒険者が上の階へと逃げていけば、モンスターはそれを追い、同じく上の階へと追っていくだろう。

「放っておく訳にもいかないか。9階止まりの駆け出しがいたらやばいしな。」

同じ上層であっても9階層と10階層では攻略の難易度が大きく異なる。体格の大きいオーク以外にも、ゴブリンより知恵のあるインプ、音波攻撃を仕掛けてくるバッドバットが出現する。そのため、レベル1の冒険者にとつてその境界は1つの関所なのだ。関所をまだ越えていない冒険者がいれば、オークは流石に荷が重いだろう。

「声は…、こつちか！」

咆哮が聞こえた方向へと向かっていくアルク。その場所か近づいたことを証明するように、冒険者の悲鳴が聞こえる。下の階のモンスターが上がって来たという予想は当たっていたようだ。

「——ブルオー——!!」

間もなくアルクが辿り着く。そんな時、ダンジョンが震えた。先ほど聞こえた咆哮とは比べ物にならない覇気。レベル2のアルクでさえ、一瞬足が止まった。

「^{リストレイト}強制停止!?じやあこの先にいるモンスターってのはっ——」

強制停止とは、その名の通り相手を行動不能に追い込む事が出来る。もしオークの咆哮であるのなら、^{リストレイト}強制停止が起こるはずはない。アルクが知る、中層前半のモンスターでそれを起こすことが可能なのは、”あの”モンスターしかない。

「何でこんなところまで来てんだよ、”ミノタウロス”！」

二本の足で地に立つ巨大な猛牛が、アルクの目の前にいた。

「た、助け、——」

猛牛は、1人の冒険者を襲おうとしていた。先程の^{リストレイト}強制停止をもろに受けたのだろう。冒険者はまともに言葉を発することすら出来ない。既にその拳を振りかぶっている猛牛に、アルクは1本のガラス瓶を投げつけた。

— パリンツ

今まさに冒険者の息の根を止めんとした猛牛の後頭部に当たり、ガラス瓶は砕け散る。すると、その瞬間炎が上がった。頭が急に燃え出したことで、猛牛は慌てて拳を解き、両手で抑えることで鎮火しようとしている。”発火薬”の投擲と共に駆け出していたアルクは、両手を上げたことで無防備となつている猛牛の腹に、その拳を叩き込んだ。
 〈ブオーー!〉

猛牛はその痛み悲鳴を上げ、壁際まで吹き飛んだ。塵化しなかつたためまだ倒すには至っていないことが分かる。アルクは猛牛が再び戦闘態勢に入る前に、未だその場で固まつた状態の冒険者に尋ねる。

「おいつ、逃げるなら今だ! 動けるか!」

アルクの質問に冒険者は首を横に振つた。アルクが到着した時より膠着状態は緩和しているが、逃げられる程には回復していないらしい。もしかしたら、中層のモンスターであるミノタウロスとの急な遭遇により、精神面でダメージを負い体が言うことを聞かないのかもしれない。

「俺が背負つて、…は、無理そうだな。」

壁際を見れば、そこには今にも突撃せんと構える猛牛。アルクは逃げるという選択肢を捨てた。ミノタウロスであれば、レベル2となつて長いアルクであれば、倒すことは

十分可能だ。むしろ、アルクは最初の一撃でミノタウロスを倒すつもりだったのだ。

「あんなにタフだったか？最近相手にしてないが、ガラ空きの腹に一発ブチ込んだ割に立て直しが早過ぎるだろう。」

レベル2でありながらミノタウロスの出現階層まで行くことがほとんどないアルクだが、戦闘経験がない訳ではない。群れであればともかく、単体を相手に手こずるとは思えない。自分の腕が鈍った可能性を考えていたアルクだったが、そこで、地面に落ちた布切れに気づいた。大きく裂けているそれは、元は袋だったのだろう。裂け目から零れたと思われる紫色の小さい何かが、布切れの周辺に散らばっている。

「あれは…、魔石か？…まさかっ——おいつ、アイツもしかして、魔石を”食った”のか！？」

その問いに冒険者は、首肯で応えた。アルクの背に、ゾクリと悪寒が走る。ダンジョン内のモンスターの強さは、基本的にギルドが定めたランクから外れることはない。しかし、モンスターはある事を行い、冒険者というステータスアップ、あるいはランクアップに相当する効果を得られる。それが、”魔石の摂取”。モンスターは、魔石を体内に取り込むことで強化されるのだ。ランクが変化するほどに強化してしまったモンスターを、ギルドは”強化種”と定めている。

「道理で耐久が高過ぎると思った。強化種には見えないが、厄介だな。」

もしミノタウロスの強化種であったのなら、厳しい戦いだっただろう。しかし、不幸中の幸いか、目の前の猛牛は強化種には至っていないようだ。痺れを切らせたのかアルクへと突進してくる猛牛に対し、アルクは背負っていた剣を地面に突き立てた。

「来いよ牛野郎！」

〈ブモォー！〉

アルクの声に答えるように咆哮する猛牛は、アルクを貫かんとその角を突き出しアルクに激突した。しかしその角、はアルクの体に届かない。地面に突き立てた剣が、角をしつかりと受け止めている。突進の勢いを殺された猛牛の頭にアルクは再び拳を叩き込む。

「沈めー！ー！っ！」

最初の横へと吹き飛ばす一撃とは違い、今度は上から地面へと振り下ろす一撃。言葉の通り、猛牛の頭が地面に沈む。今度こそ倒したか、そう思った次の瞬間、地に伏せた猛牛は両腕に渾身の力を込め、強引に上半身を持ち上げた。

〈ブルオーー！ー！！〉

「くっ——！」

その状態から繰り出されたのは、リストレイト強制停止付きの咆哮。アルクはそれを、ほぼゼロ距離で受けてしまう。レベル1であれば心臓すら停止し兼ねないその咆哮だが、アルクは

何とか耐えてみせた。しかし強制停止の効果を完全に防ぐ事は叶わず、一瞬、アルクの動きが止まった。

「やべっ」

それを猛牛は決して見逃さなかった。いや、既に猛牛は、アルクを殺す事しか頭になるのかもしれない。腹と頭に受けた強烈な一撃に満身創痍となりながら、己をその状態に至らせたアルクへと、今度は猛牛が拳を叩きつけた。アルクの体は一直線に壁へとぶつかり、その壁面を崩壊させる。

「くそっ、いつてえ…。」

アルクの体中に痛みが走る。辛うじて手甲を盾に出来たため骨にまでダメージはないが、アルクの顔は、痛みに歪む。それでも痛みが引くのを待っている暇はない。今一度立ち上がるうとしている猛牛に、もう構えは取らせない。次で最後、とアルクが駆け出そうとしたその時――

「オリヤー!」

今度はミノタウロスの全身が地に沈んだ。最早動く事すらなくなったその体は、間もなく塵となり消えていく。最後に残されたのは、魔石だけだった。アルクが呆気を取られていると、ミノタウロスがいたその向こうに、人影が見えた。

「よし、これでこの階層も終わりかな。」

彼女は褐色の肌をしており、その露出の多い服装と合わせると、アマゾネスと呼ばれる種族である事が分かる。未だ呆気に取られていたアルクであったが、そのアマゾネスが、顔見知りである事に気が付いた。

「なんだ、テイオナじゃねえか。」

「ん？あ、アルクだ。やつほー！」

元氣にアルクへ手を振る彼女は、レベル5の第一級冒険者だった。

Recipe. 5 — 金欠 + マズポ

アルクがティオナ・ヒリュテと出会った場所は、彼の本拠である”青の薬舗”だった。その日はナーザとミアハが薬の材料の仕入れのために外出しており、アルクは店番をしていた。冒険者にとって即時回復効果のあるポーションは必需品とも言えるため、決して客がない訳ではない。ただ、医療系ファミリアとしては今のミアハ・ファミリアは規模が小さいため、大手であるディアンケヒト・ファミリアなどに客を取られてしまいがちだ。

「今日も売れ行きは順調、と。」

人手も少なく主神が無償でポーションを分け与えたりもするため、売れ残る事はあまりないが、その利益は微々たるものである。売れ行きだけでも順調でないと大変だ。

「んー、500ヴァリス…やっぱり同じかあ…。」

「流石にそれより安いポーションはそうそう見つからないと思いますよ？」

アルクが帳簿などに目を通してしていると、いつの間にか新たな2人の女性客が来ていた。1人は商品棚の前に項垂れる短髪のアマゾネス。もう1人は山吹色の髪を1本にまとめているエルフだ。アマゾネスはポーションの金額を見て唸っている。

通常のポーションは、基本的に500ヴァリス以上で売られている。これ以上安いポーションは、出来が悪いと判断され、店の評価にも影響が出てくる。信頼出来るポーションの最安値が500ヴァリス。これは医療系ファミリアでは、暗黙の了解のようなものだった。

「ねえ」

アマゾネスの少女はアルクへと話しかけてきた。その少女の先程の言動を見れば、次に来る言葉は想像できるだろう。

「ポーション、もうちよつと安くならない？」

「ダメだ。」

「即答!？」

案の定、少女はポーションを値切ろうとしていた。そのためアルクの返答も準備済み。ここで値切ってしまったえば、500ヴァリス以下でポーションを売っている店として噂になりかねない。そうなれば、お得というだけではなく先述の通り、薬の出来も疑われる要因となる。しかもミアアハ・ファミリアには“マズポのアルク”がいるのだ。下手にポーションを安くすれば、彼の作った不味いポーションを売っていると思われてもおかしくはない。

と、いろいろ理由を並べてはいるが、そもそもとして値切りなどナーザーが許すはず

がない。現在の値段でギリギリの財政なのだ。

「そこをなんとかっ！」

「無理だ。それ以上安くしたらウチが潰れちゃう。」

1回くらいならと思わなくはないが、残念ながらナアーザはその1回の値切りも見逃す事はないだろう。少女も困っているようだが、ぶつちやけこつちはもつと困っている。

「す、すみません。急に無茶なお願いをしてみました。」

再び項垂れるアマゾネスに代わり、今度はエルフの少女が話しかけてきた。彼女はおそらくアマゾネスの少女の付き添いとして来たのだろう。ここに来るまでも薬屋を回っていたのか、その顔からは疲れが見える。何の気なしに少女の顔を見ていたアルクだったが、ふと少女と目が合った。

「ん？何か？」

「あ、いえ、その…：ハーフエルフの方なんだなあ、と。」

顔——正確には耳だが——を見ていた事に気づかれたのが恥ずかしかったのか、エルフの少女は顔を赤くしてアルクに答えた。

「母親がハーフエルフだ。俺はそのさらに半分。」

「へえ…。あつ、すみません。私自身エルフなので、つい気になってしまつて。」

高貴、潔癖という性質の多いエルフの中では、彼女はかなり穏やかであるらしい。エルフによつてはヒューマンとエルフが結ばれた証であるハーフエルフという存在を特に毛嫌ひする事もある。自分から話しかけてくる彼女のようなエルフは珍しい部類だ。「いや、構わんよ。まあエルフだった祖母の事は良く知らねえし、サルマンつてのも父方の名前だから話せる事はなさそうだけどな。」

「そうですか、…つて、え？サルマン？」

アルクは何かに思い至つた少女に肩を落とした。彼女も知っているのだろう、彼の噂を。そして名誉とは程遠いその二つ名も。しかしアルクが予想していた反応は、別の所からあつた。

「もしかして、アルク・サルマン!?あの、”錬金術”が使えるつていう!?”

今の今まで項垂れていたはずのアマゾネスの少女がカウンターに乗り出す勢いでアルクに詰め寄つてきた。その目は爛々と輝いている。

「あ、ああ。そうだが、…どうしたんだ？」

「錬金術！見せてっ！」

とても分かりやすい。非常に簡潔な要望である。

「テイ、テイオナさん！いきなりそれは失礼ですよ！」

「ん？テイオナ？」

そしてやはりそれを諫めるエルフの少女。少女の苦勞が偲ばれる。と、そこでアルクは少女が呼んだ名前に聞き覚えがある事に気が付いた。実際に面識があるという訳ではなく、どこかでその名前を聞いたような気がするのだ。

「あ、私はティオナ・ヒリュテ。これでもレベル5の一級冒険者なんだよ!」

「そうか、ロキ・ファミリアの”大切断”^{アマツン}だったんだな。噂は聞いてるぞ。」

「え?どんな噂、どんな噂?」

楽しみという気持ちを隠す事なく聞いてくるティオナ。アルクはその姿に和みつつ、少し悪戯っぽ笑みを浮かべて答えた。

「ゴブニュ・ファミリアの鍛冶屋でな。稀少^{アダマンタイト}鉱石をふんだんに使った努力の結晶をすぐ

にボロボロにしてしまう、って嘆いてた。」

「噂ってそつちいー!?!」

悪評についてはアルクも人の事は言えないが、鍛冶系であるゴブニュ・ファミリアに限定すれば、ティオナの悪評もかなりのものである。

「で、最強ファミリアの”大切断”様が何でここに?自分で言うのもあれだが、レベル5がアイテム補充するには品不足だと思っぞ?」

「いや、そのお、…お金があ…」

「ファミリア的に、結構稼いでるんじゃないのか?」

「そりゃファミリアにはあるけど、あれは遠征とかに使うの！私個人については別！」

つまり彼女が個人的にお金がないらしい。レベル5ともなればそうそうお金に困るとは思えない。使うとしても、アイテム補充や武器・防具の——。そこでアルクは気づいた。既にその理由を知っているではないか。

「武器のメンテ、か。」

「……うん。」

稀少鉱石の武器を度々修理に出す鍛冶師泣かせの彼女だが、当然その修理代は彼女が払うのだ。もちろん彼女の武器なので、彼女のポケットマネーから、である。

「次のメンテのお金がやばそうじゃあ。アイテム補充に使うお金を少しでも減らそうと思ってるんなお店を見てるんだけど……。」

「で、エルフの彼女は？」

「あ、申し遅れました。私はレフィーヤ・ウィリデイスと言います。今日は予定がなかったので、テイオナさんに連れ出されて……。」

「……大変だな。」

「は、ハハハ——」

「ひつどーい！そりゃあ私の都合でレフィーヤを連れ回してるのは事実だけどさー！」

一応自覚はあるらしい。それならやめておけばいいとも思うのだが、なんとなくだが

それはきつと無理なのだろうと思ひ、アルクはそれ以上何も言わなかった。

「そ・れ・でっ、見せてくれるの？ 錬金術！」

テイオナとしてもあまりその話題を続けたくはなかったのだろう。それが本題とばかりにアルクに錬金術の実演を要求し始めた。アルクも別に出し惜しみをする理由はないのだが、魔法”錬金混成”の行使には足りないものがある。

「残念だが、見せられない。魔石や専用のアイテムを素材に使うから。魔石はギルドで換金するから、使うのは基本的にダンジョン内だ。」

「そうなんだあ。それじゃ仕方ないねえ。」

思ひの外あつさりとテイオナは引き下がった。そもそも食い下がられてもどうしようもないが。

「代わりつて訳じゃないが、その錬金術で作ったポジションなら、ここにあるぞ。」

「あ、知ってる！ マズポでしょ？ 不味いポジション！」

「私も聞いたことがあります。”マズポのアルク”さん、でしたっけ？」

決して間違つてはいない。間違つてはいないが、アルクは大きな精神ダメージを負つた。さらに、今までフォローに回っていたはずのレフィーヤまでも追撃をかける。2人に悪気はないのだと言ひ聞かせ、アルクは何とか持ち直した。

「確かに不味いが、通常のポジションの半分くらいは効果があるんだぞ？」

「不味い上に、効果は半分？」

返す言葉もないとは正にこの事。再びグサリと精神攻撃を受けたアルク。レベル5ともなれば、言葉だけで人を追い込むことが出来るのだろうか。

「——タダだ。」

「え？」

「この不味くて効果も半分程度のポーションなら、タダでやる。」

元々売り物にならない不良品だ。勿体ないという事でアルクがダンジョン探索時に使用していたのだが、中層まで下りる事もほとんどないアルクからすれば、必要になる事はないのである。

「不味い…、効果半減、…でも、…タダ！」

彼女の葛藤にアルクは泣いた。ともすれば、タダでも要らないという事だろう。最悪不要になる事もあり得るが、アルクはマズポのストックを裏から取り出した。

「決めた！そのポーション、ちょうだい！」

不要にはならなかったようだ。背に腹は代えられないという事であっても、僅かに需要があった事を喜ぶ事にしたアルクであった。

「それじゃあ遠慮なく持つて行ってくれ。と、その前に注意点がある。」

「えっ、まだ何かあるの？」

「1つ目だが、このポーシオンは飲み薬だ。傷に掛けても治らない。2つ目、というかまあこれは出来ればの話なんだが、空き瓶は戻してもらえると助かる。」

1つ目についてはアルクが錬成した薬の特徴でもあった。普通のポーシオンは傷に掛けることでその傷を治す事が出来るが、アルクの不良品では不可能。体力回復と治療力の促進までなのだ。2つ目に関しては言うまでもなく貧乏性。薬を入れる瓶もタダではないのだ。緊急時であれば丁寧に空き瓶をホルスターなどに戻す時間もないだろうが、アルクのマズボがそんな事態で使われる可能性は低いだろう。しかしレベル5クルスの戦闘であればその際に瓶が割れる事もあるだろうと思い、アルクは返却に関しては可能な限りとした。

「ちえつ、掛ける方で使えば味なんて関係ないと思ったのに。」

ティオナの意見にはアルクも同意せざるを得ない。せめて傷薬としての使用が可能であれば、”飲み薬としては適していない”という注意書きの上で活用できたかもしれない。唯一のデメリットである不味さを回避出来ないあたり、やはり不良品なのである。

「どうする？何なら不味くはないが、ステータスダウンや状態異常のおまけが付くポーシオンも用意出来るぞ。」

「そ、それはもうポーシオンじゃ…。」

レフィーヤの眩きにも、やはり同意せざるを得ない。それを理解している故に、アルクはステータスダウンや状態異常付きを出すつもりはない。ダンジョン探索に直接被害が出ては仕方がない。

「そつちのはいらないけど、…うん、もらう！ちょうだい、マズポ！」

半分冗談のつもりだったのだが、この一級冒険者はいったいどれ程お金に困っているのだろうか。

「分かった。とりあえず今ある分は渡すが、その前に試飲しとくか？」

「する！噂のマズポ、どんな味が知りたい！レフィーヤも飲んでみようよ。」

「わ、私は遠慮しておきます。」

試飲を断るレフィーヤに不満気味のテイオナだが、アルクもわざわざ被害者を増やすような事は避けたい。百聞は一見、いや一飲に如かずということで、早速アルクはテイオナにマズポを差し出した。初めは通常のポーションとは少し異なるその色に多少警戒したテイオナであったが、意を決してそれをグイッと飲み干した。

「おお、試飲のはずだったんだが、一気にいったな。」

「大丈夫ですか？テイオナさん。」

その威勢の良い飲みっぷりに感嘆するアルクと、逆に不安そうに見守るレフィーヤ。初めてのマズポを体験したテイオナの感想は、至極普通のものだった。

「——まつずう〜い。」

「予想通りのリアクションをどうも。で、どうする？ 実際に飲んでみて。やっぱりやめとくか？」

「ううん。大丈夫。我慢できる！」

流石は一級冒険者、と言つていいものかは分からないが、テイオナの気は変わらなかつたらしい。実は今の味はアルクがレベル2になつた事で良くなつた上での味であり、レベル1の頃はそれ以上に酷い味だつたと言つたら、彼女はどんな顔をするだろうか。

「分かつた。改めてマズポのストック、全部渡そう。」

「やつた！ ありがとう！」

どちらかと言えば捨てるに捨てられないマズポを一掃出来たアルクの方が感謝したい気持ちではあるが、それはそれで空しいので、アルクは彼女の気持ちを受け取つた。

「んー、でもタダでもらうだけじゃ、流石に悪いよねえ。」

「え？」

とりあえずこれで話は一段落、と思つていたアルクだったがテイオナはそうではなかつたらしい。うーんと考え込む彼女が何を言つているのかアルクには一瞬理解出来なかつた。

「いや、不良品を渡したただけぞ？見返りなんて要る訳ないだろ。」

「でも半減しててもポーシヨンの効果はあるんでしょ？これだけでもらっておいてタダっというのはちよつとなあ。」

元々アルクが勿体ない精神によりたまに使っていた程度だったため、マズポのストックはそれなりにあった。それでも不良品は不良品。アルクとしては何ももらうつもりはないのだが、ティオナはそれでは気が済まないらしい。

「何かないかなあ。あ、お金がかかるのは無理だよ？」

「それは知ってる。」

そもそもマズポを渡した理由はそれだ。下層探索時などに少しだけ薬草を摘んできてもらおうか、などと考えていたアルクだったが、そこでふと思いついた。

「じゃあ大規模な探索以外の時で良いから、ダンジョン探索に同行させてくれないか？ちよつと深いところにある薬草も欲しいしな。」

「え？そんなのでいいの？」

アルクの考えは頼むくらいなら自分で行けば良いのではないか、というものだった。本格的なダンジョン攻略であればレベル2のアルクには荷が重いが、そうでなければアルクでも同行が可能な探索範囲の時もあるだろう。もちろんアルク自身万全の態勢で臨むつもりではあるが、レベル5のティオナがいれば安全面は問題ないだろう。

「レベル2の俺でも荷物にならない程度の探索に行く時で構わない。当然準備もこつちで揃える。ま、気が向いたらつてくくらいに考えてくれたらいい。」

マズポのお返しとするには破格と言えるだろう。少し気が咎めるアルクであったが、遠慮ばかりでは零細脱出はいつまでも出来ないだろうと、探索への同行を提案した。

「いいよ。その内ロキ・ファミリアで深層に行くからその準備をしなくちゃいけないんだけど、それが終わったらで良いかな？」

「全然構わない。こつちが無理言ってるようなもんだしな。」

深層へと向かう事が出来るファミリアなど、数えるほどだろう。アルクが足を踏み入れれば、数分と持たず命を落とす事になるのは間違いない。深層へ向かった上で自分が無事帰還する事を疑う様子のないティオナに、彼女がレベル5の一級冒険者である事を改めて実感するアルクであった。

Recipe. 6 — 劍姫 + 眠り神

時は戻り、再びダンジョン内。アルクはティオナと共にダンジョンを進んでいた。アルクの背中にはミノタウロスに襲われていた冒険者。彼は2度目の強制停止リストレイトを受けた際に耐え切れず気絶してしまったらしい。

「武器を溶かしちまうモンスターか……。それは厄介だな。」

「そうなの！ 私の大双刃ウウルガも溶かされちゃってさあ。はあ、お金どうしょよ。」

彼女の武器である大双刃ウウルガは、アダマタイトと呼ばれる稀少鉱石を大量に使用している。その硬度は非常に高く、加工ともなれば鍛冶師が数人がかりで昼夜休みなく鍛える必要がある。劣化を修理するだけでも手間のかかる代物だ。それを再び一から作る事になると知れば、鍛冶師が悲鳴を上げるのは間違いないだろう。

「ファミリアでの大規模な探索でも、個人の武器は個人管理って訳か。」

「うん……。」

確かに団員全員の武器の修理や生産をファミリアが賄っていたら大変な事になるだろう。その力でレベル5にまで至った彼女ではあるが、少し戦い方を変える必要があるのかもしれない。

「そういえば、あのポーシオンは持ってたのか?」

あのポーシオンとはもちろんアルク特製のマズポである。今回ロキ・ファミリアは50階層まで探索に行ったという話だが、深層では通常のポーシオンの半分程度の効果しかないマズポは嵩張るだけのお荷物になり兼ねない。

「持って行つた!ちゃんと回復出来て助かつたよ。…不味かつたけど。」

その味を思い出したのか、少しティオナの表情が仄かに青ざめる。それに苦笑しながらも、アルクは自分の錬成したポーシオンが一応は役に立った事を喜ぶのだった。

「まあなんだ、また錬成出来たらストックしとくから、その内取りに来いよ。マズポで良ければな。もちろん、お代はタダだ。」

「うう…、お世話になります。」

自分の未来を憂いてか、アルクの気遣いの嬉しさからか、ティオナは涙目になりながらアルクに感謝するのであった。

アルクとティオナは周囲にミノタウロスの気配がないか確認しつつ、ダンジョンをさらに進む。実はこの上層で現れるミノタウロス、原因はロキ・ファミリアらしい。なんでも探索から帰る途中でミノタウロスの群れに遭遇したのだが、ティオナの武器を溶かしたという新種の芋虫型モンスターによる予期せぬ負傷や物資の損失で気が立っていた一級冒険者達を前に、散り散りに逃げ出してしまったのだという。モンスターすら逃

げ出す程となると、どれだけ殺気に満ちていたのだろうか。アルクは知りたいような、知りたくないような、何とも言えない気分だった。

7階層にミノタウロスがいない事を確認し、6階層へと上がろうとした時だった。

「あ、アイズだ。おーいっ!」

アルクと会った時と同じく元気いっばい手を振って声を掛けるティオナ。その先には金色の長髪を靡かせる美少女がいた。彼女の名はアイズ・ヴァレンシユタイン。”劍姫”の二つ名を持つ、オラリオでは有名な第一級冒険者だ。

「もう上のミノタウロスは片付いたの?」

「うん、もうこの上にはミノタウロスはいないから大丈夫。」

表情豊かなティオナと比べて、アイズは無表情。その無表情でモンスターを狩る姿からアイズを”人形姫”と呼ぶ者もいるという。そんな両極的な2人の横でアルクはある人物と睨み合っていた。

「久しぶりだな。ベート・ローガ。」

「なんだ、雑魚がまだ生きてやがったのか。」

アルクを”雑魚”と呼ぶのはティオナ、アイズと同じくレベル5の第一級冒険者、ベート・ローガ。その二つ名は”凶狼”^{ヴァナルガンド}。狼という言葉の通り、彼は灰色の毛並みの狼^{ウエッルフ}人だ。暢気に挨拶をするアルクに対し、面倒臭そうに悪態をつくベート。2人の仲

は少なくとも良好ではないらしい。

「あれ？アルクってベートと会った事あるの？」

「ちよつとな。」

それだけ答え、アルクは深く語ろうとはしなかった。ベートもフンツと鼻を鳴らしそつぽを向く。こちらの反応はいつも通りであるためティオナも特に気にする事はない。アルクの意図を察したのか、「そつか。」とティオナはそれ以上聞く事はしなかった。

そこでトントンと、ティオナの肩を叩く者がいた。それは、じーつとアルクの方を不思議そうに眺めるアイズだった。

「ティオナ、…誰？」

ティオナと共にミノタウロスを探していたようだが、ロキ・ファミリアの団員ではない。そんなアルクについて疑問に思うのも当然だろう。アルクとしても、オラリオで有名なため顔は知っているが、アイズと直接顔を合わせるのは初めてである。

「悪い。自己紹介してなかったな。俺の名前はアルク・サルマン。ミアハ・ファミリア所属の冒険者だ。」

一人背負ったままでは格好がつかないため、未だ気絶している冒険者を壁際に下ろし、アルクは名乗った。出来れば二つ名についてはスルーして欲しいところではあったが、それはアルクと共に来たアマゾネスの少女が許さなかった。

「アルクはね、あの”災禍^パの薬箱^{ソド}”なんだよ！アイズも聞いた事あるでしょ？錬金術が使えるっていう。あ、そうだ、私が飲んでた不味いポーシオンもアルクが錬成して作ったんだよ。」

「それって、ティオナがタダでもらったっていう…えっと、…マズポ、だっけ？」

とうとう劍姫からも”マズポ”という単語が飛び出してしまった。事実なので拡散元であるティオナを責める気はないが、どれだけ上達しようと”マズポ”という肩書から逃れられない気がしてきたアルクなのだった。

ファミリアの本隊と合流するため再びダンジョンを下りていくティオナ達と別れ、アルクはダンジョンから出て来た。まずはギルドへ向かい、背中の冒険者をどうにかしなくてはいけない。ついでに換金もする必要がある。ティオナは自分達が原因だからと冒険者を引き受けようとしたが、目覚めた時にダンジョンから出ていた方がいいだろうとアルクがそのまま背負い直す事にした。申し訳なさそうにするティオナと無関心とばかりにさっさと出発するベート。最後にペコリと頭を下げ2人の後を追うアイズを見て、アルクは噂もあまり当てには出来ないものだと思った。無論、アルクの噂についてはその限りではない。

アルクがギルドに着くと、彼の担当アドバイザーであるギルド職員のミイシャ・フロットがそれに気が付いた。

「あ、お帰りアルクくん。今日はちよつと早…、つて、その背中の方は？」

「ただいまつス、ミイシャさん。ちよつとミノタウロスの強制停止にあてられちゃったみたいで。ギルドでお願いしてもいいですか？」

「分かった。奥に運んでもらえる？あ、ミノタウロスつて、もしかしてさつき聞いた上層に出現したミノタウロスと何か関係があるのかな？」

「多分そうだと思います。詳しくは今探索に出てるロキ・ファミリアの団員が知ってるはずなんで、戻って来たら聞いてみてください。」

「ロキ・ファミリアね。うん、分かった。」

ある程度の事情は聞いたため、アルクが簡単に説明する事は可能だが、当事者から聞いた方が良さだろうし、何より面倒である。ミノタウロスの討伐も終わったようだったため、改めて注意喚起する程でもないかとアルクはミイシャへの挨拶もそこそこに、換金所へ向かおうとした。

そこで、ちよつと換金を終えたであろう冒険者がこちらへと向かって来ていた。白い髪と紅い眼が特徴的で、中層の中でも初期段階で出現する白い毛並みに紅い眼をした兎型モンスター、アルミラージュを連想させた。何か嬉しい事でもあったのか、彼は笑顔を浮かべている。その姿を微笑ましく思いながら、アルクは改めて換金所へと向かった。

「アイズ・ヴァレンシユタインさん、かあ……」

背後で記憶に新しい名前が聞こえた気がしたが、アルクは特に気にしなかった。

ミノタウロス事件の次の日、アルクは薬屋の手伝いをしていた。仕事内容は配達。オラリオを駆け回り薬を届けて来たが、日もかなり傾き次が最後の配達先となっていた。実はその配達先のファミリアは、アルクが懇意にしているファミリアでもある。

「ミアハ・ファミリアよりお届け物です。」

店の正面出入口は使わず、裏口の戸を叩くアルク。今はまだ営業時間であるため、その配慮も当然だ。しばらく待っていると、中からのんびりとした声が返って来た。

「おー、待っていたよー、アルク。手が空いているようなら、そのまま入って構わないよー。」

了解を得たのでドアノブを回し、アルクはバックヤードへと入っていく。すると先程の声の主が、ゆったりとした足取りでやって来た。

「今回はちよつと時間がかかったねー。」当たり前がなかなか出なかったのかなー?」
「俺からしたら”はずれ”なんですけどね。」

董色の長い髪に寝惚け眼の彼女は天界より来た”超越^{デウスデア}存在”、つまりは神だ。その名もヒュプノス。”眠り”を司る神というだけあって、ヒュプノス・ファミリアは主に寝具を扱う商業系ファミリアである。

「いつも通り、1つ1つに余剰分の効果を書いた紙を貼ってます。それも合わせて、査定の方お願いします。」

「あーい、ちよつと待っててねー。今うちの子達は店に出てるから、私が全部やつちゃうよー。」

彼女が発注したのは”睡眠効果付与”の薬。ヒュプノス・ファミリアが経営する店”胡蝶の夢”は、寝つきの悪い者のために睡眠薬も販売している。ダンジョンで夜を明かす際にはパーティが交代で見張りをするのだが、冒険者によつてはダンジョン内ではなかなか眠れない者もいる。睡眠は体力、精神力の回復のために必要だ。そんな時、睡眠薬はとても有効なのだ。

「二応余剰効果は”一時的”と”(小)効果で副作用がないものにしてます。他に問題がありそうな効果はなかったですよね？」

「そーだねー。アルクの作る薬だとそれで大丈夫なはずだよー。」

当然ながらアルクの錬成した薬がそのまま売られる訳ではない。”睡眠効果付与”の薬などそのまま飲んでしまえば、簡単には起きる事はなく、ダンジョン内であれば命

に関わるだろう。睡眠薬は、アルクの薬を材料にして調合することで作られるのだ。一度その調合について聞いてみたアルクであったが、

——「これはうちの専門だからねー。ミアハのところでは睡眠薬を売り始めたら、商売敵になる上に材料までもらえなくなっちゃうじゃないかー。」

とヒュプノスに言われてしまった。

「はい、査定終わったよー。レベル2になって回復やステータスアップ効果が付いてる薬が増えたよねー。その分睡眠効果が付く確率が下がっちゃったみたいだけど。これはレベル3にでもなったらうちへの納品はほとんどなくなっちゃうかもねー。」

「そうなればいいんですけどね。その時は寝具の材料の注文でも受けますよ。…と、査定結果の方確認しました。じゃ、こちらのヴァリスいただきますね。」

「はいはい。今後とも御贖にー。」

「こちらこそ。それじゃ、また薬が集まった頃に。」

アルクが錬成する薬の効果はランダム。そのため“睡眠効果付与”が付いているものはいっつ出て来るか分からない。しかも、その他の余計な効果が大きい場合も調合には使えないため対象外となる。状態異常付与はそのマイナス効果が大きい為か、他の効果が弱くなりがちではあるが、それでも睡眠効果が付く薬にも“はずれ”がある現状だ。ランクが上がればマイナス効果が出る確率は下がるだろうが、それはつまり、睡眠効果

の出る確率も下がる事になる。もしかしたら、レベル2である今が、ヒュプノス・ファミリアに一番貢献出来るのかもしれない。

「上手くないかないもんだな…。」

夜も更けて来た帰り道。アルクは自分の魔法”錬金混成”アルケミックサの面倒臭さに、何度目かも分からないため息をついた。

Recipe. 7 — 黒衣 + 白髪

アルクがヒュプノス・ファミアアへの配達を終え、本拠へ帰るその道すがら。唐突に、路地の暗闇から彼を呼ぶ声が聞こえた。

「こんばんは、アルク君。」

「うおっ！……つと。相変わらずいきなりだな。せめて姿を見せてから声を掛けてくれないよ。」

「ああ、すまない。姿を隠している事の方が多いせいか、その辺の配慮が欠けていたようだ。」

声の主は、暗闇から生まれたかのようにその姿を現した。しかし、その姿もまた暗闇。全身を黒衣で纏っているため、路地に漏れる微かな街灯の光が無ければ目視出来なかつただろう。

「今日はいつもの定期連絡か？こつちから頼んだ事だが、あんたもマメだな。」

「約束は守るさ。それに”君達”には悪い事をしたと思っっているんだ。たまにこうして伝えに来る程度なら何の問題もない。」

「これしか無かつたんだ。気にすんなよ。」

「そうか」と呟く黒衣の男。黒衣に隠れて顔も見えないが、アルクにはなんとなく、彼が微笑んでいるように見えた。もつとも、彼がそんな表情をする事はあり得ないのだが――

「では本題に入ろう。」彼女”は今も変わりなく元気でやっているよ。この前も君の事を悪く言うグロスが怒られていてね。たじたじになったグロスはちよつと見物だった。」

「そうか、それは良かった。」

「まだ、会いには行かないのかい？」

その問いに、アルクは少し考えた。会いに行きたいという思いはあるが、それは決して簡単ではない。オラリオの外であれば、時間を掛ければ会いに行けるだろう。しかし、彼女に会うために時間はさほど必要ではない。必要なのは、”力”だ。何しろ彼女が待つそこは、ダンジョンの奥深くなのだから。

「そうだな。長い事待たせちゃった。そろそろランクアップでもして会いに行かなきゃな。」

「私が送って行く事も出来るんだけどね。」

「知ってるだろ?強くなつて必ず会いに行く」。そう約束したんだ。連れて行つてもらったんじゃないか。」

「知ってるさ。ほんと、君も十分マメだよ。」

黒衣の男は「それじゃあ、また。」と再び路地の暗闇へと消えていった。

アルクがオラリオへとやって来て、3年以上の月日が経った。それはつまり、”会いに行く” という約束をして、それだけの時間が経ったという事になる。

「本当に、いつまで待たせてるんだろうな、…俺は。」

アルクは自嘲し、夜の街を歩き出した。

先程より少し気落ちした様子でアルクが街を歩いていると、横から誰かが走って来ていた。暗くてその姿は良く見えないが、俯いた状態で走っているらしい。暢気に走っている誰かを見ているアルクと俯いたまま走ってくる誰か。やばいとアルクが気が付いた時には彼は目の前まで迫っていた。

「うおっと、危ねっ!」

「えっ?」

ぶつかりそうになった2人であったが、間一髪でアルクが避けたため衝突は免れた。アルクの声に俯いていた彼もようやくやく顔を上げ、足を止めてアルクの方を振り向いた。

「前見てないと危ないぞ?」

「あ、(ぎょ)(ぎょ)めんなさい!」

アルクが注意すると、その少年はこれでもかと言わんばかりに狼狽えた。確かにぶつかりそうになった原因は彼であるが、そこまで怯えるほど強く言った覚えはない。その狼狽ぶりにどうしたものかと考えたアルクは、別の話を振る事にした。

「今度から気を付けりゃいいよ。それより、こんな夜に急いでどうしたんだ？ ダンジョンにでも潜る気か？」

「……はい。」

気を紛らわせようと冗談のつもりで言ったアルクだったが、予期せず正解を言い当ててしまったらしい。先程まで狼狽していた少年は、再び顔を伏せた。彼の事情は当然知らないアルクだが、何か深い理由があるのだろうかという事は一目瞭然だ。

「こんな夜に行かなくてもいいだろ。あまり無理はするもんじゃない。」

しかしアルクは彼が抱えているのであろう事情をとりあえず無視した。そこまで首を突っ込むつもりはないが、このままそうですかと彼を見送るのも躊躇われたので、当たり障りのない忠告までに留める。

「でも、僕はっ——」

言葉に詰まり、奥歯を噛み締める少年の姿にどうしたものかと考えていたアルクだったが、ここでようやくその少年に見覚えがある事気が付いた。昨日ギルドですれ違った、アルミラージのような少年だ。その特徴的な白髪と紅い瞳が夜の暗さのせいではつ

きり確認出来なかつたためすぐに気が付かなかつたが、間違いない。あの時笑顔を見せていた彼にいったい何があつたのか。

「僕は…、早く、強くなりたい…。」

振り絞つたように語る白髪の少年を前に、アルクは無言だつた。その願ひは、冒険者であれば誰もが抱くだろう。アルクも例外ではない。ただ、少年の顔から感じ取れるのは焦りと、そして…、怒りだろうか。その怒りの矛先はモンスターか、あるいは――。

「少しだけ、待つててもらえるか？」

まあこれも何かの縁だろうと、アルクは少年に付き合う事にした。本拠に戻り配達の代金を渡したり、ダンジョンへ向かう事を伝える必要があるがため少しの間待つてもらふよう伝える。

「え？…あの…何で…。」

少年は状況を飲み込めず混乱しているが、改めて同行を提案すればおそらく彼は恐縮し、それを拒むだろう。そのためアルクは待機するよう伝えるだけにして、急いで本拠へと戻つて行つた。

そして今、アルクと少年はダンジョンにいる。案の定ダンジョンへの同行については彼が“自分の事情だから”と拒んだが、それを見越して既に用意を済ませた事と彼の戦

闘に手を加える気はない事を説明し、何とか納得させた。手を加えないというのは決して嘘ではない。あくまで彼が命を落とさないように見守る程度だ。事情を話した際に主神のミアハからもしもの時のためとポーションを預かって来ているが、極力使わない方針でいる。

決して、相変わらず商品を無償で分け与えようとする主神を睨む、我がファミリアの団長様の視線に委縮した訳ではない。

ちなみに、彼の名前はベル・クラネルというらしい。ダンジョンへ向かう途中で簡単になだが自己紹介を済ませておいた。実はアルクは彼を知っている。話だけではあるが、ミアハの神友であるヘスティアの最初かつ唯一の眷属としてその名前は耳にしていた。中層近くへの探索や配達などの店の手伝いによつて会った事はなかったが、「冒険者としてひ弱そう」というナーザの印象とも合致した。

(何をそんなに焦ってるんだろうな…。)

自分の方へと襲い掛かって来た身の程知らずなダンジョン・リザードを殴り飛ばし、アルクは今も尚ナイフを振り続ける少年を見守っていた。アルクの記憶では、駆け出しである彼が冒険者となつてまだ半月も経っていないはず。確かに駆け出しの頃は自分が期待していた程にステータスが伸びず落胆する者も多いが、ベルの強さへの執着はそれだけとは思えなかった。

「なあ、ベル。」

「はあ、はあ。…え、何ですか？アルクさん。」

神同士が仲が良いという事もあり今後も顔を合わせるだろうとアルクは互いに名前と呼び合う事にした。ちよつとしたサプライズ気分でファミリアについてはまだ話していない。

「何でそんなに強くなりたいたいんだ？見た感じ冒険者になって日が浅いみたいだし、少し焦り過ぎてるように見えてな。余計なお世話だったら悪い。」

そこまで踏み込むつもりはなかったが、アルクは自然とその質問を口に出していた。それはもしかしたら、アルクがベルの姿に昔の自分の姿を重ねてしまったからかもしれない。

「……………自惚れてたんです、僕は。何もしなくても何かが変わるって。何もしなければ、…弱いままじゃ、何も変わらないのにつ。」

冒険者になった事で強くなれると思っていたが、現実には思ったように強くなれずステータスもほとんど上がらない。そういう事だろうか。しかしそれではまだ弱い気がする。

「お前に今日、いったい何があったんだ？」

だからさらに踏み込む。アルクが昨日ベルをギルドで見掛けてから、今日出会うま

で。いや、おそらくは今日出会うその少し前に、いったい彼に何があったのか。ベルはすぐには答えなかった。答えを待つその間にもモンスターは襲い掛かつて来るためベルは切り伏せ、アルクはいなしでいく。それから何度目かの戦闘を終えた後、シンと静まり返ったダンジョンで、ベルはようやくアルクに事の経緯を話し始めた。

「昨日、ダンジョンの5階層でミノタウロスに襲われたんです。」

「…マジか。」

犠牲者はここにもいた。冒険者になつて半月でミノタウロスとご対面など悪夢としか言えない。ベルの不幸に同じ目に遭つたアルクは同情したが、そこで疑問が生まれた。

（ギルドで会つた時、ベルは笑つてなかったか？5階層は剣姫達が後始末を終えてたはずだし、その後に遭遇した確率は低そうなんだが。）

そう、ベルとミノタウロスの遭遇と、アルクがギルドで見かけたベルの姿の辻褄が合わないのだ。アイズ達がミノタウロスを倒し損ねていた可能性は無いと考えるなら、遭遇は間違いなくアルクが彼をギルドで見掛けるよりも前。つまり、ベルは5階層でミノタウロスと出会つたにも関わらず無事にダンジョンから帰還し、しかも笑顔を浮かべていた事になる。生還を喜ぶといった様子でもなかったはずだ。しかしその疑問の答えは、話の続きで明らかになった。

「でも、助けてもらったんです。アイズ・ヴァレンシユタインさんに。」
(なるほどな。)

その時のアイズの姿を思い出しているのだろう。ベルは「格好良かった」、綺麗だった」と彼女がミノタウロスを倒すその様子を輝かせながら語った。

(ああ、つまりあの笑顔の理由は…そういう事か。)

その姿を見れば、その手の話には疎いアルクでも流石に分かる。つまりベルは——
「ベルはアイズ・ヴァレンシユタインに一目惚れした、と。」

「えっ!?!いや、あの、その………はい。」

初対面ではその顔を俯かせ、先程までは必死の形相だった彼が、今は真つ赤になっている。ころころ表情の変わるベルに和みつつ、アルクは話の続きを待った。おそらくここまででは「何か」が起こるその前段階。剣姫との出会いに浮かれる彼に何が起こったのか。

「でも、今日”豊穰の女主人”という酒場に行った時に——」

馴染みの酒場の名前が出た事に少し驚いたアルクだったが、その酒場でベルに起こった出来事は、何とも言い難いものであった。

その酒場の従業員との約束で夕飯を食べに行ったベル。しかし何の因果か、ロキ・ファミリアが打ち上げにやって来た。もちろんそこにはベルの思い人であるアイズ・

ヴァレンシユタインもいた。しかし初心なベルは、話しかけるのはもちろん目を向ける事すら出来ない。駆け出しには想像もつかない程の彼らの冒険譚を耳にするベルだったが、とある狼人の話に目を見開いた。

「最後のミノタウロスをお前が始末しただろ？それで、あん時5階層にいたトマト野郎！」

それは紛れもなくベルの事だった。5階層という場所も一致するし、アイズから助けられた際にベルはミノタウロスの血を大量に浴び、まさしく“トマト”のように赤く濡れていた。ベルは体を縮こまらせた。それまで気付かれる事を“恥ずかしい”と思っていたのが、今度は“怖い”と感じる。

狼人の青年は、酒の勢いも手伝ってか上機嫌に語る。「泣き出すくらいなら冒険者になどなるな。」——「雑魚は雑魚だ。」——彼の言葉がベルに突き刺さる。青年を諷める声もするが、それもベルにとっての慰めになどならない。そして、ベルにとって決定的な言葉が放たれた。

「雑魚じゃ、アイズ・ヴァレンシユタインには釣り合わねえ。」

ベルは耐え切れず、勘定も払わず酒場を出た。彼女は“劍姫”。レベル5の第一級冒険者。それに対して自分は、二つ名も無い駆け出し冒険者。ダンジョンで彼女に出会い、恋をした。その出会いで何かが起こると勝手に思い込んでいた。しかしそれは、自

惚れだった。彼女はきつと、自分との出会いなど歯牙にも掛けない。掛けたとしてもそれは、”雑魚” という言葉の似合う、弱くて惨めな姿の自分でしかない。

——強くなりたい。

彼女との出会いに恥ずかしさの余り逃げ出した事を後悔した。その事実を棚に上げその出会いに何かを期待した事を後悔した。積み重なった後悔をどうしていいかわからず、ただただ強さを求めてダンジョンへと駆け出した。

そして彼は、錬金術師と出会ったのだった。

Recipe. 8 — 無茶 + 炉の神

「それで強くなりたいてって訳か。」

ベルが夜にも関わらずダンジョンへと向かう理由を聞いたアルクは、少し感想に困っていた。ベルの姿を自分と重ねたりしたが、強さを求める理由を聞くと思ったよりも自分とは違っていたからである。

ベルはおそらく、剣姫の横に並ぶ事が出来る強さを求めている。彼女に認めてもらえる事を望んでいる。一方アルクは目標とする人こそいるが、その人に認めてもらう事は出来ない。その人は、もういないのだから。アルクが強さを求めたその先にいったい何があるのか。それはきつと、”復讐”だろう。

(俺は羨ましいのか…？ベルの、強さを求めるその理由が…。)

姿を重ねてしまったからこそ、そこに秘めたものを知った事でベルの初々しさがアルクには眩しく思えた。

「分かった。ベルの気が済むまで付き合おうよ。」

「でも、僕の都合にアルクさんをいつまでも付き合わせるのは——」

「ここまで来て途中で帰ったりしたら医神であるうちの主神に怒られちゃうよ。お前は

俺が責任を持って帰してやる。五体満足でな。」

出発の際にも同様の問答をしたため、アルクはベルの言葉を遮る形で話を続けた。大した理由もなく内緒にしていたが、そろそろネタ晴らしをしても良いだろう。

「医神、ですか？それに五体満足って…。」

「多分ベルの予想は合ってる。俺はミアハ・ファミリア所属の冒険者だ。」

「ミアハ様の…。じゃあ、僕の事も？」

「ああ、話には聞いている。ヘステイア様の眷属だろ？ミアハ様や姉さんが話すのを聞いていただけだったから、名前を聞くまで分からなかったけどな。」

もし初めからベルの事に気づいていたのであれば、ミアハを通じてヘステイアに一言伝えておく事も出来ただろうが、残念ながら自己紹介をしたのは再度合流した後だ。

「姉さん？」

「ナアーザさんだよ。会った事あるだろ？入団した頃からいろいろと世話になってな。いつの間にか”姉さん”って呼ぶようになってたんだ。」

「そうだったんですか。」

厳密には”姉さんと呼ぶように言われた”のだが、ナアーザの名誉のためにもそれについては伏せておく事にした。アルクは出来た弟なのである。

「だから遠慮しなくていい。気が済むまでやって来い！」

「あ…、はいっ！」

ベルは再びダンジョンを進み始めた。多少疲れは見えるが、気持ちでそれを無理矢理抑えているのだろう。既に2人は6階層へ辿り着こうとしている。人型で影のようなモンスターであるウォーシャドウは新米には荷が重いだろうし、キラアートの群れと遭遇すれば今のベルの状態では命はないだろう。

「頑張れ、駆け出し冒険者。」

ベルには聞こえる事のない声で呟くアルク。ベルを無事にファミリアへ帰す。それはアルクの思いでもあり、”五体満足”をシンボルに掲げるミアハ・ファミリアとしての意志でもある。ただし、それは最悪の場合を想定してであり、そこに至る事が無ければアルクは手を出す気はない。今の自分の限界を知る事も間違いなく彼の力になる。そう信じて、ボロボロになっていくベルの姿をアルクはただ見守り続けた。

「——え、あれ？こっちは？」

ベルが目覚めると、自分の足が地に付いていない事に気がついた。未だ頭が覚醒しきれていないベルに気づき、アルクが答える。

「今は3階層だな。もうすぐダンジョンから出られるぞ。」

「3階層……。じゃあ僕は。」

「体力の限界だったんだろ。7階層で戦ってる途中で気絶したんだ。覚えてないか？」

「7階層に行つたのは覚えてるんですが、そこからは……。」

6階層ではウォーシャドウも見事に倒したベルだったが、既に体力は限界を迎えていた。7階層での戦いを始めて間もなく、ベルはプツリと糸が切れたように気を失つたのだ。それを確認したアルクは、無防備なベルの命を狙わんと迫るモンスター達を片付け、ベルを背にダンジョンを戻り始めた。

「す、すみません。すぐに降りっ……ぐっ！」

「無理すんなよ。少し寝たくらいじゃ回復する訳ないんだ。それに、こういう時のために俺が同行したんだしな。」

今の状況を見れば、アルクが付いて来たのは正解だったと言えるだろう。しかし、もしかしたらアルクが付いているという保険があったために、ベルは必要以上にダンジョンを進んでいってしまったのかもしれない。そう考えるとせめて帰りの道は役目を全うさせてもらいたいと思わずにはいられないアルクだった。

「ダメですね、僕。こんな上層で無茶して、死にそうになって、全然弱い……。」

（うーん、そうでもないと思うけどなあ。）

ベルはまだ冒険者になって半月である。そんな駆け出し中の駆け出しが、上層の難敵であるウォーシャドウを倒している。それだけでもベルの力は並の冒険者とは違うと言える。少なくともアルクが冒険者になって半月の時点でウォーシャドウと1対1で戦った場合、勝てる保証はなかっただろう。

「まあ、格好良いか悪いかで言うなら、格好悪かったな。」

「うっ。」

アルクの意見にベルが呻く。がむしゃらにモンスターを倒し続け、体力が尽きればその場で倒れモンスターの為すが儘となる。それを格好良いとはとても言えないだろう。

「やらなくて良い無茶をする時は大抵格好悪いんだよ。だけどな、しなくちやいけない無茶をする時ってのはきつと、格好良いんだ。」

「しなくちやいけない無茶……。」

アルクは知っている。彼の目の前で無茶をして、そして、それでも格好良かった人を。アルクは知っている。する必要のない無茶をした、格好悪い自分を。

「冒険者は冒険をしてはいけない」なんて言うけどな、避けられない冒険ってのは絶対にあるんだ。その時にはきつとベルも、強く、そして格好良くなれるさ。」

「……はい。」

少し熱く語り過ぎたかと後悔し始めたアルクだったが、ベルの納得したような様子に

安心し、地上へと歩を進めて行った。

地上に出ると時間は既に早朝だった。魔石を換金したいところだが、時間も時間なので改めて向かう事に。ベルに魔石を渡すとその半分をアルクに渡そうとしたが、アルクはそれを断った。パーティを組んだ訳でもないし、アルクは基本見てただけだ。そもそもアルクが降りかかる火の粉を払う程度に倒した分の魔石は別に取っている。ソロ2人がそれぞれ倒した分の魔石を持っていると考えれば、何の問題もないだろう。

歩ける程には回復したベルに肩を貸し、2人はヘステイア・ファミリアの本拠ホムへと向かった。初めて訪れるその本拠に、どんなところかと少し期待していたアルクだったが、目の前に現れたそれは予想外のものだった。

「…教会?」

そう、教会だ。神ヘステイアは“炉”を司る神だったはずなのだが、その本拠が教会というのはいったいどうした事なのだろうか。そんな事を考えていたアルクだったが、教会の入り口から誰かが走ってやって来るのが見えた。その勢いと目標地点を確認したアルクはベルを肩から外し、少し距離をとる。

「え?あの——『ベルくうーん!!』ぐほあっ!」

それは見事にベルへと着弾した。今ので再び意識を手放すかに思えたが、ベルは何とか耐えてみせた。そんな彼に力いっぱい抱き着いているのは、彼の主神ヘステイアであ

る。

「こんな時間まで帰って来ないから心配したじゃ、って、ベル君傷だらけじゃないか！」
ヘスティアの言葉にアルクはしまったと思った。体力については限界を知ってもら
う上でそのままとされていたが、外傷についてはミアハから渡されたポーションで治して
おいた方が良かったかもしれない。心配そうな主神に大丈夫だと伝えるベルだが、体中
ポロポロで血の跡も残った状態のままでは説得力に欠ける。

「神様。」

「今すぐ手当を……って、ん？何だい？」

只ならないベルの状態に慌てるヘスティアであったが、彼の呼ぶ声に動きが止まっ
た。そんな彼女に、ベルは意を決したように告げる。

「僕……もつと、強くなりたいです。」

アルクにも話したその願望。しかし、その表情は全く違った。ベルが主神に向けるの
は、後悔や歯痒さで歪んだ顔ではなく、決意を新たに前を見据えた、そんな微笑みだっ
た。

「うんっ！」

ただそれだけで、主神には自分の眷属の決意が伝わったのだろう。ヘスティアもま
た、ベルに微笑み返すのだった。

「アルク君、だったね。ありがとう、ベル君を連れて来てくれて。」

ポーシヨンで傷を治し、血を拭き取ったベルをベッドに寝かせたアルクとヘステイア。ベルも安心感からかベッドに入るや否や眠ってしまった。それを確認したヘステイアは、改めてアルクへと感謝の言葉を述べた。

「いえ、俺はほとんど見てただけですから。」

「それでも、だよ。ベル君は、ボクにとつて何より大切なたった一人の家族なんだ。」

以前パーティーを組んだパルウムのリリルカ・アーデ程ではないが、ヘステイアの身長もかなり低い方だろう。背の高いアルクと比べれば尚更だ。しかし真剣な顔でアルクを見上げるその姿には、言葉で表すには難しい力強さを感じる。彼女も”超越存在^{デウスデア}”だという証拠だ。

「じゃあ、どういたしまして、つて事で。俺は本拠に戻りますね。」

「ああ。ミアハによろしくと伝えてくれ。」

「分かりました。と、そうだ。ベルに伝言をお願いしてもいいですか?」

「もちろんいいとも。何だい?」

そしてアルクはヘステイアに伝言の内容を伝え、彼の本拠、青の薬舗へと帰って行った。

その日の夕方、ベルは目を覚ました。意識がはつきりするにつれて、体のあちこちから痛みを感じる。そこでようやく、昨夜から今日に掛けてダンジョンへと潜っていた事を思い出した。何の気なしに顔を横に向けると、そこにはヘステイアの顔がある。

「やあ、おはようベル君。」

「あ、おはようございませす神さ……て、え!? 神様!?!」

流れのままに返事をしたベルだったが、その状況がおかしい事に気が付いた。なぜ自分の主神が横で寝ているのだろうか。

「そんなに驚かなくてもいいじゃないか。」

「え、いや、あのお……はい。」

よくよく考えたらベッドはヘステイアが普段寝ている場所であり、負傷と疲労のためとはいえ自分がそこに寝ている事がおかしいのだ。なので、ベッドでヘステイアが寝ていても何の問題もない。あるはずがない。あつてはいけない。ベルは強引に自分を納

得させた。

「体は大丈夫かい？」

「はい。まだ少し痛みますけど、普通に動けます。」

「なら良かった。でもまだ完治した訳じゃないから、今日はこのままご飯を食べて眠るといいよ。無論、ベッドでね！」

最後の部分が引つ掛からなくもないが、ベルも流石にこれからどこかへ向かう元気もないため、その提案を受ける事にした。

「そういえば、アルク君から伝言があつたんだ。」

「アルクさんから？何ですか？」

「お前がもし10階層まで辿り着いた時、気が向いたらパーティを組まないか？急ぎの話じゃないからゆっくりで構わない。くれぐれも無茶はしないように。」だってさ。」

「無茶」はしないように、か。」

その忠告は、今のベルには身に染みだ。しっかりと着実に力をつけて10階層を目指せという事だろう。パーティの提案はベルにとって嬉しい話だが、今の彼では足手纏いになるだけだ。

（強くなるう。アルクさんと一緒に戦えるくらいに。そして、いつかきつと——）

——アイズ・ヴァレンシユタインに、追いつけるように
ベル・クラネルの冒険譚はまだ、始まったばかりだ。

「あ、忘れてた。伝言がもう一つあるよ。」

「もう一つ、ですか?」

「うん。」豊饒の女主人でツケはきかないぞ”だつて。どういう意味なんだい?」

「……………」

ベルの顔が青ざめたのは、言うまでもない。

オラリオを見渡せるその高み。どこより高いその場所には女神がいた。

「アルク・サルマン。彼はあの子にどんな影響を与えるかしら。」

雲すら貫くその場所からは、街の様子など見えるはずもない。しかしその女神にとつては距離など関係なかった。彼女の見つめる先には、ベッドに眠る白髪の少年がいる。

「今はまだ構わないけれど、もし余計な事をするようなら…。」

その冷たい眼差しはいったい誰に向けられたものなのか。

美の女神はまだ動かない。しかしそれは、静かに始まるうとしていた。

2章：『錬金術師、オラリオを駆ける』

Recipe. 9 — 怪物祭 + 悪戯神

”怪物祭”。

それは、ガネーシャ・ファミリアが主催する年に1度の祭典。

観客の前でモンスターを調教するその催しは、ギルド公認となっている。

今日はその怪物祭が開催される日。闘技場にはオラリオ中から多くの観客が集まっていた。

「さて、今日はどうするかなあ。」

そんな中、アルクは本拠でその日の予定について考えていた。本日は薬屋は休みだ。

「怪物祭に行ってみたら？ 調教が好きじゃないなら、外の屋台を回るだけでもいい気分転換になると思うよ。」

予定の決まらない様子の子のアルクを見て、ナーザは屋台巡りを提案した。零細ファミリアの団長でありお金には少しうるさいナーザだが、お祭りの時まで細かい事を言うつもりはない。そもそもアルクは探索や薬草採取でしつかりとファミリアに貢献していながらも自身の魔法『錬金混成』で消費する魔石の事を考えあまり贅沢する方ではな

いたため、お祭りでの屋台巡りは丁度いい息抜きだろうとナーザは考えていた。「そうだなあ、屋台だけならまあ……。行ってみるか。」

ダンジョン探索へ行くという手もあるが、怪物祭の運営にギルドも駆り出されるため換金は後日となる。何より街がお祭りムードの中1人寂しくダンジョンへ向かうというのも虚しい。ナーザと主神ミアハは昨日アルクが採取した薬草などを元にポーションを調合するらしい。アルクも手伝おうと考えたが、2人きりにした方がいいだろうと思いついた。アルクは姉思いなのである。

という訳で本拠^{ホーム}を出たアルクだったが、よく考えれば1人で屋台巡りというのであれば、それはそれで寂しい。せっかく知り合ったのだからとベルを誘ってみようと教会を訪れたが、残念ながら留守だった。ベルだけでなくヘステイアもどこかへ行っているらしい。祭りであれば誰かと会うかもしれない。アルクはそのまま闘技場へと向かった。

「あつ、サルにや！どこ行くにや？」

「サル」じゃねえ、「サルマン」だつ。何度言わせんだよアーニヤ。」

酒場『豊穡の女主人』の前を通りかかると、その従業員である猫^{キャットピープル}人がアルクを呼び止めた。

彼女の名前はアーニヤ・フロームル。少し抜けたところある彼女だが、実は元冒険者らしい。『豊穡の女主人』へとたまに食事に来るアルクは、その従業員とも顔見知りだ。

その中でも、何度訂正しても自身を「サル」と呼ぶ彼女に、アルクは少し困っていた。先程のやり取りも最早恒例である。

「そういえば、少し前に食い逃げして行つた冒険者がいたと思うんだが、ちゃんと金を払いに来たか？」

食い逃げ犯となつてゐるはずのベルのその後を尋ねるアルクに、アーニヤは腕を組み考え込む。どうにも思い至らない様子の彼女に分からないならいいかと声を掛けようとした時、アーニヤの後ろから答えが返つて来た。

「クラネルさんの事ですよ、アーニヤ。シルがミア母さん達を説得していたでしよ。う。」

「あー！ さつききの白髪頭にやー！」

白髪頭という呼び方にアルクは苦笑いするしかない。彼女は「さつき」と言つたため、もしかしたらベルは少し前にこの酒場に立ち寄つたのかもしれない。

「すみません、サルマンさん。クラネルさんでしたらちゃんとお金を払いに来たと思ひが言つていました。その場にいなかったなので、アーニヤは知らなかったのだと思ひます。」

「それは良かった。忠告した甲斐があつたつてもんです。」

どうやらベルはしっかりと代金を払いに来たようだ。女主人であるミアの恐ろしさ

はアルクも知っているため伝言まで残し忠告したが、問題なかったらしい。ちなみにアーニヤに代わってアルクの質問に答えた彼女の名はリユー・リオン。長い耳を持つエルフだ。

「シルさんが説得したって事は、ベルと彼女は知り合いなんですか？」

「ええ。シルがクラネルさんを何かと気に掛けているみたいです。クラネルさんの様子を見てみると、確かに私も危なっかしそうな印象を受けました。」

「それには俺も同意です。」

兎を思わせるその姿と気の弱さから、ベルは庇護欲を掻き立てやすいのかもしれない。先日彼のダンジョン探索に付き合ったアルクもそんな一人なのだろう。

「で、サルはお祭りに行くにや？」

「だからサルじゃ…はあ、そうだよ。メインの調教テイムを見る予定はないけど、屋台巡りでもしようかと思つてな。」

「屋台にや!! お土産楽しみにしてるにや！」

アルクは何故か注文を受けてしまった。リユーは奔放な彼女に諦めたのか、ため息をついている。

彼女が働く酒場であれば賄いであつてもその辺の屋台より美味しい料理が食べられるだろうが、そこはお祭り気分による補正というやつだろう。

「美味そうなのがあったら買って来るよ。 実際美味いかは保証しないけどな。」

自らが錬成したマズポを幾度となく飲んで来たアルクだ。味覚がおかしくなっていたとしても不思議ではないだろう。とはいえ豊穣の女主人やナーザの作る食事を疑う気はないため、現時点で味覚に異常を来たしていないのも事実だ。

「そうだ。シルが祭を見に行っているのですが財布を忘れてしまつて、先程通りがかつたクラネルさんに渡してもらおうようお願いしたんです。もしシルを見掛けた際にまだクラネルさんと会っていないようでしたら、その事を伝えていただけますか？」
「なるほど。 分かりました。」

今日も酒場で働くアーニャとリユーに別れを告げ、アルクは再び怪物祭へと向かった。

闘技場近くには数多くの屋台が並んでいた。オラリオで人気の『ジャガ丸くん』はもちろん、焼串や焼きそば、デザートなどその種類も様々だ。とりあえず焼串でも食べようかとアルクが屋台を選んでみると、少し開けた芝生のエリアに見知った顔を発見した。ベルと彼の主神ヘステイアである。

「はい、ベルくん。 あーん。」

「えっ!?! いやそんなっ!」

教会に誰もいないと思つたら、2人でデートに来ていたらしい。笑顔のヘステイアが自分を持つクレープを食べさせようとベルに差し出しているが、ベルの方は顔が真っ赤だ。思わず声を掛けそうになったが、そこは空気の読めるアルクだ、そのまま背を向け立ち並ぶ屋台へと再び歩き出した。

「んー、まずまずだな。 祭りの屋台ならこんなもんか。」

焼串片手にそこそこに祭り気分を楽しむアルク。数ある屋台から比較的安い屋台を選ぶ辺りは、やはり貧乏性故か。アーニヤのお土産はこれでもいいかと考えつつ手に持つ焼串を食べ終わったアルクは、そこで再び見知った顔に気が付いた。

「ん? 劍姫?」

「あ、えーつと、…アルク、さん?」

「どうしたんや? アイズたん。」

出会ったのは『劍姫』ことアイズ・ヴァレンシユタイン。彼女の後ろから連れである

う赤髪で細目の女性がやって来たが、アルクには見覚えがない。

「ん？ その兄ちゃん是谁なん？ 知り合い？」

「えっと、アルク・サルマンさん。錬金術が使えるって、ティオナが。」

アルクがそうであるように、もちろん女性もアルクを知らない。女性の質問に対するアイズの答えに“マズポ”がなかった事をひっそりと喜ぶアルクだった。

「あー、ティオナに聞いたとるわ。”マズポのアルク”やる？ その節はティオナが世話になったみたいで、ありがとーな。ウチはアイズたんやティオナ達の主神やつとるロキや。」

喜びはすぐに消し飛んだ。オラリオ最強と言われるファミリアの一角、ロキ・ファミリアの主神が告げる“マズポ”宣告。もうこれは第二の二つ名と言っても過言ではないだろう。

「既に聞いてるみたいですが、アルク・サルマンです。ティオナの件については、廃棄予定だったものを譲ったに過ぎないので気にしないでください。」

「そう言ってもらえると助かるわ。探索に同行したいっちゅー話も団長が許可出しとったから、遠慮せんで行ってき。」

「ありがとーございます。」

元々見返りを求めていなかったため許可が下りなくても問題なかったが、許可が出た

ならそれに乗っからない手はない。一級冒険者との探索となれば、楽しみにもなる。

「武器が壊れて新調に必要な金稼ぐ言うてたからなあ。近いうちに声がかかるかもしれないな。」

「分かりました。一応準備は整えておきます。」

テイオナの武器である大双刃ツルガが壊れた、いや、溶とかさされた事はミノタウロス事件の時に聞いている。メンテ費用に頭を抱えていた彼女が同じ武器を新調するともなれば、とは考えていたが、やはり大変らしい。アルクに出来るのはマズポの提供程度。せめて彼女に渡すポーシヨンが錬成される確率が上がるようにと、アルクは自分の魔法『錬金混成』に祈った。

その時だった。アルク達の元へ、2人のギルド職員が駆け寄ってきた。1人はアルクの担当アドバイザーでもあるミイシャ、もう1人はエイナ・チュールというハーフェルフだ。ミイシャと仲が良かったためアルクもエイナとの面識はあった。平静を装ってはいないが、その目には明らかに焦りが見える。2人がアルク達に——正確には「劍姫」に、だが——告げたのは、怪物祭だからこそ起こり得る、しかし、絶対に起こってはいけないトラブル。つまり、「モンスター脱走」だった。

「正確な数はまだ調べている途中ですが、既に中層域のモンスター達が多数逃げ出したと。」

催しとするからには上層の弱いモンスターでは見応えがない。しかし下層のモンスターはその強さももちろん戦い方も特殊である場合が多いため、怪物祭での調教対象はほとんどが中層で出現するモンスターとなる。中層の適正ランクはレベル2。レベル1の冒険者では中層のモンスターには歯が立たない。以前のミノタウロス事件でアルクが助けた冒険者や、アイズに助けられたベルがそうであったように。

「頼めるか、アイズたん。」

「はいっ。」

答えるや否や、アイズは上へと跳び上がった。高い所からモンスターを探すつもりなのだろう。アルクも遅れまいと闘技場から街の方へと駆け出す。

「なんや、あんたも行くんか？ アイズたんに任せとけば大丈夫やで？」

ロキの言う事は最もだ。レベル5のアイズが動いたのであれば、中層クラスのモンスター等すぐに片づけてしまうだろう。だが、アルクにはこのまま祭りの続きを楽しむなんて出来そうにない。

「被害を抑えるくらいは出来ると思います。生憎と、今のを聞いてのんびりしてられる程、俺の肝は据わっちゃいないんで。」

「そうか。損な性格してんな自分。」

「知ってますよ。それじゃ！」

ミイシャ、エイナ、そして神ロキに見送られながら、アルクは今度こそオラリオの街へと消えて行つた。

「ま、そういうんは嫌いやないけどな。」

アルクの姿が見えなくなると、ロキは暢気に祭りへと戻るのかと思いきや、アルク同様オラリオの街へと歩き始める。

「か、神ロキ!? 街は今危険なんですよ!?!」

「そんなん分かつとるって、エイナちゃん。けどウチにはアイズたんの尻追つかけるつちゆう使命があるんや。そのためならたとえ火の中街の中、ってな。ほなな。」

まるで散歩にでも行くような足取りで街へと消えて行く神の後ろ姿を、エイナとミイシャは黙って見ている事しか出来なかつた。

街の中を歩くロキは、先程のエイナ達の話の思い返していた。

(見張りの団員は“恍惚とした状態”やった、か…。 何したいのかはよう分からんけど、おそらくは“あいつ”の仕業なんやろうなあ。)

モンスター¹の脱走、それを起こした真犯人にロキは心当たりがあった。わざわざ本人が出向いて事を起こしたのであれば、まだ街の何処かにいるかもしれない。”彼女”がいったい何を企んでいるのかはつきりとは分からないが、答えは街の騒乱の中にあるかもしれない。神は一人、街中に行く。

「あ、ロキだ！　おーい、ロキー！」

そんな彼女を呼ぶ声があった。振り返るとそこには、モンスター調教^{テイム}を見に行っていたはずの双子のアマゾネスとエルフの少女の姿が。彼女達も只ならぬ雰囲気を感じ取ったようだ。ロキが事情を話すと、アルク同様じつとはしていられないのだろう、彼女達は街へと飛び出していった。

怪物祭の裏で起こるその騒乱は、まだ始まったばかりだ。

Recipe. 10 | 新種 + 大虎

「この辺にモンスターはいないみたいね。」

ロキにモンスター脱走の話を聞き、その討伐へと向かったティオナ、レフィーヤ、そしてティオナの双子の姉であるティオネ。彼女達は今とある広場へとやって来ていた。見える範囲でモンスターの姿はなく、悲鳴なども聞こえない。次の場所へ向かおうとした時、異変は起きた。

「なんか、地面が揺れてない?」

「ーっ!?! 何この地響き!」

急に起こった地震に驚く3人。しかし、それはまだ驚くには早かった。広場の地面にヒビが入ったと思った瞬間、そこから何かが飛び出して来たのだ。裂けた地面から絶えず伸び続ける細長い緑色のそれは、まるで蛇の様だ。

「こ、こんなモンスター見た事ありません!」

「ガネーシャ・ファミアアの奴等、こんなまで調教するつもりだったの!?!」

そのモンスターは、話す隙を与えないとばかりにその長い体をしならせティオナ達に襲い掛かる。レベル5であるヒリュテ姉妹はそれを上手く躲しつつ、モンスターに拳を

お見舞いした。

「ーっ、かったーい！」

「打撃が通じないの!？」

しかしそのモンスターは表面はまるで鱗のようなものに覆われており、彼女達の攻撃を防いでしまった。斬撃であればどうにか出来る可能性はあるが、前回の探索で武器を失ったティオナはもちろん、祭りの見物には不要だとティオネも武器をファミリアに置いて来ている。

「レフイーヤ！ 私達がこいつの気を逸らすから、デカいの頼むわよ！」

「はいっ！」

打撃が通じず武器も無い今、頼みの綱はエルフが故に魔力に長けた、レフイーヤの魔法。ヒリユテ姉妹には劣るレベル3の彼女ではあるが、彼女も最強と言われるロキ・ファミリアの団員だ。ティオネの指示に答える瞬間には、既に詠唱に入ろうとしていた。

「こつちこつち！ そんなんじゃ当たらないよ！」

モンスターの攻撃を回避しつつ打撃を与え、モンスターの気を引くティオナとティオネ。モンスターを彼女達に任せ、詠唱を始めたレフイーヤだったが、そこでモンスターに変化が起こった。長い体の先端、頭と言えるのかも分からない楕円状に膨らんでいた

それが、開いたのだ。

「何あれ!? 花?！」

開いた部分は正に花卉。鮮やかな色が花を思わせるが、その中央にあるのは食虫植物のような口。さらにその中には、人の歯のようなものが見える。モンスターを思わせる牙ではなく、綺麗に横に並ぶ人の歯は逆に不気味さを漂わせている。

「うっ、気持ち悪い…。」

今まで見て来たどのモンスターとも違うその姿に、一級冒険者である彼女達もゾクリと寒気を感じざるを得なかった。だがその間にも、花を模したそれはその動きを止めてはいなかった。

「また地鳴り?…——やばいつ、レフイーヤ!」

その振動から敵の狙いを逸早く察したティオネが叫ぶが、それはもう、詠唱を続けるエルフの間近へと迫っていた。

「かはっ——」

花型モンスターの別個体が地面から突き出し、そのままレフイーヤの体へと突き刺さった。肺の中の空気が全て吐き出され、悲鳴を上げる事も叶わずレフイーヤは屋台へと突き飛ばされる。

「レフイーヤ!」

「この野郎！」

レフィーヤの身を案じるティオナ、モンスターへの怒りを露にするティオネ。魔法による後援を失った彼女達の状況はさらに悪化する。レフィーヤを攻撃した個体に続くように、1体、また1体と花型モンスターが現れたのだ。それを倒す決定打を持たない彼女達は次第に体力を削られ、少しずつ圧され始める。

「何なのこのモンスター……」

「はあ、はあ。……ウルガがあればこんな奴！」

最早全ての攻撃は避けられず、その耐久を以て攻撃を防ぐ2人。モンスターの攻撃が激しさを増す中、壊れた屋台の上で気を失っていたレフィーヤが目を覚ました。だが詠唱中の無防備な体を受けた一撃のダメージは大きく、すぐに起き上がる事が出来ない。そんな彼女に最初に気が付いたのはヒリユテ姉妹ではなく、モンスターだった。先端の口を大きく開けた花形モンスターが、レフィーヤを食い殺さんと彼女の元へと向かっていく。

(体が、動かないっ。)

抵抗する術はなかった。彼女は迫り来るモンスターをただ眺めるしかない。

(こんなところで、死ぬ訳には——！)

一方アルクも街の被害状況の確認とその対処のために街の中を駆け回っていた。既にアイズが倒してしまつたのか、脱走したモンスターの姿は見当たらない。破壊音や悲鳴を聞きつけた場合はすぐに駆け付けようと耳に意識を集中していると、ある方向から何かが壊れるような大きな音がした。

「あつちは……『ダイダロス通り』か！」

ダイダロス通りは貧民層の住まう場所であり、区画整理を何度も行つたために複雑化してしまつたその道は、住民すら時折迷わせる。そのためダイダロス通りは“迷宮街”とも呼ばれている。

「また厄介な場所に行きやがったな。　　しゃあない！」

音を頼りに向かえばモンスターの元へと辿り着くだろう。そう考えてダイダロス通りへ向かうアルクだったが、目の前に突然モンスターが飛び出して来た。

「ライガーファングが2匹、か。　　まさかそっちから出て来てくれるとはな。」

虎型モンスター、ライガーファング。大虎と呼ばれるにふさわしい巨体が2つ、アルクの行く手を拒まんと構えている。その強さはミノタウロスには劣るだろうが、4本の脚で駆ける素早さはミノタウロスより上だろう。しかも2匹となれば、高い敏捷性はさ

らに面倒になる。

「狙いが完全に俺つばいののが救いか…。」

2匹の大虎は、現れたその時からずっとアルクに敵意を表している。逃げ惑う住民には目もくれずアルクだけを睨み続ける姿は妙ではあるが、下手に暴れられる心配がないと思えば差し当たり問題はないだろう。問題があるとするとするならば、それは今のアルクの装備だ。勢いで飛び出してしまったため、いつもダンジョンへ背負って行く大剣もなければ手甲も、防具もない。冷静に考えると思いの外ピンチなのかもしれない。あるとすれば、いつもの癖で腰に巻いて来た専用ホルスターのポーシオンくらいだが、その数も決して多くはない。

「自前ポーシオンに、素早さ上昇の小と、…爆薬だったか？ 街中で暢気に爆薬ぶら下げたたのか俺は。まあ今回は結果オーライなんだが。」

ちなみにこの爆薬には力上昇（大）効果とポーシオンと同レベルの回復効果がある。ただし空気に触れると間もなく爆発するためそもそも飲む以前の問題だ。初めにこの爆発効果の付いた薬を錬成した時は蓋をしていないガラス瓶を使っていたため、完成したその場で爆発し大惨事となった。

アルクは衣服類を置いている無人の屋台から革のベルトを2本取り、代わりにそこに記された代金を置いた。ベルトを両手に巻けば、ちよつとしたグローブの完成だ。

<グルルルアー!!>

アルクの出方を窺っているように見えた大虎だったが、隙だらけのアルクに業を煮やしたのか2匹同時に飛び掛かった。

「うおっと。」

その直線的な攻撃に怯む事無くアルクは地に身を転がらせ大虎の後方へとそれを避ける。互いに場所が入れ替わった形となり、反転した両者は再び睨み合う。次に動いたのは大虎だった。1匹が地を駆けアルクに迫る。今度は大虎を飛び越えそれを避けるアルクだったが、そんな彼に2匹目の大虎が飛び掛かろうとしていた。

「ちっ、早速数の優位を使ってきやがったか。」

同時攻撃よりも連撃の方が有効と考えたのだろう。大虎のその知能に舌打ちをし、アルクは今まさにすれ違わんとしていた先発の大虎の背を掴む。

<ガルルルツ!>

背中を掴まれた事で驚いた大虎は暴れ出した。その反動を利用して後続の大虎の攻撃を躲したアルクは大虎から手を放し、地面へ着地する。隙を見せぬようすぐさま立て直すが、2匹の大虎はアルクの前後にそれぞれ構えていた。

「前門が虎なら後門も虎か? ったく、本当に頭が回る奴等だ。」

どちらかを狙えば必然的にもう1匹に背を向ける事になる。となればまずは横へと

逃げ相手の出方を窺うか。次の策を考えるアルクだったが、ホルスターに目をやった瞬間、ある事を思い付いた。

「せっかくこいつがあるんだ。使わない手はないな。」

そう言うと、ホルスターから薬を一本取り出し、上空へと放り投げた。そしてそのままアルクは前方の大虎へと歩みを進める。そうなれば当然、後方にいた大虎はガラ空き状態のアルクの背中を目掛けて駆け出す。大虎がアルクの背中を捕らえようとしたしたその瞬間、大虎の目の前を何かが下へ向けて過つていった。

——パリンツ

ガラスの割れる音。それを聞いたアルクは一気に前方へ加速した。直後、その音源と思われる場所で爆発が発生する。爆発はアルクに迫っていた大虎を巻き込み、その光景にもう一匹の大虎も思わず怯む。——急接近する彼に気づかず。

「食らえ——っ!」

爆風を利用し、その勢いに乗った状態で大虎の額を殴りつけるアルク。脳を揺さぶられたのか立ち上がりつつも足元の覚束ない大虎へ、アルクは追撃を放った。

「沈め——っ!!」

重力に逆らう事の無い真上からの一撃に大虎の頭は地に沈み、次の瞬間には塵へと変わった。まず一勝と油断する事なくアルクはもう一匹へと視線を移すが、既にそちらも

ふらふらの状態となっていた。どうやら怯ませるために使った爆発が思ったより綺麗に直撃したらしい。それだけ見れば幸運だが、もしもう少し爆発のタイミングが遅ければ大虎がアルクを捕らえていたかもしれない。その可能性に冷や汗を垂らしつつ、アルクは2匹目の大虎を1匹目と同様、地へと沈ませた。

「いつてて…。 やっぱ即席じゃダメだな。」

手に巻いたベルトを外し、先程大きな音がしたダイダロス通りの方に意識を向けるが、特に破壊音や悲鳴は聞こえない。既に移動したか、他の冒険者がモンスターを倒したのだろう。

「手掛かり無しでダイダロス通りに入るのはマズいな。気にはなるが、俺は別の所に向かうか。」

音を辿れない以上ダイダロス通りでの探索は厳しいと考え別の道へとアルクは駆け出した。その場に残された住民達は、爆発の衝撃とアルクの豪快な戦いっぷりに歓声を上げるタイミングを失ってしまったのだった。

「それでいいのよ、アルク・サルマン。」

その様子を高い位置から眺める影。彼女はアルクがダイダロス通りから離れていくのを満足そうに見送っていた。

「くれぐれも、あの子の邪魔をしないでちょうだいね。」

アルクの姿が見えなくなると、彼女は今度はダイダロス通りへと目を向ける。モンスターを使ってまでアルクに関わらせたくはなかつた何か。彼女はその行く先を見届けるため、ダイダロス通りへと消えて行つた。

そしてその頃、ダイダロス通りでもまた、1つの戦いが行われていた。

「ごめんなさい、神様。 僕が時間を稼ぎます。 神様はこのまま逃げて下さい。」

彼の目の前には大猿モンスター、シルバーバックがいた。

「何を言ってるんだい?」

彼の後ろには、鉄柵を挟んだ状態で、彼の主神がいた。

何でこうなつたのかは分からない。闘技場から脱走したシルバーバックに遭遇した彼らだったが、その大猿は何故か自分の主神に襲い掛かった。冒険者としては駆け出しである彼が中層のモンスターであるシルバーバックに敵うはずもなく、彼は主神と共に必死で逃げ続け、このダイダロス通りまでやって来た。しかしその鬼ごっこも限界だつた。逃げられないと悟つた彼は、鉄柵で仕切られた道の向こうに主神を行かせ、鍵を閉

めた。

「神様、僕はもう、家族を失いたくないです。」

彼は、自分を育ててくれた祖父を失っていた。その時を同じような思いをするのはもう嫌だった。

たとえ少しでも、自分が時間を稼いでみせる。自分の主神大切な家族が逃げ切るための時間を、絶対に。

「ベル君！　ベル君!!」

彼——ベルはナイフを片手に大猿へと向かって行く。ヘステイアの呼び止める声も虚しく、その巨大な敵との無謀な戦いは開始された。

——「しなくちやいけない無茶をする時ってのはきつと、格好良いんだ。」

(これは、”しなくちやいけない無茶”ですよね、アルクさん——)

Recipe. 11 — 少女の戦い + 少年の戦い

レフィーヤに止めを刺すために迫って来た新種の花型モンスターだったが、その攻撃が彼女に届く事はなかった。

——ザシユツ

モンスターを一閃で切り伏せたのは、『劍姫』アイズ・ヴァレンシユタイン。レフィーヤには不思議と彼女が助けに来る予感があった。自分に危険が迫った時はいつも助けてくれる。そう、いつもそうだった。

アイズは魔法で風を纏い、花型モンスターへと切り掛かる。しかし彼女が今現在使っているのは『不壊属性』^{デュランダ}である愛剣ではなく、武器を修理する間借りているレイピア。アイズとモンスターの攻防に耐え切れず、レイピアはその刃の途中から砕けてしまった。

「っ！ 怒られる…。」

壊したレイピアによる叱責と弁償という現実には絶望するアイズだったが、武器を失った彼女に3匹のモンスターが襲い掛かる。武器は失ったがテイオナ、テイオネと共に戦えば何とかなる。頭を切り替え再び攻勢に出ようとしたアイズだったが、その時見つけてしまった。屋台の裏に身を小さくして隠れる、小さな猫^{キャットビープル}人の子供を。このまま戦い

を続けければ、間近にある屋台も只では済まないだろう。そうなればその子供も——。
「っ——！」

アイズは風で強引に身を反転させ、その場からの離脱を図る。しかし、流れに逆らうその動きは決定的な隙となつた。花型モンスターはアイズを逃がすまいと、その食虫植物を思わせる口で彼女を捕らえてしまった。

「アイズ！」

ヒリュテ姉妹が駆け付けようとするが、他の個体がそれを邪魔する。強靱な顎でアイズを啜えたモンスターは、そのまま壁へと彼女を叩きつけた。壁が大きく窪むほどの衝撃に、意識こそ保っているがすぐに立ち上がることが出来ない。

その場にやって来たエイナとミィシャに抱き起されたレフイーヤはその光景を信じられなかった。いつも自分を助けてくれる憧れの人が危機に陥っている。

じゃあ、その憧れの人を助けるのは——？

その時、戦いの場に新たな参戦者が現れる。彼は戦況を見るやレフイーヤの元へと近づき、彼女に何かを差し出した。

「悪いが今はこれしかないんだ。知ってるだろうが味は保証しない。……いるか？」

差し出す彼の名はアルク・サルマン。であれば当然、差し出されるのは間違いなくアレだろう。紺色に鈍く光るそれは彼女が普段使うそれとはまるで別物だ。しかし彼女

は以前の探索でそれをテイオナが使っているところを見ていた。その効果には、実績がある。

（守られているばかりじゃダメなんだ。私も、あの人を守るくらいに強くなりた
い。）

「もらいます。私に下さい！」

レフィーヤはポーションを受け取ると、躊躇う事無くそれを飲み干した。直後に襲つて来る苦みや渋味などが複雑に混ざり合った言葉に出来ぬ味。不味い。そうとしか言えない。しかしその効果は確かにあった。立ち上がれない程の激痛はもう、耐えられる。

「あ、あの…大丈夫、ですか？」

明らかに顔が青ざめている彼女をエイナが心配するが、レフィーヤはエイナの支えをゆつくりと解き、自力で立ち上がった。

「大丈夫です。……目が覚めました！」

薬の味に受けた衝撃で強引にその身を鼓舞し、エルフの少女は、再び戦場へと舞い戻った。

一方ダイダロス通りでは、今も尚鬼ごっこが続いていた。ベルとヘステイアはダイダロス通りの複雑な道を利用し、大猿シルバーバックに見つからないよう息を潜め隠れている。

そもそも逃がしたはずのヘステイアが何故またベルと共にいるのか。答えは簡単、彼女は戻って来てしまったのだ。ベルが彼女を死なせたくないように、彼女もベルを見捨てられるはずがない。ベルもそれを分かっているが、状況を打開する方法が思いつかない。しかし、ヘステイアは名案とばかりに1つの打開策を提案した。

「考え方を変えよう。ベル君がアイツを倒しちゃえばいいんだよ！」

自分の主神はいつたい何を言っているのだろう。困惑するベルだったが、ヘステイアも決して無策ではなかった。策の1つはこの場でのステータス更新。ヘステイアはここ数日とある事情で外出していたため、ベルのステータスはその間更新されていなかった。ベルには彼自身も未だ知らない成長速度向上のスキルを持っているため、この更新でかなり強くなれるはずだ。

そして、もう1つ。ヘステイアが切り札として出したのは1本の黒いナイフだった。それは、ヘステイアがベルのために鍛冶の神ヘファイストスに頼み込み作ってもらった一級品。ヘステイアがその力を宿し完成した、その名も『ヘステイア・ナイフ』。

「ボクが君を勝たせてやる！ 勝たせてみせる！」

自分があの猿に勝てる自信は無い。どんなに凄い武器であっても、それを使うのが駆け出しの自分では使いこなせないかもしれない。

「ボクは君を信じてる。」

それでももし神様が信じてくれるのなら。誰もが無理だと言おうとも神様が出来ると言ふのなら。

「だから君も信じてくれ。そのナイフを。ボクを。そして何より、君自身を！」

信じよう、神様を。 信じてみよう、自分の力を。

ヒューマンの少年は、再びその巨大な敵と対峙した。

（追いかける事しか出来ないなら、追いかけて続けるしかない！ いつか追いつく、その時まで。）

「私はレフイーヤ・ウイリデイス。 ウィーシエの森のエルフにして、このオラリオで最も偉大で誇り高いファミリアの一員！」

少女はその名乗りを以て、自らを奮起する。

（神様が与えてくれたステータスで、神様が与えてくれたこのナイフで、そして自分の力で僕は、大猿^{アイツ}を倒して見せる！）

「こんな僕でも、神様が信じてくれるなら。僕の方で、神様を守れるなら、」
少年もまた、自らの主神の信頼に応えんと、手にする新たな武器を強く握り締める。

「だから、この戦い——」

「僕は、この戦いから——」

「逃げる訳にはいかない!!」

2人の冒険者が今、躍進する。

「ウイーシエの名のもとに願う 森の先人よ 誇り高き同胞よ——」

レフィーヤが紡ぐのは、彼女の二つ名の由来ともなった魔法、その詠唱。

「我が声に応じ草原へと来れ 繋ぐ絆 楽宴の契り 円環を廻し舞い踊れ 至れ 妖精の輪——」

同胞であるエルフの魔法を、詠唱と魔法の効果を完全に把握する事を条件に、2つの魔法の詠唱時間と精神力を消費する事で使用可能とする召喚魔法^{レアマジック}。

「どうか 力を貸し与えてほしい 【エルフ・リング】！」

あらゆる魔法を紡ぎ出す彼女に与えられた二つ名は、『千の妖精^{サウザンド・エルフ}』。彼女自身の持つ一つ目の魔法の詠唱を終えたレフィーヤは、そのまま次いで“ある同胞”の魔法を召喚する。

「終末の前触れよ 白き雪よ 黄昏を前に風を卷け——」

「あの詠唱は……」

何とか態勢を立て直し、その刃のほとんどを失ったレイピアで再び戦線へと復帰したアイズは、レフィーヤの紡ぐ彼女の良く知る詠唱に気が付いた。それは、ロキ・ファミ

リア副団長であるハイエルフ、リヴエリア・リヨス・アールヴの攻撃魔法。

「まさかあの魔法を!? ……つて、危ない!」

テイオネも驚きレフイーヤのいる後方を振り向く。するとそこには、詠唱するレフイーヤへと向かっていく花型モンスターの姿。まるで先程の光景を繰り返すように、モンスターは迷いなくレフイーヤへと牙をむく。しかし、そこには先程はいなかった彼がいた。

「させねえよっ!」

開いたモンスターの口を両手で受け止めるアルク。それによりレフイーヤに攻撃が届く事はなかったが、レベル5の冒険者が苦戦する相手にアルクの力が通用するはずもない。確認するまでもなくモンスターの勢いに押されるアルクだったが、急にモンスターが横へと弾かれた。

「はあ…。 助かったわ。 ありがとうな、劍姫。」

「いえ、こちらこそ。 レフイーヤを守ってくれて、ありがとうございます。」

アルクを助けたのはアイズだった。気づけばテイオナとテイオネもレフイーヤを守るべく駆け付けていた。そして、その間にも詠唱は続く。

「閉ざされる光 凍てつく大地 吹雪け 三度の厳冬 我が名はアールヴ——」

彼女の周囲に冷気が集まる。淀みない詠唱が終わり、凍てつく魔法が炸裂した。

「ウイン・フィンブルヴェトル」!!」

その威力は、間違いなく戦いに終止符を打つものであった。その場の全ての花型モンスターが、いや、広場そのものが凍り付いた。モンスターはそのまま塵となり消えていく。その光景に、その魔法を見た事のないアルクは只々呆気にとられてしまった。

「助かったよ、レフィーヤ!」

気が抜けてしまい座り込むレフィーヤにティオナが抱き着く。アイズとティオネもそれに続くようにレフィーヤの元へと駆け寄った。

「リヴェリアみたいだった。ありがとう、レフィーヤ。」

「そ、そんなっ!」

アイズの言葉に赤面するレフィーヤ。憧れであるアイズを助ける事が出来た。それだけでレフィーヤは嬉しかった。そんな中、彼女達の元に見知った顔が現れた。

「皆、ご苦労さん。疲れとるとこ悪いけど、まだ仕事は残つとるでー。」

それはロキだった。彼女は屋台の裏に隠れていた猫キャットピール人の少女を連れて来ていた。

少女の手を引く逆の手にはどこかで手に入れたのかレイピアを持っており、それをアイズへと投げ渡す。

「アイズは逃げ出した残りのモンスターを頼むわ。ティオネとティオナは地下水路

や。さっきの奴がまだおるかもしれんからな。レフィーヤは治療な。これ以上

無理したらあかん。」

「…わ、分かりました。」

ロキの指示に頷く3人。レフィーヤも多少不満気ではあったが、自分の状況は理解しているのだろう。同じくその指示に頷いた。

「ウチはこの娘の親探さんとな。で、アンタは…。」

「俺は街の被害状況でも見て来ますよ。もし何かあったらギルドの方に連絡します。」

「そやな。よろしく頼むわ。」

残ったモンスターはアイズがいれば問題ないだろう。もし街で見つけたのであれば

ライガーファンク

大 虎の時のようにその場で対応すれば良い。地下水路に関してはアルクには荷が重

いだろう。大剣があればともかく、無手の状態ではアルクはあの花型モンスターには敵わない。間違いなく足手纏いだ。

「あ、あの、ありがとうございます！」

アルクがその場から立ち去ろうとしたその時、後ろから声がかけられた。声の主はもちろんレフィーヤだった。

「どういたしました。…つて程たいした事してないけどな。どうだった、噂のマズ

ボの味は。」

「え、えっと…あの…。」

「ははっ、自他共に認めるマズポなんだ。 気にすんな。 じゃ、またな。」

「はいっ！」

たいした事はしていないという言葉に謙遜はない。アルクはほとんど役に立つてなどいなかった。たった一撃すらまともに受けられず、アイズに助けられたのだから。それに比べてアルクがほんの少し、そう、少しだけ背を押した彼女は、その凄まじい魔法をアルクに見せつけた。

「強く、なりてえな。」

事態に気づき始めたのか、騒めき出す街の中で、アルクの呟きはその喧騒に掻き消された。

そしてダイダロス通りの戦いも、終息へと向かっていた。大猿シルバーバックに立ち向かうベルはその手にヘスティアからもらったヘスティア・ナイフを握り、狭い路地裏を駆ける。

（このナイフ、凄いい！ これならあいつにダメージを与えられる！）

ベルが元々使っていたナイフは、ヘスティアを逃がす時間稼ぎとして大猿と戦った時

にその硬い皮膚を貫く事が出来ずに折れてしまった。しかしヘスティア・ナイフは大猿を切りつけても刃こぼれする様子などない。むしろベルの気持ちに応えるようにその刃に神聖文字ヒエログリフを浮かび上がらせ、強さを増しているようにすら感じる。

「そのナイフは生きています！ 君のステータスに依じて、君と一緒に強くなるんだ！」

自分が狙われている事を忘れていたのか、ヘスティアは隠れていた建物の影から身を乗り出しベルへと自らの名を冠するナイフの力を伝える。当然それに気づいた大猿はターゲットをヘスティアに変え、向かい始める。

「そうはさせないっ！」

ベルは一気に加速し大猿に詰め寄ると、地面を蹴り飛び掛かる。だがそれに気づいた大猿は腕を振り上げ、ベルの体を上空へと突き上げた。

「ぐああっ——！！」

ナイフで防いだため直撃こそ免れたが、その衝撃はレベル1のベルにはあまりに重い。上空のベルが地上へと視線を向けると、落ちて来るベルに止めを刺そうと大猿が待ち受けている。

（やっぱり僕じゃ、敵わないのか……？）

尚も空へ上昇を続けるベルはその最中に何かを掴んだ。それは、建物同士をつなぐように張られた物干し用の紐だった。ゴム紐と思われるそれは、ベルの体に続くように上

空へと大きく引つ張られていく。そして、ベルの体はようやくやく上昇を終えた。

(いや、信じろ、神様を。 信じろ、僕自身を！)

直後、ベルは掴んだ紐の弾性を利用し、大猿の元へと急接近する。待つていたとばかりにベルへと拳を振り上げる大猿だったが、弾性により加速したベルはそれより早く大猿の元へと辿り着いた。

へウゴォア——！

速度を生かしたナイフによる一閃が、大猿に大きなダメージを与える。痛みに叫び声を上げ、その怒りをぶつけるためにベルの姿を探す大猿だったが、既に彼はもう、目前に迫っていた。

「トドメだつ!!」

ヘスティア・ナイフが、大猿の胸元に深く突き刺さった。再び痛みに叫びを上げる大猿は、力尽きたように膝をつき、倒れる事なく塵となつて消えた。

ベルが自身の勝利に気が付いたのは、大猿の脅威を前に隠れていたダイダロス通りの住民達の歓声が聞こえてからだった。

Recipe. 12 | 才能 + 茨道

「やったじゃないか！ ベル君！」

シルバーバックを撃破したベルの元にヘステイアが駆け付け、彼に思いきり抱き着いた。いつもであれば恥ずかしさに赤面する彼だが、勝利の余韻もあつてか笑顔でそれを受け止めた。

「やりました！ ありがとうございます、神様っ！」

「それはこつちの台詞だよ！ ありがとうございます、ベル君！」

その姿に、住民達は惜しみない拍手を送る。そしてその人混みの後方、人の間から僅かにそれを見る事が出来る場所にはアイズがいた。彼女はダイダロス通りの騒ぎを察知して駆け付けたのだが、到着した時には既に戦いは終わっていた。

（あの子は…。）

笑顔を浮かべる少年の姿に、アイズは見覚えがあつた。最初に出会つたのはダンジョンの中。5階層で自分たちが逃がしたミノタウロスに襲われる彼を助けたアイズは、何故か彼から逃げられた。予想外の事に落ち込むアイズだったが、彼との再会はすぐに訪れた。それは翌日の酒場での一幕。ベートがベルに逃げられたアイズをからかった

めに気が沈んでいたアイズだったが、そこには件の少年がいたのだ。話を聞いていたのだろう、彼は急に酒場を飛び出してしまった。

初めて会った時に彼が逃げた理由は分からない。だが、今度は分かった。自分達が、彼を傷つけたんだと。ミノタウロスの一件は、ロキ・ファミリアが原因だ。その被害者と言える彼を、他の誰でもない自分達が傷つけた。その事実には、アイズの気持ちは深く沈んでいった。

そしてこれが3度目。冒険者としての心も折ってしまったのではないかと懸念していた彼は、多くの人に称えられていた。直接戦闘を見た訳ではないが、この地へ逃げたのが中層のモンスター、シルバーバックであった事は知っている。駆け出しに見える彼がどうやってその大猿を倒したのかは分からない。ただ、きつと彼は「冒険」し、それを取り越えたのだろうか、そう思った。

「ちよつと待つてえな、アイズたん。せつかく合流出来たつちゆるのに。」

彼女がベルを見つめていると、後ろから主神であるロキが疲れた様子でやって来た。騒動の中で親とはぐれた猫人の女の子を送り届けた彼女は、引き続きオラリオを駆け回っていたアイズと合流していたらしい。しかし騒ぎの元へと急ぐアイズに結局置いて行かれたようだ。

ミノタウロスの件に酒場の件。謝りたい事はたくさんあるが、目の前の女の子と微笑

みあう彼の邪魔はしたくない。アイズは未だ冷めぬ喝采を背に歩き出した。

「あ、ちよ、アイズたん！　せやから待つてえな！」

息も整わぬ間に踵を返すアイズに抗議するロキ。疲れた状態ながらも遅れまいと着いて行こうとする彼女だったが、そこで何かに気が付いた。

「…ロキ？」

急に足を止めた主神に、それまで彼女を気にせず自分のペースだったアイズも不思議に思い足を止めた。

「急用思い出したわ。　逃げ出したんはこので最後つて話やったけど、一応注意しながら戻つてくれるか？　アイズ。」

「？　…はい、分かりました。」

先程とは少し様子が違うロキを疑問に思ったアイズだったが、それを追求はせず、報告のためにギルドへと向かって行つた。

「すごい騒ぎになっちゃいましたね。」

「うん、…そうだね。」

未だ勝利の余韻の中にいるベルだったが、ヘステイアの様子がおかしい事に気が付いた。

「神様？」

「よく、頑張った、…ね。 ベル…君…。」

ヘスティアはその言葉を最後に倒れてしまった。興奮気味だったベルの頭が一気に冷めていく。

「神様!!? 神様!!?」

ベルの呼ぶ声にも、ヘスティアはその目を閉じたままだった。

「ヘスティアには悪い事をしたかしら？」

彼女は建物の上からベル達を見ていた。危うく邪魔が入りかけた彼女の思惑だったが、結果は上々だった。視線の先の少年に抱きかかえられるヘスティアに内心で軽く謝罪して、彼女は衣で身を隠しダイダロス通りに消える。

「やっぱりまだおったか。 ちよつと話でもせえへんか? …フレイヤ。」

「ええ、構わないわ。 …ここじや難だから場所を移しましょうか。 ロキ。」

しかし、彼女に気づいた悪戯神が、そこにいた。

「で？ 気に入った冒険者の為かどうか知らんけど、えらい騒ぎを起こしてくれたな、フレイヤ。」

「だから言ったでしょう？ あなたにも付き合ってもらうかもしれないって。」

とある店の二階の個室。ロキの正面に座っているのは美の女神、フレイヤ。ダンジョンに蓋をするようにそびえる白亜の塔バベルの最上階に住む彼女は街へと下りずともその様子を知る事が出来るのだが、怪物祭の開催されたその日は地上へと下りて来ていた。実は、闘技場近くの屋台へ赴く少し前、ロキはアイズを伴ってフレイヤに会っていたのだ。その時フレイヤはこう言っていた。

——「気になっている子がいるの。」

美の女神に相応しい美貌を持つ彼女は、その魅力によって数多くの団員を抱えている。神すら魅了する彼女が気にかける冒険者とはいったい誰なのか。オラリオで唯一のレベル7の冒険者を待らせている彼女が単純に強い冒険者に興味を持つとは考え難い。

——「今はまだ強くはないわ。本当に偶然目に入ったというだけ。」

天界の頃から命を終えた英雄を集めていたというフレイヤ。彼女が興味を示す英雄が今オラリオにいるのかと思つたロキだったが、少し予想とは違うらしい。"今は"、と彼女は言った。もしかしたら、彼女はその手で自分に相応しい英雄を生み出そうとし

ているのかもしれない。

思惑についてははつきりとした答えを提示しないフレイヤに、自分やオラリオを巻き込むつもりかと問うロキ。そんな彼女に美の女神は笑顔で肯定を示した。

「確かにデカイ騒動の割りに住人に死者や重傷者はおらんかったみたいやけど、やり過ぎやで。」

彼女の思惑の一端を聞いていたため、ロキは今回のモンスター脱走事件がフレイヤの仕業だと判断した。彼女の魅力を以てすれば、モンスターすら魅了する事も可能だろう。規模に対し被害が小さかった事についてはフレイヤが何かしら細工したに違いない。彼女なりに気を遣ったのだろうが、それでもロキにはどうしても見逃せない事があった。

「それに何や、あの蛇みたいな花みたいなけつたいなモンスター。あんなのにも色目使ったんか？ 趣味悪いで。ウチの子達がおったから良かったものの、あんなん野放しにしたらいつ死者が出てもおかしくなかつたんやないか？」

それは、テイオナ達も見た事がないという花型のモンスターだ。レベル5であるアイズ達も苦戦する程のモンスターをガネーシャ・ファミリアがどうやって調教しようとしていたのかは知らないが、それを街へと放ったフレイヤを責めない訳にはいかない。

「そんなモンスター、私は知らないわよ？」

「…なんやて?」

モンスター脱走の主犯である事を隠そうともしないフレイヤが今更嘘を言っているとは思えない。だが、そうであるのなら、あのモンスターは一体——

怪物祭が終わった夜、オラリオには雨が降り始めた。月も見えない薄暗い街。人影のないそこにはある男神の姿があった。その手には極彩色の石。魔石のようだが、色は明らかに異なる。

「よく降るな……」

男神はそう呟くと、その極彩色の石を懐に収めた。

ミアハ・ファミリアの本拠である『青の葉舗』では、明日の開店に向けての準備が行われていた。その光景は、いつもと変わらない。もし違う点があるとするならば、今日は人数が多いということだろうか。

「これは、こつちで良かったですか? アルクさん。」

「ああ、それで良い。悪いな、店の手伝いなんかさせちまって。」

「いえ、迷惑をかけているのはこっちですから。これくらいは手伝わせて下さい。」

ベルが『青の薬舗』にしているのには理由がある。彼女の主神へスティアが倒れた後、その場にアルクが現れたのだ。一度ダイダロス通りで大きな物音を聞いていたため念のためにと再度来てみると、どこからか歓声が聞こえて来たため音の元へと向かったアルク。するとそこには涙を浮かべて慌てた様子のベルと、彼の腕の中で気を失ったヘスティアがいたのだ。

「もし俺が引き返さずにちゃんと調べてたら、駆け付けられたかもしれないんだけどな……。」

「いえ、アルクさんも街のために大変だったんですから、気にしないで下さい。」

「そう言ってもらえると助かるわ。」

今ヘスティアはナーザーザのベッドで寝ている。ミアハの診たところ、彼女は過労だった。しばらく経てば目を覚ますので問題ないらしい。

「こっちは終わりました。」

「ありがとうございます、シルさん。なんかすみません。付き合わせちゃって。」

さらにもう一人。自分が任された分を手早く並べ終えたメイド姿の女性がアルク達の元へとやって来た。彼女の名はシル・フローヴァ。『豊穡の女主人』の従業員である。「いえ、元はと言えば私が財布を忘れたせいでベルさんを巻き込んでしまったんですか

ら。」

彼女はどこからかベル達が『青の薬舗』にいる事を聞きつけたらしく、ヘスティア、というよりはベルの身を心配してやって来た。リユーからシルがベルを気に掛けていると聞いていたが、確かにその通りらしい。

「大きなモンスターをベルさんが倒したというのは聞きました。実は私もチラツとだけその姿を見掛けたんですが、思わず見惚れちゃいました。」

「え、えっと、それって…。」

「じゃあ、そろそろ店に戻りますね。アルクさんもこれで。あ、ティアさんが寂しがってましたよ?」

「ティア姉さんはそんな柄でもないでしょ。でも、その内寄らせてもらいますよ。」

2人に別れを告げ、シルは酒場へと戻って行った。ベルはまだ顔を赤くしたままであるが、その時奥の部屋から声がした。

「ベルく〜ん…。」

主神の呼ぶ声に、ベルは急いで駆け付けるのだった。

「うむ、もう大丈夫だろう。栄養のある食事も用意しているから食べて行くと良い。」

「ありがとう。助かるよ、ミアハ。」

目を覚ましたヘステイアの診断を終えると、ミアハは部屋を後にした。その際にアルクへと向けた目配せにその意図を察したため、アルクもミアハに続いて部屋を出た。

「それにしても、シルバークを倒すとはなあ。」

アルクは食事の準備を手伝いながら呟いた。少し前に7階層で気を失っていた彼とはまるで別人とも言えるベルの成長には感嘆するしかない。中層で戦えるとは流石に思えないが、このままいけばアルクがパーティの勧誘と共に提示した”10階層への到達”も近いだろう。

「確かにベルの成長には目覚ましいものがあるな。あそこまで急速に力をつけた冒険者は私も聞いた事がない。」

第一級冒険者であっても、そこまで到達するには長い年月がかかる。例えば駆け出しの冒険者が初めてのランクアップを迎えるには1年以上かかるのが当然。ワールドレコード世界最速がアイズ・ヴァレンシユタインが持つ1年という記録であるのがその証拠だ。

「もしかしたら、もしかするかもしれないな。」

そう遠くない未来、ベルはレベル2の舞台上上がってくるかもしれない。そして、その勢いが止まる事が無ければ、レベル2で足踏みしているアルクを容易に追い抜いてしまっただろう。その考えが頭をよぎった時、アルクの両の握り拳に力が入った。

（俺は、羨ましいのか…？ それとも、悔しいのか…？）

何度ダンジョンに潜つても、思ったようにステータスは伸びない。積み重ねが大切である事は知っているが、少なからず才能もステータスの上昇に関わってくる。経験のまだ浅いベルが異例の早さで強くなったのであれば、それはきつとベルの才能だろう。

そしてもう一人。アルクは昼の騒ぎで見たある冒険者の事を思い出した。傷を負いながらも戦場から降りずに立ち向かい、レベル5の冒険者も苦戦を強いられるモンスターを一撃の下に一掃したエルフの少女。レアスキルを発現しただけでは只の自慢話にしかならない。それを使いこなして見せたのは間違いなく、彼女の才能だ。

「アルク？ どうしたの？」

俯いていたアルクを心配してナーザが問いかける。アルクは少し疲れただけだ。その場は言い繕った。まるで彼の心を見透かすかのようにミアハがアルクを見ていたが、それに彼は気付かない。

アルクは岐路に立っていた。一方は自らが目指すと決めた“茨道”。そしてもう一方は、ずっとそこにあるのにアルクが見ようとしなかった道。第一級冒険者を目指すのであれば、進むべきは間違いなく後者。しかしその先に、アルクがかつて憧れたあの人はいない。

「アルク、強くなりたいか？」

「…もちろん。いつだって俺はそう思ってますよ。」

ミアハの質問に、アルクは当然といった様子で答えた。彼が強くなりたいと願っている事などミアハが知らないはずがない。何故今更といった様子のアルクにミアハは告げた。

「決めるのはお前だ。お前が望むように強くなれば良い。ランクアップをしないと、いう道も楽ではないだろうが、私は主神だ。いつでも助けになろう。」

「———ありがとうございます。ミアハ様。」

その道を選んでしまえば、きつともう茨の道へは戻れない。もう彼女には届かない。それはまるで自分への戒めのようにでもあった。

「おおー！ これは久しく食べてない家庭の味ってやつだね!? ベル君、早く早く！」

「ちよ、ちよつと待って下さい、神様！」

その時、上機嫌なヘスティアと、彼女に振り回されながらもどこか嬉しそうなベルがやって来た。いったい2人が何を話したのかは知らないが、見る限り問題なさそうだ。そんな2人に水を差してしまわないようにと、アルクは彼を悩ますそれを一度頭から振り払い、今はただ、ベルの成長を共に喜ぶ事にした。

動き出した歯車に少しずつ、少しずつ巻き込まれている事を、アルクはまだ知る由もない。そしてその中で彼はまた、選択を迫られる事になるだろう。

3章：『錬金術師、リヴィラを訪れる』

Recipe. 13 — お誘い + 場違い

怪物祭モンスターフェアが開催された翌日。アルクは久しぶりに酒場『豊穣の女主人』に食事に来ていた。外食に出る事のあまりないアルクだが、この酒場では従業員から良く顔を知られている。それは、アルクの噂によるのではなく、彼を良く知る人がそこで働いているからである。

「よっ。久しぶり、ティア姉。」

「アルクじゃん。ほんと久しぶりだね。今日も1人？」

「その言い方はなんか引つ掛かるな。…間違っちゃいけないけどさ。」

彼女の名前はティルニア・ヴィスキー。今は酒場の従業員として働いているが、以前は冒険者として活動していたヒューマンだ。彼女がアルクを良く知っているように、アルクもまた彼女を良く知っている。それも当然だろう。彼女はミアハ・ファミリア所属の冒険者だったのだから。

「そういう意味じゃないって。たまにはナアちゃんも連れて来てつて事。何を気にしてるのか知らないけど、どっちかって言うとなアちゃんは側なんだしさ。」

「まあ、誘うだけ誘つてみるよ。」

ミアハ・ファミリアに起こったとある出来事。ファミリアが今の状態になる原因となったそれに、彼女もまた関わっている。ナーザが冒険者を廃業し薬屋の仕事に専念しているように、ティルニアも冒険者という道を断ち、酒場で働いているのだ。

「ティア、サボリにや？ またミア母さんに怒られるにや！」

「いつも怒られてるアーニヤに言われたらお終いだわ。でも、確かにミア母さんに怒られるのは困るわね。それじゃあ戻るわ。たくさん食べてってね、アルク！」

「ま、程々にな。」

アルクが酒場へやって来たのは、昨日シルが別れ際にティルニアの話をしたためだ。アルクが酒場に来ない事でティルニアが寂しがるとは思っていなかったが、なんとなく気が向いたため足を運んでみた。

「サルはまたジュースにや？ まだまだお子様にや！」

「いいだろ、ほつとけ。あと俺はサルじゃない。」

酒場であるにも関わらず、アルクは酒を飲まない。苦手というよりも、アルクには酒の味が良く分からないのだ。味も分からないのに割高な酒を飲むなどアルクがするはずもない。

「アーニヤ！ 暇なら注文取つて来な！」

「にや!? はいにや!」

人に言っておいて自分が怒られては世話がない。注文取り待ちの客の元へと走り、その途中でテーブルにぶつかり再び怒られるアーニヤの姿にアルクはやれやれとため息をついた。

「あ、いた! アルクー!」

アルクが食事を終えようとしていた頃、豊穰の女主人をとある人物が訪れて来た。しかし彼女はアルクに用があるようだ。アルクを見つけると、その人物——ティオナはアルクの元へとやって来た。

「やつほー。お店に行ったらここだつて聞いたからさ。」

「店まで行つたのか。それは悪かつたな。俺に何か用があるて事は、…マズボか?

まだあまり数は出来てないんだが…。」

「違う違う。実はウルガの製作費を稼ごうと思つてさ。ちようどいいからアルクも

どうかなくて。」

前回の探索で新種のモンスターに溶かされて、一から作らざるを得なくなった彼女の武器。やはりというか、その金額は今の彼女には絶望的だった。止む無くお金稼ぎにダンジョンへと向かう事になった彼女は、そこでアルクとの約束を思い出したのだ。

「いいのか? 多分レベル2の俺じゃ足手纏いだぞ?」

「いいっていいって。お礼なんだし。」

彼女なら武器を一振りしただけでマズポではない普通のポジションが買えてしまう気もするが、せつかくの機会を棒に振る必要もない。アルクは彼女の厚意に甘える事にした。

「それなら同行させてもらおうかな。いつ行く予定なんだ？」

「明日!」

「明日かよ。まあ準備については問題ないんだけどな。」

話をした翌日という急なスケジュールだったが、怪物祭の中で彼女の主神であるロキからそのお誘いの可能性は聞いていたため、アルクは既に準備万端だった。中層用に少し備えを多めにしているため、改めて何かを購入する必要もない。

「じゃあ明日、ダンジョン入口に集合ね! 何人か誘って行こうと思うんだけど、大丈夫だよな?」

「あの”凶狼”じゃなければな。」

「あははっ、ベートは一緒に行動するのとか苦手だし、もし誘ったとしても絶対来ないと思うな。」

実際のところ、アルクはベートの事を特に嫌ってはいない。どちらかと言うと、ベート側がアルクを嫌っているのだ。あまり面識はなくとも彼の性格はおおよそ理解して

いるため、彼を話題に挙げたのは、アルク的には冗談のつもりである。

「じゃあ明日、ダンジョン前だな。了解。」

「モンスターは私達が片付けちゃうから、アルクもゆつくり薬草集め出来ると思うよ。」
「戦える内は戦うさ。 どうにもならなかったら遠慮なく頼らせてもらう。」

「うん！」

その後お腹が空いたという事で、ティオナはそのまま料理を注文した。食事を終えたアルクも先に帰る事はせず、ジューズを飲みながらティオナと話をする事に。その内容は主に、昨日のモンスター脱走事件についてだ。広場での戦いの後、地下水路に向かったティオナとティオネであったが、地上に現れた花型モンスターの姿はなかったらしい。ちなみに、新種の花型モンスターはその姿と大きさから、「食人花」と呼ばれるようになったとか。

「ガネーシャ・ファミリアの調教リストにもなかったみたいだし、いったい何だったんだろうね、あのモンスター。」

「連れて来たんじゃないなら、自力で上がって来たかもしれない訳だしな。もしそうなら、あの強さを考えても正直洒落にならないぞ。」

脱走騒動こそ解決したが、その代わりに大きな問題が発生してしまった。しかし謎の多いその食人花について語れる事もなかったため、アルクとティオナは他愛もない話に

花を咲かせたのだった。

そして翌日、ダンジョンの前でアルクは目の前の状況に呆然としていた。

「初めまして、アルク・サルマン。僕はロキ・ファミリア団長のフィン・デイムナだ。ティオナやレフィーヤが世話になったと聞いている。今日はモンスターを気にせずゆっくり採取に専念してくれ。君の安全は僕が保証しよう。」

フィン・デイムナ。ロキ・ファミリアの初期メンバーにしてレベル6である彼に与えられた二つ名は、”勇者”^{ブレイバー}。小人族バルウムの小さな体に似合わぬ覇気がヒシヒシと感じられる。

「たいした事はしてないですよ。既に知ってるみたいですが、俺はアルク・サルマン。ミアハ・ファミリア所属です。」

少年にも見える姿のフィンに長身のアルクが敬語を使う光景は違和感があるが、決して間違いではない。ちなみにこう見えてフィンは40代である。詐欺だ。そんなフィンとの挨拶を終えると、アルクを呆然とさせたもう1人の人物がそれに続いた。

「副団長のリヴェリア・リヨス・アールヴだ。」

”高貴”という言葉が似合うハイエルフの女性、リヴェリア。彼女は簡単に挨拶を終えると、その何かを見透かすような瞳でアルクをジッと見据えた。

「えつと…、何か？」

「いや、何でもない。すまなかつたな。」

アルクがその視線の理由を聞いたが、答えはなかつた。

ちなみに他のメンバーは、発案者のティオナ以外にティオネ、レフィーヤ、アイズとなつている。お出かけ感覚で深層まで行けてしまえる錚々たる顔触れに、アルクは自分が明らかに場違いであると感じざるを得ない。いつそこのまま辞退した方が良いでしょう。

「あんたがアルクね。ティオナから話は聞いてるわ。私はティオネ・ヒリュテ。

怪物祭じやまともに挨拶する暇もなかつたしね。今日はよろしく。」

彼女の言うように、怪物祭の際は食人花を相手に同じ場に居合わせていたのだが、脱走したモンスターの撃破とその後始末に追われ、アルクとは特に挨拶もしていなかった。応えるようにアルクもティオネに挨拶し、これでようやく今回のメンバーと顔見知りとなつたアルクだった。

「増えるとは聞いてたが、どうしてこうなつたんだ？」

「えつとねえ、アイズが借りてたレイピアの弁償代を稼がなくちゃいけないって話だつ

たから誘つてえ、レフィーヤも一緒に参加したいって事になってえ、フィンとリヴェリアも誘つてみたらオツケーって事でティオネも付いて来たの。」

「…まあ、なんとなく分かった。」

要は声を掛けてみたら皆参加する事になった訳だ。顔触れについてはロキ・ファミリアの若き幹部でもあるティオナが発端であればこうなってしまうものなのかもしれない。

「しかし、劍姫まで金に困つてるとはな。一級も楽じゃなさそうだ。」

「あの…。」

アルクが冒険者生活の世知辛さを憂いていると、アイズが話しかけて来た。

「ん？ なんだ？」

「私の事は、”アイズ”でいいです。親しい人は皆、そう呼ぶので。」

親しいという程の付き合いはないが、冒険者によつては二つ名で呼ばれるのは好きではないという者もいる。他でもないアルクがそうであるように。特に名前と呼ぶ事に抵抗がある訳でもないし、むしろその方がアルクとしては好みである。

「分かった。改めてよろしくな、アイズ。」

「はい、アルクさん。」

「俺にも敬語なしで構わないぞ？ 年も同じくらいだろうし。」

アイズの実年齢は知らないが、ベルよりは少し年上と判断したアルク。ベルは14歳だと聞いていたため、それより少し年上ならば、アルクとほぼ同じ歳だろう。

「そう、なん…、そうなの？ 年上かと思った。」

「無駄にデカいからな。 これでもまだ16だよ。」

「本当に同じ年なんだ。 うん、分かった。 改めて、よろしく。」

ベルの気持ちを知っていながらアイズとの距離を縮めつつあるアルク。しかし当然アルクにその気はない。アイズと話す途中でレフィーヤが割り込んで来たりティオナが飛び込んで来たりと少々騒がしくなったが、団長であるフィンの一声でアルク達はようやくダンジョンへと足を踏み入れたのだった。

ダンジョン探索は早くもアルクの知らない世界へと突入していた。

「うーん、手応え無いなあ。 せっかく二代目オルガでの初探索なのに。」

「まあ、この階層じゃあね。」

ヒリュテ姉妹の会話を聞きながら魔石を拾うアルク。何故アルクがそんな事をしていのかというと、単純にやる事がないのだ。現在アルク達がいるのは17階層。この

階層になるとアルクも来る事がないため、自分の力がどこまで通用するか気になってくる。しかし、それ以前の話だった。そもそもアルクが戦闘に出る状況にならないのである。

「フィン、どうする？ このまま19階層まで行っちゃおう？」

探索した先で稀少な薬草を見つける可能性があるため行きでは特に採取を行っていないアルク。そうになると、戦闘も任せきりとなっている彼は完全に手持無沙汰となる。そのため、少しでも何かしようと思い、買って出たのが魔石拾いだ。

「いや、リヴィラに寄って行こう。集まった魔石も換金しておきたいしね。」

ちなみに適正レベルとはいえアルクが1人でパーティの後を着いて行くのは危ないだろうとアイズとレフィーヤが彼と共に進んでいる。レフィーヤについては元々サポーターとして働く予定だったらしく、アルクと同じように魔石を拾っている。アイズはただそれを見守るだけであるが、アルクのような手持無沙汰というよりは、今後に向けて温存しているという方が正しいかもしれない。

「よしっ、これで拾い終わったかな。」

「そうですね。見た限りでは大丈夫だと思います。」

ドロップした魔石を残したままだと、以前のミノタウロスのようにそれを食らい、モンスターが強化してしまう可能性がある。そのため、魔石は基本的に拾うか、拾い切れ

ない場合は砕いて行くのが常識だ。

「ありがとう、2人共。もう少して安全階層だ。セーフティポイントそこで一度休憩にするから、もう少し頑張つてくれ。」

「分かりました。と言つても、たいして疲れてはいないですけどね。」

「それは頼もしい限りだ。」

普段行かない階層まで来ているとはいえ、一番体力を使う戦闘がないのだ、アルクの体力は全然消費していない。それはロキ・ファミアでの遠征も経験しているレフイーヤも同様だ。しかしそこまでで回収した魔石は今後邪魔になるため一度換金する必要がある。

「アルクはリヴィラには行った事あるの?」

「いや、ない。基本日帰りだったし、何よりアドバイザーの話じゃ物価が異様に高いからな。行こうとも思わなかった。」

レベル2のアルクの適正範囲という事もあり、アルクはリヴィラについて担当アドバイザーのミイシャから説明を受けていた。

18階層は安全階層セーフティポイントと言われ、モンスターが発生しない。光り輝く水晶が数多く存在し、豊富な果実や綺麗な水といった大自然が広がっているため、その階層は『迷宮の楽園』とも呼ばれている。その階層にあるのが冒険者の街『リヴィラ』だ。冒険者達が探

索の途中で訪れるその街は彼等にとつて数少ない補給の場。しかしそんな冒険者達の足元を見るかのように、リヴィラで売られる商品は高い。その高さといったら、ぼつたくりと言つても過言ではないレベルなのである。リヴィラの話聞いたアルクが自分に縁のない場所だと思つたのも無理はないだろう。

「とりあえず今日はリヴィラで宿を取ろうと思う。もちろん、僕の奢りでね。」

「やったー！ フィン太っ腹ー！」

「流石団長ー！ もちろん部屋は私と——」

「アルクも、それで構わないかい？」

「いいんですか？ 俺まで奢つてもらつて。」

「構わないさ。むしろ僕としては同室の相手がいてくれると助かるんだ。 ……いろいろとね。」

直後にアルクに突き刺さる視線。その視線の主は探すまでもなくフィンの後ろに立っていた。最早殺気にも近いティオネの怒りの形相に、以前ミノタウロスの至近距離での強制停止にも耐えてみせたアルクは、顔を引きつらせ完全に固まってしまった。

その後こつそりとフィンに、ティオネからのアプローチに手を焼いていると聞かされたアルクは、苦笑いで「頑張つて下さい」と返す事しか出来なかつた。

Recipe. 14 | 冒険者の街 十 事件

アルクにとっては初となる安全階層セーフティポイントへと到着した。辺りを見渡せば森林が広がっており、水晶の塊が至る所から顔を出している。何よりその地上と変わらない明るさから、そこがダンジョンである事を忘れそうになる。

「天井の大きな水晶が光って、階層中を照らしているんです。夜の時間に合わせて水晶も光らなくなるので、本当に夜が来たように感じられるんですよ。」

アルクの心中を察したようにレフイーヤが解説する。上を見上げれば、確かに天井にはびっしりと水晶が広がっている。アルクが視界を埋め尽くす程の水晶に感嘆していると、そこで何かが視界へと入って来た。

「あれは、鳥か？」

「モンスターだと思います。ここには果実や水が豊富ですから、他の階層からモンスターが餌を求めてやって来る事も珍しくありません。」

安全階層というのはあくまでこの階層でモンスターが発生しないというだけで、他の階層からのモンスターの侵入は話が別らしい。安全と言えどやはりダンジョン。油断は許されないらしい。

「それじゃあ早速、リヴィラに向かおうか。」

「おーっ！」

「ちよつと、待ちなさいよテイオナ！」

「やれやれ、落ち着きのない。」

「まあまあ、元気があつていいじゃないか。」

ここまで戦闘続きだったとは思えないヒリユテ姉妹が先を行くと、リヴェリアはその様子に溜息をつく。フィンという言葉は少々爺臭い気もするが、アルクも概ね同意見だ。

「皆も早くー！」

急かすテイオナとそれを追うテイオネに続き、残りのメンバーもリヴィラへ向け歩き出した。

到着したリヴィラの街。その異変に初めに気が付いたのはフィンだった。

「おかしいな。妙に人が少ない。」

「確かに、いつも店を開いているはずの商人も見当たらないな。」

店先に人が出て来ていないという訳ではない。人の気配がしないのだ。冒険者が

やってくれば金稼ぎのチャンスであるはずなのだが、アルク達を迎えるような雰囲気は一向にない。

「あれ？　なんかあつちの方に人が集まってない？」

ティオナが指差す方を見てみると、そこには人の姿があつた。それも1人や2人ではない。まるで何かに群がるかのように人がその場に集まっている。商人がいないのではしやうがないと、アルク達は人の集まるその場所へと向かう事にした。

「やあ、ボールス。　いったいどうしたんだい？」

「なんだ、ロキ・ファミリアじゃねえか。」

フィンが声を掛けたのは、左目に眼帯を巻いた男だつた。彼の名はボールス・エルダー。リヴィラの元締めであり、冒険者としてのレベルは3だ。元締めの彼が騒ぎの中心にいる以上、街で何か事件が起こつたのは疑いようがない。

「殺しだよ。　宿で男が殺された。」

”襲撃”ではなく”殺し”。つまり男はリヴィラへと入り込んだモンスターに殺されたのではなく、同じ冒険者から殺されたという事だろう。ボールスの言葉にアルク達は驚き、フィンやリヴェリアも眉をひそめた。レフィーヤに至っては少し青ざめている。

「犯人の目星は？」

「宿の受付をやつてた奴の話じゃ男は女連れだったらしい。だが現場にはそんな女いなかった。おそらくそいつが犯人だ。」

現場を見せて欲しいというフィンの希望により、一行は宿のとある部屋へと案内された。そこでアルク達が見たのは、下顎から上を失った状態で仰向けに横たわる男の遺体だった。

「うっ…。」

その見るも無惨な姿に耐え切れず、レフィーヤは顔を逸らしてしまった。他のメンバーも程度の差はあれどそれぞれが顔を歪めている。その中でフィンだけはその遺体の惨状に臆さず遺体やその周辺を調べている。

「ボールスさん、取つて来ました。」

「おう、ありがとよ。」

「ボールス、それはもしかして…。」

1人の男がやって来て、ボールスに何かを渡した。それは赤い液体の入ったガラス瓶。その時アルクはリヴェリアの視線が険しくなった事に気が付いた。

「ああ、『開錠薬』だ。」

『ステータスシフト』

『開錠薬』とはその名の通り、眷属のステータスを盗み見る事を可能とする薬である。

本来ステータスは眷属の背中に刻まれるものであり、主神がそれを施錠^{ロック}する事で他人に見られないように出来る。開錠薬は眷属の背に垂らす事でその施錠を外し、ステータスを浮かび上がらせる薬なのだ。

「死者を冒瀆するような行為は褒められたものではないが…。」

「仕方ねえだろ。これじゃ何処の誰かも分からねえんだ。」

開錠薬は罪人の身元を明かす時等に特例として使われている。物言わぬ亡骸のステータスを晒すのは神意に背くような行いだろう。しかしボールの言う様に、遺体は頭のほとんどを失っておりその身元を確認は出来ない。事件と考えるのであれば身元を知る事で解決の糸口にもなり得るし、何よりこのままではその死を伝えるべき相手に伝えられない。抵抗はあっても理解はしているのだろう、リヴェリアもそれ以上何も言わなかった。

「それじゃあやるぞ。」

ボールスは、開錠薬を一滴、遺体の背に垂らした。すると、スツとその背に施錠されていたステータスが浮かび上がる。

「神聖文字は読めるか？ ハイエルフさん。」

神聖文字は神が扱う文字であり、眷属達にはそれを読む事が出来ない。しかし、エルフの中でも高位となるハイエルフには神聖文字に精通する者も多い。他人のステータス

を盗み見るという行為に未だ気が進まないリヴェリアであったが、遺体の傍へとやって来て、その背に浮かぶステータスの内容を読み上げた。

「ハシャーナ・ドルリア。所属はガネーシャ・ファミア。……レベル4。」

「レベル4だど!? そんな男がこんな簡単にやられちまったつてののか!」

ポールの発言は、遺体や現場の状況に基づいてのものだった。

まずは遺体。下顎から上を粉碎された点に目を奪われがちだが、その首には絞殺を思わせる手形がしっかりと残っていた。耐久というステータスは何もモンスターだけに對して効果を發揮する訳ではない。レベル4の冒険者の耐久を上回る力でなければ死に至らしめる事等出来ない。

もう一つは現場の状況。殺人現場に争った形跡がないのだ。ハシャーナが男で犯人が女なのであれば、隙を作る事も可能かもしれないが、その場には抵抗の跡もない。レベル4の冒険者を抵抗さえ許さず絞殺したのであれば、間違いなく犯人はそれ以上のステータス。

「犯人のレベルは4、いや、5以上と考えるべきか。」

レベル5以上の女冒険者。それだけで候補はかなり絞られるだろう。

「ま、まさか、お前等の中にこいつを誑し込んで殺した犯人が——」

「あたしが団長以外に色目を使つたつて言いたい訳……?」

「い、いえ、何でもありません！」

確かにこの場にはレベル5以上の女性が4人いる。しかし彼女達は全員男性と2人で宿に泊まるなど考えられない面子ばかり。フィン以外の男と宿に泊まる等あり得ないと思いを露にするティオネを前に、ボールスは震え上がった。

これも巡り合わせというやつだろうとフィンは事件の捜査を手伝う事にした。自分のファミリアの団員ではなく今回特別に同行している形のアルクにも改めてその寄り道について話をしたが、アルクも手伝う件には賛成だった。今は女冒険者という手掛かりから街中の女性を集めて事情聴取をしている。レベルについての問題はあったが、女性である事を武器に油断させれば犯行は可能かもしれないというボールスの意見で話は進んでいる。

「油断程度じゃステータスの差は覆らないだろうけどな。」

リヴィラの街を探索しつつアルクは呟く。おそらくフィンも同じ考えだろうが、とりあえずは街の元締めであるボールスに任せるつもりなのだろう。事情聴取の裏で、リヴェリアと事件について話し合っている。

「ないねー、手掛かり。」

「そもそも何が手掛かりになるか分からないからな。」

現在アルクと共に探索しているのはティオナだ。アイズとレフィーヤは別の場所を調べている。ティオネに関しては、事情聴取に集められた女性達がフィンに色目を使うのではないかとその傍に控えている。

「せめて容姿を覚えててくれたら良かったんだがな。」

犯人と思われる女を見た受付の話では、女はフードを被っていて、体のラインから女性と分かったただけらしい。特徴が分からないのでは探しようがない。

「あとは、何かを盗んだかも、だっけ？ 何かって言われてもなあ。」

現場には確かに争った跡はなかった。しかし、1点のみ荒らされた形跡があった。それは、被害者のハシャーナの物と思われる鞆だ。鞆は大きく裂かれ、中身が溢れていた。その周辺には一切傷等見当たらないのに、その鞆にだけ、である。それを元にフィンが導き出したのが、ハシャーナの持つ“何か”を奪うために犯行が行われたのではないかという推理だった。

「そもそもまだ街にいたとは思えないんだよなあ。 目的の物を奪ったなら、さっさとここから離れるだろうし。」

「だよねえ。 オラリオに戻ってレベルが高い女性を調べた方が良くかも。」

手伝うとは言ってもあまりに手掛かりが少ない。そのためアルクとティオナの口からはだんだんと愚痴が増えて来る。一度アイズ達と合流し、情報を整理した方がいいだ

ろうかと思ひ始めたアルクだったが、そこで突然、地面が大きく揺れ始めた。

「何っ!? 何が起こったの!?!」

「——っ!?! おい、あれって…。」

揺れと同時に聞こえた破壊音にアルクが目を向けると、そこには目を疑う光景が広がっていた。

街の至るところから地面を突き破り伸びるもの。緑の細長い体をしならせ、その先端には不気味な歯を覗かせる花。食人花だ。

「うそ、何でこんなところに食人花が!?!」

「分らない。だが、街がやばい状況だつてのは確かだ!」

既に街のあちこちから悲鳴が上がっている。足踏みしている暇ではない。戸惑っている場合でもない。アルクとティオナは食人花を倒すべく走り出す。

「アルク、大丈夫? あいつ結構強いよ?」

「今日は大剣があるからな。この前のリベンジをさせてもらうさ。もしダメそうだったらよろしく頼むわ。」

「しようがないなあ。ま、私とウルガに任せておけばあんな奴さつさと片付けちゃうけどね!」

鬼に金棒、ティオナにウルガ。頼もしい事この上ない。しかしアルクも黙って見てい

るつもりはない。背負った大剣に手をかけ、街へと牙を剥く食人花へと飛び掛かった。

「そいつを渡してもらうぞ、——」アリア」。

「っ！　なんで、…その名前を。」

一方アイズ達の目の前には赤髪の女性が立っていた。彼女の狙いはレフイーヤが抱える大きく丸い包み。そしてそれは、赤髪の女性がハシャーナから奪おうとしていた物。つまり、目の前の女こそがリヴィラで起きた事件の犯人なのだ。

「何なんだよ、あいつはっ！」

アイズが女と対峙する後方でレフイーヤと共にいるのは犬シアンスローブ人のルルネ・ルイー。ヘルメス・ファミア所属の冒険者だ。彼女はハシャーナから女が狙うその包みを受け取り、地上へと持ち帰る途中だった。しかし、ハシャーナが殺された事で動揺した彼女にアイズが気づき、問い詰めたのである。アイズ達はその包みがまた狙われる可能性を危惧し、ルルネを連れてフィン達の元へ向かおうとしたが、その時立ち塞がったのが、赤髪の女であった。

（まさか、アイズさんが圧されてる!?!）

包みを奪うべく攻撃を仕掛けて来た女にアイズが立ち向かうが、その形勢は赤髪の女の方が優位であった。しかも、アイズは魔法によりその身に風を纏った状態。その効果

で強化されて尚、アイズは圧されているのである。

(なんとか魔法で援護を！)

アイズを助けるために魔法の詠唱に入ろうとしたレフィーヤ。しかし、詠唱に入った瞬間地面を突き破り食人花が姿を現す。レフィーヤはその光景に見覚えがあった。それは怪物祭で食人花と戦った時の事。レフィーヤが詠唱に入るとそれを妨害するように食人花は狙いをレフィーヤに定め、襲つて来た。

(まさか、魔力に反応しているの…?)

また詠唱中に襲われてはいけないと途中で詠唱を止めるレフィーヤ。今彼女が戦闘不能になつても助けられる者はここにはいない。悪化する状況に頭を巡らせる彼女だったが、その時彼女の持つていた鞆が輝き始める。

「えっ!？」

「な、なんだ!？」

次の瞬間、弾けるように飛び出したのは事件の鍵を握つていられると思われる丸い包みだった。それは飛び出した勢いで包みが剥がれ、その正体を明らかにした。一見すると緑色の水晶。しかし、その内部には不気味な生き物がいた。胎児のように体を丸めていたそれは、ギョツと目を開くと自らを覆つていた水晶から飛び出す。レフィーヤとルルネがその光景に声も出ない中、その不気味な生き物は、その場に現れた食人花へと張り

付いた。

「いったい何を…。」

レフィーヤの疑問に答えるように、その変化は起こった。食人花の先端、花と思われるそれが姿を変え始めたのだ。口から何かが生え始めその姿が少しずつ明らかになる。それはまるで、人の上半身。食人花は人——おそらくは女性——の体を模したモンスターへと姿を変えた。

↑——キイイ——!!↓

そのまるで叫びのような鳴き声が、リヴィラの街に木霊した。

Recipe. 15 — 食人花 + 調教師

アルクはフィン達と合流し、食人花の討伐を続けていた。とはいえ第一級冒険者のフィン達と違い三級でしかないアルクは前線で大立ち回りという訳にはいかない。ティオナ達が倒した後にまだ息のある食人花のトドメや、街を攻撃しようとする食人花の気をポーシヨン等で逸らす事。それがアルクの主な役割だった。

「結局は任せつきりか……。格好つかないな、こりや。」

大剣さえあれば戦えると踏んでいたが、それは甘かった。食人花の茎とも体ともとれる部分に大剣を振り下ろしたが、刃こそ通れど切断には至らず。ほとんど動かなくなつた状態であれば全力を以て両断出来るが、乱戦の中では不可能。やむなく支援に回る事に。

「タイミングといい場所といい、妙に統率が取れてるな。」

「どこかに調教師テイマーがいるかもしれない、という事か？」

「ああ、可能性はある。」

フィンとリヴェリアは冷静に戦況を分析しているが、アルクは体を動かす事に精一杯で頭がなかなか回らない。街の住民へと襲い掛かる食人花へ向け発火薬を投擲するア

ルクだった、そこで突然街に声が響いた。

「——キィー——!!」

まるで叫びのようにも聞こえる声に驚き振り向けば、そこには食人花とは違った得体の知れないモンスターが存在していた。緑色の巨人のような上半身だが、その下は食人花のような長い体。食人花の先端を強引に人型に成形すれば、それと似た化け物が完成するかもしれない。

「また新種?! 勘弁してよお!」

「もしかしてあれ、食人花の親玉じゃないの!?!」

テイオネの予想が正しければ、親玉を倒す事で戦況を一気に動かせるかもしれない。どのみち倒す必要があるのならと人型へ標的を絞るフィン達。しかしそこで、人型が現れた方から誰かが走って来るのが見えた。

「団長、リヴェリア様! ア、アイズさんが!」

それはレフィーヤだった。ルルネと共に駆けて来る彼女はとても慌てた様子でフィン達の元へと辿り着いた。息も整わない状態で途切れ途切れに彼女が語る状況に、フィンは顔をしかめる。

「アイズが苦戦する相手とはね。すぐに助けに行きたいが、こつちも手が離せなくて、…ね!」

話しながらも襲い来る食人花を薙ぎ払うフィン。敵は会話も容易にはさせてくれないらしい。アイズの危機に駆け付けるためには人型のものを含めた食人花の群れを片付けるしかない。

「それと、1つ気づいた事があって。」

「気づいた事？ 何だい？」

「食人花なんです、魔力に反応して攻撃を仕掛けて来ているみたいなんです。」

レフィーヤは怪物祭の時の状況も併せて語った。曰く、食人花は魔法の詠唱に敏感に反応し、その行使者を優先的に攻撃するらしい。ヒリュテ姉妹は初めにレフィーヤが食人花の攻撃を受けた際にその場にいたし、アルクも詠唱するレフィーヤを狙う食人花に立ち向かったためその説については納得出来た。

「魔力に反応する、か。 だがあのモンスターについては魔石はおそらく人型部分の何処かにあるはずだ。 位置が高い分魔法での攻撃が有効だと思っただが…。」

食人花は魔石があると思われる花の部分で直接攻撃してくるため、そこを衝く事が出来る。しかし、人型については腕を使った攻撃が主のようで、体を地へ近づける事がほとんどない。周りの食人花等の妨害を掻い潜りその人型部分を直接攻撃するのは困難だ。

「それならばいい案がある。」

リヴェリアの作戦は至極単純なものだった。いわゆる囮作戦である。

まずはリヴェリアが魔法の詠唱を行う。食人花が魔力に反応するのであれば、オラリ才最強の魔術師と言われるリヴェリアの魔力に反応しないはずがない。食人花が姿を変えたという人型についても同様だろう。彼女の強い魔力にモンスターが惹きつけられている間に別の場所ではレフィーヤが詠唱を行う。たとえリヴェリアの詠唱が邪魔されたとしても、レフィーヤ側で詠唱が終われば魔法での攻撃が出来るという訳だ。

「それじゃあ、そつちは任せたよ。」

アイズの心配もあるため時間に余裕はない。作戦が決まるとアルク達は各々の配置へ移動する。リヴェリアの護衛はフィンとティオネが、レフィーヤの護衛はティオナとアルクが担当する。

「フィンさん。少しだけ魔石、もらってもいいですか?」

「構わないが、何に使うんだい?」

「錬金の素材に少し。」

「なるほど、分かった。遠慮なく持って行ってくれ。」

念のためにと『錬金混成』^{アルケミックサ}の素材用に魔石を少しポケットに入れておくアルク。使える手は多いに越した事はない。それがたとえ勝算の少ない未知の薬だとしても。

「終末の前触れよ 白き雪よ 黄昏を前に風を卷け——」

リヴェリアの詠唱が始まる。食人花達は感じた事の無い強い魔力に惹かれ、そちらへと向かって行く。

「誇り高き戦士よ 森の射手隊よ 押し寄せる略奪者を前に弓を取れ——」

そしてレフィーヤの詠唱も別の場所で開始される。しかし、リヴェリアの魔力に引き寄せられる食人花達はレフィーヤの魔力に気が付いていない。

(何でだろう、作戦はうまくいっているのに、……少し……)

レフィーヤのその気持ちがおそろいと言われれば、おそらく劣等感だろう。リヴェリアとレフィーヤの魔力の差が、敵の動きに如実に表されている。リヴェリアの強さを十分に知っている彼女だったが、ただの1匹すら彼女に見向きもしない事に、改めてリヴェリアとの差を感じていた。

そんな彼女に気が付いたのはアルクだった。彼女が顔に浮かべた感情に、アルクは覚えがある。それは、初めて会った時のベルだった。彼が自分の弱さを痛感し、強さを求めていたその時の顔が今のレフィーヤと似ているような気がした。

(彼女程の強さがあってもまだ上は遠い、か。)

上には上がいる。アルクの上にはどれだけの冒険者がいるのだろうか。きつとそこには自分の師がいる。アルクの親もいるだろう。そして、アイツもきつとそこにいる。

(もしかしたら、俺も似たような顔してるのかもな。)

アルクは大剣を強く握り締めた。

強い魔力に反応し、リヴェリアへ猛攻を仕掛ける食人花。フィンとテイオネはそれなんとか捌き切り、リヴェリアの詠唱を邪魔させまいとしてきた。しかし、人型のそれが間近へとやって来ると攻撃の手はさらに勢いを増し、対処が難しくなってくる。1匹の食人花がその守りを掻い潜り、リヴェリアへと迫る。

「閉ざされる光 凍てつく大地 吹雪け——。っ！」

詠唱しながらもそれを察知したリヴェリアは詠唱を中断し、敵の攻撃を避ける。魔法の発動には至らなかつたが、問題はない。本命は彼女レヴィーヤなのだから。

急に感じていた魔力が消え、一瞬動きが止まった食人花達。だがそこで、別の場所に魔力を感じ取った。しかし時既に遅し。レヴィーヤは詠唱を終え、魔法を解き放つ。

「——雨の如く降りそそぎ 蛮族どもを焼き払え【ヒュゼレイド・フアラーリカ】！」

直後、街を荒らす食人花の群れに無数の火矢が飛来した。次々に焼き尽くされていく食人花だったが、敵もそれで終わりではなかつた。

「……ち来た!?!」

炎に身を焦がしながら、人型の食人花が近付いて来る。その狙いはおそらく、その身

に火矢を放った張本人。つまり、レフイーヤだ。

「——キイイ——!!」

人型の叫びに呼応するかのように炎を纏う食人花達がレフイーヤへと襲い来る。

「させないって！ オリヤ——！」

それを二代目となったオルガを振るい塵へと変えていくティオナ。アルクもいざという時のためにレフイーヤの近くで構える。少しずつ燃え尽きていき、敵はその数を減らしていくが、人型の人型たるその先端はまだ生きている。

「ティオネ、ティオナ！ 奴を頼む！」

敵は逃げるつもりなのか、階層の中心にそびえ立つ中央樹を登ろうとしている。ヒリュテ姉妹はフィンの指示に従いそれを追う。彼女達が止めを刺せばこの場は収束する。誰もがそれを確信した時、予想外の事が起こった。

——ゴゴオツ！

「なっ!?!」

アルクの足元から炎により体を真っ黒に変えた食人花が飛び出したのだ。消滅する前に最後の力を振り絞り地中から攻撃を仕掛けたようだが、目測を誤りレフイーヤではなくアルクの方へと攻撃を仕掛けたらしい。

「アルクさんっ！」

「来るな！ 大丈夫だ！」

敵の勢いに負け、アルクはひたすら後方へと押されていく。それは街を抜け、森の中まで続いていった。森の中をしばらく進むと、今度こそ力尽きたのだろう。食人花は塵となつて消えた。

「随分押されて来ちまったな、まったたく。」

街と距離が離れてしまったが、状況を見たフィンがレフィーヤの元へと駆け付けるだろうからそちらについては問題ないだろう。人型についても中央樹でテイオナとテイオネが追っているのが見えるため、間もなく終わるはずだ。とりあえず自分の無事を知らせようとアルクが街へ向かおうとした時、背後に気配を感じた。

「これは少し、予定外だ。」

振り返るとそこにいたのは、深い暗赤色の外套を纏つた仮面の男だった。その男が誰なのかも何のためにここにいるのかも分からない。しかしアルクは、目の前の男にゾクリと悪寒を感じた。

「あんた、いったい誰だ？」

どうにか平静を取り戻し仮面の男に問うアルク。だがアルクには確信があつた。この男は間違いなく味方ではないと。

「教える意味はない。」

男は外套から腕を出し、それをアルクに向けて突き出した。

「来い。食人花。」
ヴィオラス

男が何を言っているのか、アルクには最初分からなかった。その場にいるのはアルクと男だけ。彼はいったい誰に向かって言っているのだろうか。その答えは、地響きとなつてアルクを襲つた。

「おいおい、ふざけんなよ……。」

2匹の食人花が、男に付き従う様にその両側に現れた。既に臨戦態勢となつている食人花は、今にもアルクに襲い掛かつて来そうだ。予想外の事態に驚くアルクだったがそこでリヴェリアの言葉を思い出した。

——「どこかに調教師がいるかもしれない、という事か？」

「まさか、お前がこいつ等に街を襲わせた調教師か？」

「教える意味はない。」

アルクの質問に先程と同じ答えを返す男。しかし彼は、まるでアルクの予想を裏付けるように、食人花に向け命令を下した。

「殺れ。」
や

待っていたとばかりに食人花は、アルクへと飛び掛かった。しかし先程と違い不意打ちでなければ対処の余地がある。アルクは真つ直ぐに向かつて来る敵の攻撃を横つ飛

びで避ける。直後にその身を翻し、食人花の体を斬ろうとしたアルクだったが、そこに2匹目が現れる。

「くそっ、また連撃かよ。」

ライカーファンク

大 虎と同じく数的優位を利用した攻撃。アルクは攻撃を断念し、2匹目の攻撃も同様に横つ飛びで避ける。なんとか躲す事に成功したが、おそらくアルクの処理能力ではこれ以上の連撃は避けられない。3撃目がない事に軽く安堵し、今度こそアルクは後続の食人花の体を斬りつけた。

「ちっ、ダメか。」

しかしギリギリの回避を終えた直後に全力で攻撃を出来るはずもなく、大剣は体を切断する事無く途中で止まってしまった。そのまま押し切りたいアルクだったが、次の一撃が迫っていたため大剣を引き抜き離脱する。2匹であれば、この繰り返しで倒せるかもしれない。

そもそもその前提が間違っていた。

2匹の攻撃を避けなんとか一撃入れようとしたその瞬間、アルクの目の前に影が出現する。それは食人花の調教師と思われる仮面の男だった。彼はアルクを食人花に任せ、

高みの見物をしている訳ではなかった。大剣を振りかぶりガラ空きになったアルクの腹に、男の蹴りが突き刺さる。

「——かはっ。」

その威力にアルクの体はメキリと音を立て吹き飛び、木々を数本薙ぎ倒した。骨どころか内臓までやられたのか、呼吸をするのも困難な状況にアルクは取り乱す。いつそ意識を手放した方が楽かもしれないという考えを振り払い、なんとか蹲りながらも敵の状況を確認するため視線を上げる。しかしそこには絶望しかなかった。2匹の食人花が既に待ち構えていたのだ。

今の体では回避は出来ない。大剣は蹴りを受けた衝撃で落としたため、せめてもの防衛すら出来はしない。ないよりマシだと思っていたマズポに関してはホルスターごとなくなっている。おそらく飛ばされた際に外れたのだろう。アルクに残されたのは、錬成用に用意した数本の空瓶が入った別のホルスターと、ポケットの魔石。これに賭けるしかない。

「礎となれ 【結合】」

アルクの魔力に反応したのか、食人花が臨戦態勢に入る。最早いつ飛び掛かって来てもおかしくはない。

「【錬金混成】！」

仮面の男は手をかざし、命令を下す。

「アナライズ解析」

「殺れ。」

猶予はない。一瞬で効果を把握し、即座にそれを飲み干し、その効果を最大限に生かした行動を取る。数分にも感じる一瞬の中で、アルクは錬成した薬の効果を確認した。

- ・ 昆虫型モンスターに触れた際にダメージ大
- ・ 昆虫モンスターの嫌う臭いを放つ
- ・ 服用時に毒効果付与

それはただの”殺虫剤”でしかなかった。もしそれが”除草剤”であったのなら、食人花へのダメージにつながったかもしれない。しかしそこに示された効果は紛れもなく”殺虫剤”。

(こんな時くらい当たってくれてもいいじゃねえか！ クソつたれ!!)
2匹の食人花を前に、アルクに対抗する術はない。

Recipe. 16 | 鍛冶師 + 折り返し

錬成は不発に終わり、いよいよ打つ手はなくなつた。苦し紛れでも構わないとアルクが錬成した薬を迫り来る食人花へ投げつけようとした瞬間、彼の前に人影が立ち塞がつた。

「ごめんアルク。遅くなつた!」

「なんとかまだ生きてるみたいね。団長に感謝しなさいよ。」

それは、テイオナとテイオネだつた。武器を振るい目前に迫る食人花を容易くに両断した2人は、食人花が塵となつた事で仮面の男の存在を確認した。

「あんた誰?」

「そいつは、多分…、テイマ調教師、だ…。」

テイオネの質問に答えたのはアルクだつた。呼吸が安定せずしゃべるのもつらいがそれは伝えなくてはならない。

「じゃあ、あいつが街を襲わせたつて事!? 許せない!」

テイオナはその事実^{ヴィオラス}に憤慨し、仮面の男へと斬りかかる。しかし——、
「食人花。」

男の呼び掛けに応えるように、再び食人花が現れる。1対1であれば倒す事は容易だが、数匹で守りに入られてしまったため、男へ簡単には近づけない。どうにか同時攻撃を以てその壁を打破しようとするヒリユテ姉妹だったが、そこで男はボソリと呟いた。

「宝玉の回収が必要か。レヴィスは何をしている…。」

すると男はアルク達に背を向け、森の奥へと消えて行く。

「もしかして逃げる気!?!」

「させない、っ! って、こいつ等邪魔!」

それを追い掛けようとする2人だったが、食人花が行く手を阻みその背を捕らえることが出来ない。テイオナが最後の食人花を片付けた時には、男は既に消え去っていた。

「ちっ、逃げられた。」

「いったい何だったんだろうね、あいつ。」

食人花の調教師であればその身を確保すべきだろうが、森の中へ逃げ込んだ以上深追いすれば相手の術中にはまり兼ねない。それに、苦戦しているというアイズの方も気になる。フィンの直観によりアルクの救援に来た2人だったが、アイズの元へ駆け付けたという思いはフィン達が救援に向かったとしても変わりはない。

「仕方ないわ。団長達と合流して報告しましょう。」

「分かった。という事だからアルクも…、ってアルク!?!」

迅速な状況判断によりフィン達との合流が決定し、その場を離れようとするヒリユテ姉妹だったが、そこでようやくテイオナが蹲るアルクに気が付いた。意識をギリギリの状態を保っている彼はもう声も出せずにその身をピクピクさせている。

「悪いわね、忘れてたわ。とりあえずこれ、飲みなさい。」

テイオナから渡されたそれを痛みに耐えながら飲み干すアルク。するとその効果はすぐに表れ始めた。体の痛みが引き、呼吸も楽になっていく。ポーシヨンとは思えないその回復速度と治癒力に、アルクは自分が飲んだものがハイ・ポーシヨンだろうと思いついた。

「悪いな。こんな高価なもの。」

「別にいいわよ。それに、あなたの身の安全は団長が保証したんだから、何かあつてもらっちゃ団長の顔に泥を塗る事になっちゃうでしょ！」

「そ、そうか。」

もう既に身の安全も何もない状況なんだが、と思ったアルクだったがフィンが関わった時のテイオナは下手に刺激しない方が良さだろうとそれ以上は何も言わなかった。ハイ・ポーシヨンによる回復でアルクがようやく立ち上がると、その場を離れていたテイオナがやって来た。

「もう食人花の気配も感じないね。あ、はいアルク。 剣と薬！」

「ありがとな、助かった。」

テイオナが回収した大剣とホルスターを身に着けアルクが準備を終えると、3人はアイズやフィン達のいる場所へと向かい始めた。

アルク達が到着した時には、アイズ達の戦いも既に終わっていた。ボロボロになったアイズに薬を渡すレフィーヤに、おそらく状況を整理しているであろうフィンとリヴェリア。その様子はどう見ても勝利を喜ぶといったものではない。

「やあ、無事で何より……という感じじゃないね。」

ハイ・ポーションで回復したと言つても戦闘の痕や消耗を全て治せはしない。アルクを見たフィンはその姿から彼の負傷を悟ったのだろう。

「すまないね。安全を保証すると言っておきながら君を危険な目に遭わせてしまった。」

「構いませんよ。こんな異常事態、イレギュラー想定しろって方が無茶なんですから。」

リヴィラの街を他の階層から餌を求めてやって来たモンスターが襲撃する事は珍しくない。現にリヴィラは今までに何度も崩壊と再建を繰り返して来た。しかし今回は状況が異なる。食人花という18階層では出会う事の無い強さのモンスターの群れに、その強化版とも言える人型モンスター、そしてさらには食人花を操っていると思われる

調教師まで現れた。レベル2でありながらその全てと対峙し生き残ったアルクは思いの外幸運なのかもしれない。

「ねえ、フィン。アイズの様子、おかしくない?」

「ああ、実は例の赤髪の女に負けてしまつてね。思つたよりもそれを引き摺つてるみたいなんだ。いつものアイズなら、一度負けた程度であんな風にはならないんだが……」

『劍姫』アイズ・ヴァレンシユタインと1対1で戦い、勝利を収める事が出来る者がいつたいこのオラリオにどれだけいるだろうか。少なくとも、それ程の実力者であるのなら、ロキ・ファミリアの古参であるフィンやリヴェリアが知らないはずはない。

「私もフィンも、彼女の事は知らない。様子がおかしいと思つてアイズに彼女を知っているのか聞いてみたが、知らないらしい。」

「人型のモンスター、だつたりして?」

「あの姿でモンスターだとしたら、洒落にならないね。仮に彼女が街を歩いていても、誰も彼女がモンスターだとは気づかないだろう。」

その姿は“人”であり、そして“冒険者”としての彼女を知る者はいない。赤髪の女の正体は依然として謎に包まれたままだ。そしてそれは、仮面の男についてもやはり同様。むしろ仮面と外套で姿を隠している分男の方が謎は多い。

「話では赤髪の女も食人花を操っていたらしい。彼女達が調教師というのは確定だろう。」

突如として姿を現した食人花。単純に新種のモンスターだと捉えていたが、そのモンスターにはそれを使役する調教師がいた。もしそのモンスターの発生にも調教師が関係しているのだとしたら、とある一つの問題が生まれる。

「食人花と調教師をセットと考えるなら、怪物祭で発生した食人花の調教師も近くにいたかもしれない、って事ですよね？」

「そうなるね。これは思ったより一大事かもしれない。」

—— 食人花の調教師は既に、オラリオに潜んでいるかもしれないのだから。

リヴィラでの事件から数日、アルク達は街の復興を手伝いつつ食人花と調教師について何か手掛かりが残っていないか調べていた。事件直後は体に残ったダメージから本調子とは言えなかったアルクも、今では傷も癒え調査に参加している。

「調べるつつつてもなあ。何が手掛かりになるのやら。」

「ははは…」

とは言っても、やる事はほとんど復興の手伝い。事件については状況整理くらいしか出来る事がなく、それをフィンとリヴェリアがやっているためアルク達に出番はない。殺人事件の捜査時と同様の愚痴をこぼすアルクにレフィーヤも苦笑気味だ。

そんな中で唯一収穫と言えるものがあつた。それは食人花からドロップしたと思われる魔石だ。通常の魔石は紫色をしているのだが、その魔石は極彩色に光っていた。その魔石を見た時に反応したのはティオネだった。曰く、以前ファミリアの遠征で現れた新種の芋虫型モンスターを倒した際に、同じ色の魔石がドロップしたらしい。

「芋虫型のモンスターも、食人花の同類かもしれないね。」

しかもその芋虫型モンスターについても大きな人型が現れたという。フィンの言う様に食人花と無関係とはとても思えない。ティオナの武器を溶かしたというモンスターだ。もしかしたら食人花以上に厄介な敵かもしれない。

「さて、次に行きましようか。…アイズさん？」

「え？ あ、…うん。 そうだね。」

レフィーヤの言葉に鈍い反応を返すアイズ。最近の彼女は何かを考えこんでいる事が多い。理由はやはり赤髪の女なのだろうが、それを彼女は語らない。本人に話す気がない以上はどうしようもないだろうと、アルクは特に詮索するつもりはない。

(それにしても、あの剣姫ですら敵わない、か。最近上ばかり見てる気がするなあ。

いい加減頭が痛くなってくるぜ。」

リヴィラでの一件でアルクが何をやっていたか。簡単に言ってしまうえば、調教師と思われる仮面の男に蹴飛ばされて悶絶してただけである。レベル2という事を加味してもあまりに不甲斐ない。不甲斐なさ過ぎる。

「リヴィラの方もだいぶ落ち着いて来た事だし、そろそろ出発しようと思う。」

それはその日の夕方にフィンから告げられた。元々換金のために立ち寄ったのであり、ここが目的地ではない。先に進むならば、あまりここで時間を食ってはられないのだ。しかしフィンの言葉に、アルクは思い悩んでいた。するとその時、

「なんだ、また随分と大物が揃つとるな。」

彼等に声を掛ける冒険者がいた。長い黒髪を一本に纏め、左目には眼帯をしている。褐色の肌で、背はアルクに並ぶ程高い。

「やあ、椿。 今日も試し斬りをしていたのかい？」

「おうさ。頼まれていたものがいくつか出来たからの。」

彼女の名は椿・コルブランド。鍛冶師系ファミリアの最高峰と言われるヘファイストス・ファミリアの団長であり、神を除けばオラリオで一番の鍛冶師である。となれば、オラリオ最強の一角であるロキ・ファミリアと親交があつても不思議ではない。

「おう、お前はいつかの…あー、…大剣使いではないか!」

名前こそ出なかったが、椿はパーティの中にアルクを見つけ、声を掛けた。最高級ブランドの武器や防具を扱うヘファイストス・ファミリアの彼女と零細ファミリアのアルクが顔見知りである理由は、アルクの背負う大剣にあった。

「今日も持つて来ておるようだな。にしても、やはり…。」

「預けませんからね?」

「分かつとる分かつとる。」

アルクがオラリオで大剣をメンテに出そうとした時に分かったのだが、実はその大剣は稀少鉱石アダマンタイトで出来ていたらしい。並の鍛冶師ではメンテが行えないという事でミアハと神交があるヘファイストス・ファミリアに向かったのだが、そこでアルクが背負う大剣に椿が目をつけたのだ。

——「お主、良い剣を持つておるの。」

見せて欲しいと言われ大剣を椿に渡したアルクだったが、彼女は大剣を調べるや否やアルクに大剣の改造を提案してきた。

——「鰐つばがないのも気になるが、柄つかも比率的にもつとっしつかりさせたい。」

確かにアルクの大剣は少し細い柄に大きな刀身がそのまま付いているという少し特

殊な形状ではあるが、既にその形が馴染んでいるし、何より形見であるその大剣を改造する気はない。改造を拒むアルクに、鍛冶師の魂に火が付いたのか譲らない椿。最後は彼女の主神である鍛冶神へファイストスが止めに入り、大剣は改造を免れた。

そんな事もあり、アルクが大剣のメンテにゴブニユ・ファミリアを使う様になったり、メンテ費用に目を回したりという後日談もあるが、それはまた別の話だ。

「何やら街が騒がしいようだが、何かあったのか？」

「実は——」

フィンと椿にリヴィラで起こった事件について話した。調教師についてはもちろん、食人花についても彼女には初耳となるだろう。

「例の武器を溶かすというモンスターと同類かもしれない、か。刃こぼれなら鍛冶師の腕にもよるところだが、溶かしてしまうのはどうにもならん。これは、例の物を早めに仕上げた方が良さそうだな。」

「ああ、頼むよ。」

フィン、というよりはロキ・ファミリアから椿へ何か依頼をしているのだろう。少し気になったアルクだったが、他のファミリアの詮索はあまりするものではないと忘れる事にした。

「そうと決まれば急がねばな。では、しつかり稼いで来るんだぞ。」

ヘファイストス・ファミリアに依頼をするのであれば、資金稼ぎが目的でもある今回の探索は椿にとつても無関係ではない。暗に「今後とも御鼻^{ごひいき}に」と告げる椿は手を振りながら地上へ向け出発する。

「ちよつと待つてください。俺も一緒に行つて良いですか?」

そんな彼女を呼び止めたのは、アルクだった。

「どうしたのアルク? これから一緒に進むんじゃないの?」

突然のアルクの言葉にその真意を尋ねるテイオナ。フィン達も同じ事を思ったのだろう。次のアルクの言葉を待っている。

「ここからは、俺にはまだ早そうだからな。こつからは力をつけてからにするわ。」

「別に敵については任せてくれて良いんだけどね。もしかして、食人花の件で信用を失つてしまったかな? 異常事態とはいえ、君を危険な目に遭わせたのは事実だ。」

「いえ、そんな事はないですよ。ただ、これ以上守られながら進むのを自分が許せな
いっただけです。」

「…そうか。」

このままフィン達は中層を抜けて下層、そして深層まで行くだろう。彼等に任せていればアルクは難なく上質な薬草を採取出来る。最初はそのつもりで同行したはずだっ

たのだが、リヴィラの事件を通して改めて実力差を思い知ったアルクは、それを情けないと感じてしまった。

（そうだよな。自分の力で来なきや、ダメなんだよな。）

そんなアルクにとつて、地上へと戻る樁との出会いは渡りに船。アルクの気持ちを理解したのかフィンはそれ以上は何も聞かず、アルクの我儘を受け入れた。

「それならこれを持って行ってくれ。魔石集めの代金だ。」

そう言つてフィンがアルクに渡したのは、袋に入つたお金だった。リヴィラで換金し、多少物資の補充をした残りがそこには入つていた。

「いや、それは……。はあ、……いただきます。ありがとうございます。」

固い意志を感じさせるフィンの真つ直ぐな視線に抵抗を止めたアルクはそれを受け取つた。

「その大剣の…、アルク、だったか？ その小僧が手前に付いて来るといふ事で良いのか？」

「はい、急ですみませんがよろしくお願ひします。」

「構わんさ。しかし、少し急ぐからの。しっかりと付いて来いよ！」

「はい！」

思わぬ事件に巻き込まれる事になったアルクは、先へ進むロキ・ファミリアの一行と

別れ、地上へと戻るのだった。

4章：『錬金術師、パーティを組む』

Recipe. 17 — 神の嫉妬 + 思わぬ再会

「なあ、セラさんって酒は飲まないのか？」

「何だ！急に。」

「いや、飲んでるところ見た事ないからさ。飲めないのかなって。」

「いや、酒は好きだよ。そりやもう浴びる程飲んだもんさ。ハツハツハ！」

「へえ。じゃあなんで飲まなくなつたんだ？ 村の皆と食べる時も、酒は断つてるだろ？」

「よく見てるねえ。でもま、理由は簡単さ。」

「そうなのか？」

「村守ってるアタシが酔っ払ってちや仕事になんないだろ？」

「…確かに。じゃあ俺が強くなつて、セラさんが酒を飲めるようにしないと！」

「ハツハツハ！ 言うじゃないか。弟子の成長もあつて酒が一層美味くなるつてもんだ！ そうと決まれば特訓行くぞ！ 酒がアタシを待っている！」

「今から!?! もう今日の特訓は終わっただろ!?!」

「何言つてんだい。酒を飲めるかもしれないのにのんびりしてられないよ！」
「だあー、クソっ！ 下手な事言うんじゃないよ！」

「……ん？ ーんは……。」

アルクが目覚めると、そこは本拠『青の薬舗』の店内であった。

明日の開店の準備をしていたという記憶はあるため、その途中で寝てしまったらしい。体を起こそうとするとパサリと何かが落ちた。

「起こしてくれてもいいんだけどな。」

それは毛布だった。ミアハはアルクが起きている間に掛けたため、おそらくナアアザが掛けたのだろう。彼女は何かとアルクには甘いところがあるのだ。すぐには起きさず、しばらく寝かせた上で起きないのであれば、改めて起こしに来るだろう。

「にしても、懐かしい夢だったな。」

アルクが夢で見たのは、過去の師との記憶。まだアルクが彼女に鍛えられ、そして守

られていた時の記憶だった。

「最近何かと無力なのを痛感したからなあ。初心に戻れ、って事なのかね？」

第一級冒険者に、まだ未熟ながらも才能溢れる冒険者。その出会いにより自分がまだ弱いのだと実感させられたアルク。そんな彼に夢を通じて師が発破を掛けに来たのかもしれない。

「……ないか。」

しかし夢で見た彼女から伝わったのは「酒が飲みたい」という願望のみ。墓に酒でも供えろという意味かもしれないと、アルクは考えを改めた。

「ただいまアルク。まだ店の準備の途中だったか。」

するとその時、出掛けていたミアハが帰って来た。

「おかえりなさいっす、ミアハ様。準備は終わってますよ。実はちよつと居眠りしちゃったみたいで、今起きたところなんです。」

「なるほど、それで毛布を持っているのか。それ程寒くはないが、体を壊さないようにな。」

「はい。…そういえば、どこへ行ってたんですか？」

「少しハスティアと飲みにな。」

答えるミアハにアルクはなるほどと思った。ミアハが入って来た瞬間に酒のような

匂いが店内へと吹き込んで来たが、理由はそれらしい。

「でも、珍しいですね。食事ならともかく、ヘステイア様と飲みに行く事って最近じゃほとんどなかったんじゃないですか？」

ミアハ・ファミアリアもそうだが、ヘステイア・ファミアリアも零細ファミアリアだ。その2つのファミアリアの主神が一緒に酒を飲む機会は滅多にない。

「何やらヘステイアが荒れていて、話を聞いて欲しいと誘われたのだ。もちろん割り勘だがな。　どうやら探索帰りのベルが知らない少女と食事に行くのを見掛けたらしい。それがどうにもヘステイアは気に入らなかつたらしくてな、「自分がいながら」、「あれは誰なんだ」と愚痴っていた。」

「それは。…大変でしたね。」

それはきつと嫉妬なのだろうとアルクは思い至つたが、ミアハはヘステイアの気持ちこそ理解したものの、その根本は分かつていないように見える。どちらかと言うのであれば、ミアハよりもナーザを誘った方がヘステイアは共感を得られたかもしれない。(にしても、ベルが探索の帰りに女性と食事、ねえ。)

かなり奥手だと思っていたが、実はそうでもないのかもしれない。あるいは女性の方からベルを誘い、彼がそれを断る事が出来なかつた、という線もある。というかそちらの方が納得だ。次に会った時に聞いてみるかと思ひ、アルクは毛布を抱え、ミアハに続

いて本拠の奥へと入っていくのだった。

数日後。アルクはいつもの様に薬草採取も兼ねてダンジョンへと潜っていた。今日も今日とてモンスターを狩りポーションを錬成したアルク。使う当てのあるものを数本ホルスターへと収め、地上へと戻っている時だった。

「あれ？ アルクさん？」

「ん？ なんだ、ベルもダンジョンにいたのか。お疲れさん。」

アルクは同じくダンジョン探索中のベルと出会った。以前は共にダンジョンへ向かったため、ダンジョン内で会うのはこれが初となるだろう。

「お、防具を新調したのか。」

「はい、アドバイザーのエイナさんにその方が良いと勧められて。」

ベルの装備は以前とは大きく変わっていた。メインの武器となるヘスティア・ナイフについては怪物祭での戦いについて話した際に聞いている。それに加えて防具についても、布地が多く防御面に不安のあった防具から、金属部の多いライトアーマーへと変わっている。

「ベル様、魔石の回収終わりまし…、た!？」

アルクがベルと話していると、ベルの後ろから一人の少女が現れた。大きなバックパックを背負っており、彼女がサポーターである事が窺える。少女はアルクに気が付くと、何故か目をギョツとさせ、あからさまに動揺した。

「あ、リリ。この人はミアハ・ファミリアの…、つて、リリ? どうしたの?」
「ん? リリ?」

大きなバックパックを背負ったサポーターで、「リリ」と呼ばれるその少女に見覚えがあるアルクは、フードを深く被り顔を隠そうとする彼女を眺め、ようやく気が付いた。
「なんだ、アーデじゃないか。久しぶりだな。」

「あ、あはは。お久しぶりですね…、サルマン様。」

気付かれた以上意味はないと抵抗を止めた少女。そう、彼女はアルクが一度日雇いサポーターとしてパーティを組んだ、リルルカ・アーデだった。

「え? アルクさん、リリを知ってるんですか?」

「ああ、1日だけだが、サポーターとして雇ったんだ。その後もし見掛けたら誘ってみようかと思ってたんだが、いなくてな。まさかベルと契約してるとは思わなかったわ。」

「そうだったんですか。」

1日ではあったがサポーターであるリリルカとの探索が好調だったため、機会があればまた組めないかと思つたアルクだったが、それ以降リリルカと出会う事はなかった。

「今はベルと正式に契約してるんなら、前の冒険者とは契約を切つたんだな。まあ俺が言うのも変だが、ベルの事をよろしく頼むな。」

「は、はい。荷物持ち程度しか出来ませんが、ベル様にご迷惑がかからないよう精一杯頑張ります。」

「そりゃ卑下し過ぎだろ。援護射撃の腕も確かだし、小人族バルウムなのにデカイバックパックで重い荷物運んでくれたじゃねえか。」

リリルカとの探索を思い出し、その有能ぶりを語るアルクであつたが、そこでベルがアルクの話の中に違和感を感じた。

「……小人族バルウム?」

「どうした、ベル?」

「あの、リリは小人族バルウムじゃなくて、犬シアンスロープ人ですよ。ね、リリ?」

「つ!? はい! リリはシ、犬シアンスロープ人ですよ!? リリは小柄ですし、サルマン様と探索した際はフードを被っていましたので、か、勘違いされたのでは?」

そう言うとりりルカは被っていたフードを取った。そこには確かに犬シアンスロープの特徴である犬耳が付いている。

「マジか。 …あー、確かに見た目で小人族だと判断してた、…かもしれないな。 悪い。」

「いえ、良く間違われますから。 気になさらないでください。」

ファミリアでその日の探索の事を話す時も、アルクはパーティを組んだのが”小人族の少女”だと言ってしまった。 先入観で判断した事を反省するアルクだった。

「ベル様とサルマン様はお知り合いのようですが、パーティは組まれていないのですか？」

「あ、うん。 実はアルクさんから誘ってもらってはいるんだけど、僕が未熟な内は足手纏いになっちゃうから、10階層に到達出来たらって事になってるんだ。」

アルクは別に足手纏いとは言っていないし思ってもいないのだが、ベルの中ではそういう事になっているらしい。 それで励めるのであれば、とアルクは訂正しなかった。

「では、それまではベル様はソロで探索をする、という事ですか？」

「リリがサポーターをしてくれるから、2人で、だけどね。」

「え？ あ、…そ、そうですね。」

ベルが微笑みそう告げると、リリルカは少し動揺したようにそれに返した。 アルクはその光景に、どこか見覚えがある。

(ミアハ様も、こんな感じに女性に微笑みかけてたような気が…)。

リリルカの動揺に疑問符を浮かべるベル。その自覚の無さもミアハと重なる。となれば自然とアルクが陰ながら応援する姉ナアーザに重なるのは——

（大変だと思いますが、頑張つて下さい。ヘステイア様。）

既にベルの思い人も知っているアルクとしては誰をどう応援したものか悩みどころではあるが、先日ヘステイアが嫉妬の余りヤケ酒をしたと聞いたばかり。今はとりあえず、彼女の思いが少しでもベルに伝わる事を祈るアルクなのだった。

（というか、ベルと一緒に食事をしてた少女って……）

自分の方を見るアルクに不思議そうな顔をするリリルカを前に、アルクは女神の心労を憂う事しか出来なかつた。

「それじゃ、またな。ベル、アーデ。」

「はい、お疲れ様です。アルクさん。」

地上へ戻るアルクに対し、ベル達はまだ探索を続けるらしい。あまり時間を取る訳にはいかないと、アルクは話もそこそこに2人と別れる事にした。

「あのっ——。」

別れを告げ背を向けたアルクだったが、それをリリルカが呼び止める。

「ん？ どうした、アーデ？」

「あの、サルマン様も、私の事は“リリ”で構いません。もうあの時みたいに下手に気を遣う必要も、ありませんから。」

あの時というのはもちろんアルクとパーティを組んだ時だろう。彼女は印象を良くするために一人称を“私”としたりしていたが、最後の最後で素が出てしまいそれは崩れてしまった。もうアルクにその手の遠慮は不要なのである。

「分かった。じゃあ俺も“アルク”でいい。そっちの方が呼ばれ慣れてるしな。」

「分かりました。引き留めてしまつてすみません。ではまた、アルク様。」

「様、ねえ。まあいいか。またな、リリ。」

呼び方は変わつても様付けまでは変わらないらしい。それは彼女なりのサポーターとしてのこだわりなのかもしれない。多少むず痒くはあつたが、アルクはそれを受け入れ、今度こそ“リリ”達と別れたのだった。

(10階層に到達したら…)

そこはソーマ・ファミリアの本拠。団員であるリリは、ベルとの探索を終え帰つて来ていた。彼女が思い出すのはベルとアルクの会話。ベルが10階層に到達した際には

アルクとパーティを組むというものだった。

（ベル様は思ったよりずつと早くダンジョンを攻略しています。リリもあまりのんびりはしてられませんね。）

彼女がベルと契約を組んだのには理由がある。それは、ベルが持つヘスティア・ナイフを奪う事だった。刀身に神聖文字ヒエログリフが刻まれており、彼女が主神に与えられたというその武器はきつと多額の金に化けるだろう。そうすれば、自分がソーマ・ファミリアから脱退するために必要となる金額に届くかもしれない。

（早く、こんな生活から…。）

リリは生まれた時からソーマ・ファミリアにいた。それは彼女の両親がソーマの眷属だったからという簡単な理由だ。そのため彼女も幼い頃にソーマの眷属となった。しかし、ソーマ・ファミリアは彼女にとって地獄だった。

主神ソーマの造る神酒に魅了された団員達は、その酒欲しさに他人を蹴落とし、金を求めた。リリの両親も例外ではなく神酒のためにダンジョンでの金稼ぎへと赴いたが、実力に見合わぬ無理な探索によりあっさりと命を落としてしまった。

そんなファミリアの状況の中、成長したりリも遂に神酒を口にしてしまう。彼女もやはり酒を求め、金稼ぎに躍起になるのだが、彼女は蹴落とされる側であった。団員には稼ぎを奪われ、サポーターとして同行した冒険者には雀の涙ほどの報酬しかもらえな

かった。

しかし報償である神酒とは縁遠かった事で、彼女を魅了した神酒の効果は薄れていた。目の覚めた彼女はファミリアの現状を理解し、脱退しようとした。しかしソーマ・ファミリアの脱退には金が必要だった。結局彼女は同じように、虐げられ、蹴落とされながら金を稼ぐしかなかった。

(もうちよつと、もうちよつとで……！)

辛く苦しい生活から抜け出せる日は近い。そう考えるとリリの頬が自然と緩んだ。

「なんだ、妙に機嫌が良いじゃねえか、アーデ。」

すると、他の団員がリリが上機嫌である事を見抜き、彼女を呼び止める。

「——っ！ 何か、ご用ですか？」

「いや、随分と機嫌が良さそうだからよお。何か良いもん持つてんじゃねえか、つて

な。」

リリの懐にはその日の稼ぎが入っている、しかも、リリがサポーターであるにも関わらずベルがその稼ぎの半分を配分としたため、サポーターの日当としては多額の金だ。

「いえ、リリは役立たずですから、たいしたもの——」

「それにしちゃ機嫌が良過ぎじゃねえか？ ちよつと見せてくれよ、な？」

リリは確信した。彼が自分の稼ぎを奪おうとしているのだと。そして悟った。自分

にそれに逆らうだけの力がない事を。その時、

「おおい！ 何そんなところで突っ立ってんだこらあ！」

「ジ、ジンカ!? どうしてこんなところに。」

「団員のオレが本拠にいて、何かおかしいか？」

「い、いや、おかしくねえよ。そ、そうだ、用事を思い出した。じゃあな！」

言うが早いか、リリから稼ぎを奪おうとしていた団員はその場から去っていった。残されたのはリリと、ジンカと呼ばれたドワーフの男のみ。

「なんだ、お前も何か文句あんのか？」

「いえ、何もありません。カルボン様。」

彼の名はジンカ・カルボン。ソーマ・ファミリアの団員であり、レベル3。ファミリアの中ではおそらく最も強いと思われる彼だが、彼は団長でも、副団長でもない。それは偏に、ひとえ彼がファミリア内で余りに異質であるからだろう。

「チツ、まあいい。それより酒だ。次のはきつといい出来だぜ。ヘッヘッへ。」

そしてジンカはその場を去って行った。残されたりりは、ただ茫然とその後ろ姿を見ているだけだった。

Recipe. 18 | 九魔姫 + 執着

ある日の夜、アルクは店仕舞いという事で看板を下ろしに外へ出ていた。時間はもう夜更け。こんな時間まで店を開けていたのかというところではない。単なる看板の下ろし忘れである。

「これでよしと。 さて、そろそろ寝るかな……ん？」

アルクが作業を終え本拠の中へと入ろうとした時、視界の端を何かが通り過ぎたように見えた。無意識にそれを目で追っていると、暗闇ではつきりとはしませんがそれは人影だった。

「あれは……。 いや、まさかなあ……。」

以前にも同じようなものを見た気がする。気のせいかもしれないが、その時に見た彼と妙にシルエットが一致してしまう。

「ま、何もなければ戻ればいいか。」

少し迷ったアルクだったが、結局その人影を追ってみる事にした。中で作業をしていたナーザに簡単に説明し、念のためにと大剣やポーシヨンのホルスターを装備して本拠を出る。人影を見てから多少時間は経過してしまっただが、アルクは既に人影の行き先

に当てがある。そこで影の主に会えなければ本拠に戻り、後日アルクが影の主と予想する彼に聞いてみれば良いだけだ。

(さて、今日はいったいどうしたんだ? …ベル。)

以前と似たような状況だったからという根拠となり得ない理由ではあるが、それでもアルクにはその人影がベルだろうという確信があった。いつかと同じように、アルクは夜のダンジョンへと向かうのだった。

「マジでいたな…。」

ダンジョンに潜ってしまったからでは見つけるのは困難かと思われたが、そんな事はなかった。探していた相手がダンジョン内で声を上げながら進んでいたため、その場所
は簡単に特定出来たのだ。では、何故彼はずっと声を上げていたのか。もちろん悲鳴ではない。いつかの繰り返し返しの様に彼がミノタウロスに襲われているという事はない。
では、何故?

「【ファイア・ボルト】！」

直後、彼の手から放たれる光弾。そう、魔法だ。彼——ベルはダンジョンの中を魔

法を撃ちながら進んでいたのだ。

「ベルのやつ、魔法なんて使えたのか？ それに…。」

「【ファイア・ボルト】！ 【ファイア・ボルト】!!」

「あれって、詠唱してないよな。 そんなレアな魔法があるのに使ってなかったってのか？」

もし魔法が発現していたのだとすれば、アルクと初めに会った時にダンジョンで使わなかったのは何故なのか。今の彼の状況を見るに出し惜しみをしていたとは思えない。そもそもアルクにも気づかず一心不乱に魔法を撃ちまくっているベルの様子がその理由と一致しない。

「まさか、ランクアップしたのか？」

とすれば考えられるのはランクアップにより発現した可能性だ。ベルの成長はアルクはもちろん彼の主神ミアハも認める程に早い。大^{シルバーバック}猿を倒した彼なら既にレベル2になっているというのもあり得るかもしれない。ベルの魔法についていろいろと考えていたアルクだったが、そこでいつの間にかベルがいない事に気が付いた。

「声がしない？ ……って、ヤバイ！」

先程と同じようにベルの声を探すが、どこからも聞こえて来ない。その原因について考えたアルクは、最悪の状況を思い浮かべてしまった。それは、^{マインド・ダウン}「精神疲弊」だ。魔法

を使い過ぎる事で行使に必要な精神力マインドが尽きてしまう状態で、そうなると思険者は意識を保つ事が出来ない。

「ベル！ どこだ、ベル！」

ベルはアルクが見つける前からずっと、魔法を使い続けていた。あの調子で精神力マインドを消費していたのであれば、早々に精神疲弊マインド・ダウンとなつていても不思議ではない。ベルは一人。つまり、気絶してしまえばモンスターモンスターの為すが儘なのである。

「おいつ、どこだベル！ どこに——…おつ？」

「あつ——」

ベルを探してダンジョンを進むアルクだったが、そこで見知った顔を見つけた。

「アルク。 こんにちは？ は？」

「あ、ああ、こんにちは。 …アイズ。」

それは、アイズだった。滅多に出会う事がないとはいえ、ダンジョンで彼女と出会つて驚くアルクではない。彼が気を取られたのは、今のアイズの状態にあつた。彼女は何故そうなつたのか、ベルに膝枕をしているのである。本来ならばベルの無事を喜ぶべきなのだろうが、思い人の膝枕で眠るベルを見ると、心配していたのが馬鹿らしくなってくる。

「なんで、ベルに膝枕を？」

「えっと、リヴェリアが、こうすると良いだろうって。」
「……………」

アルクは無言でその場にいたもう一人の人物であるリヴェリアに視線を移す。彼女はそれを避けるように視線を横に逸らした。ハイエルフという事もあり高貴なイメー
ジのリヴェリアであつたが、悪戯神ワザシの眷属という事もあり案外遊び心もあるのかもしれない。

「そうだな、ベルもきつと喜ぶだろ。 任せていいか？」

「喜ぶ……？ うん、分かつた。」

とりあえず乗つかつておくアルク。アイズも嫌々やっている訳ではないようなので、特に問題はないだろう。

「アルクは、この子と知り合いなの？」

「ん？ ああ、神同士の付き合いもあつてな。 一応いずれパーティーを組もうかつて話
もしてたりする。」

「？ 今は、パーティーじゃないの？」

「まだ違うな。 今は夜にダンジョンに向かうベルが気になつて追いかけて来たつてと
こだ。 先に運良くアイズ達に見つけてもらったらしいが、追つて来たのは正解だつた
な。」

ベルを探していたと思われるアルクの様子からアイズは2人がパーティを組んでいるのだと思ったようだ。まだアルク達はパーティではない。しかしそれも遠くない未来に実現するだろうとアルクは思っていた。

「ならば、彼には重々注意するように言っておいた方が良いでしょう。もしアイズが彼に気が付かなければ、間違いなくモンスターの餌食となっていただろう。」

「ええ、ちゃんとやっておきます。」

先程とは異なり真剣な顔で告げるリヴェリアにアルクは頷いた。もし仮に彼女の言葉がなかったとしてもアルクはベルに精神疲弊の危険について話すつもりだった。

「では、私は先に帰っているぞ、アイズ。」

「うん。」

たとえ膝枕をした状態であろうとここは上層。レベル5の彼女がモンスターに後れを取る等あり得ない。そのためリヴェリアは空気を読んでか否か、その場を立ち去った。とすればアルクが取るべき行動も自ずと決まってくるものだ。

「じゃあ、ベルが大丈夫だって分かったし、俺も帰るわ。今日の事について注意するのはまた明日って事で。」

「うん。じゃあ、また。」

「ああ、またな、アイズ。」

アルクもまた空気を読みその場を立ち去る。目覚めた時にベルがどんな顔をするだろうかと考えるが、アイズについて話すベルを思い出し、アルクは少し刺激が強すぎるかもしれないと苦笑してしまうのだった。

そんなダンジョンの帰り道。必然的にアルクはリヴェリアと共に地上へと向かう形になる。以前アルクがロキ・ファミリアの探索に同行させてもらった際もそうであったが、この2人の間にこれといった会話は無い。テイオナやレフィーヤがいればそのきつかけ程度は見つけられたのかもしれないが、残念ながら今は無いのだ。しかも、何故だか分からないが、リヴェリアはアルクを時折ジツと見ている事がある。そのためアルクはどうにも落ち着かない。

「今日は2人で探索に行つてたんですか？」

沈黙に耐えられず、アルクが当たり障りのない話題を振る。ただし、回答がイエスカノーとなる質問は話題を広げる初手としては少し良くなかったかもしれない。元より第一級冒険者の探索についてアルクが話題を広げられる余地はあまりないのではあるが。

「いや、私達は君も同行していた探索の続きから帰つて来たところだ。」

「マジですか…。結構長い事潜ってたんですね。」

アルクが別れてから、既に1週間以上は経っているだろう。深層への探索ともなれば片道でも数日かかると言われているが、思ったよりも本格的に探索していたらしい。しかし、それならそれで気になる事がある。

「フィンさん達はどうしたんですか?」

「ああ、フィン達なら深層で別れ先に戻ってもらったよ。食料もあまり余裕はなかったからな。アイズの我儘に付き合う事になったのは私だけだ。」

「…我儘?」

「—つと。少し話し過ぎてしまったか。」

少し考えた様子のリヴェリアであったが、序盤とは言え探索に同行していた事もあつてかその後の探索について簡単にではあるがアルクに話した。

発端はやはり18階層での事件。食人花を操る謎の女との一騎打ちに敗れ、フィンとリヴェリアに助けられたアイズは落ち込んでいた。強さを求めてレベル5まで辿り着いた。しかし彼女はまだまだ弱かった。フィン達との鍛錬とは違う本気の殺し合いにおいて、アイズは敗北したのだ。

探索を終え帰還しようとする準備を始めたフィン達に、自分は残ると告げるアイズ。リヴェリアは彼女の気持ちを察して彼女と共に残る事にした。テイオナ達も残りたいた

願い出るが、食料等の物資の問題もあり残るのはアイズとリヴェリアの2人となった。

そしてリヴェリア曰く”我儘”でダンジョンに残ったアイズが向かったのは37階層。そこには階層主と呼ばれる存在、ウダイオスがいた。ギルドが定めたその強さはレベル6。そんな化け物を相手に、アイズは1人で戦いを挑んだ。その一騎打ちに水を差さない程度のリヴェリアの援護はあったものの、赤髪の女に勝ちたいという思いを胸に満身創痍となりながらアイズは階層主に勝利した。

「もしかしたら、アイズは今回の偉業によりランクアップするかもしれないな。」

「偉業……」

深層の階層主を1人で撃破する。それはまさしく偉業と言えるだろう。ランクアップに必要なのはそれに見合うステータスだけではない。冒険者が”冒険”を経て成し遂げた偉業。それをも満たす事で冒険者は次のステージへと進む事が出来るのだ。

「階層主のソロ討伐なんて、まだ三級の俺には想像もつかない話ですね。」

「……。」

アルクの言葉に、リヴェリアの切れ長の目はほんの少しだが険しさを増した。それまでの視線とは明らかに異なる凝視とも言える視線にアルクもその視線を合わせる。

「あまり、他人の詮索は好きではないのだがな。もし答えたくなければそれで構わな

い。 ……アルク・サルマン、君の”魔力”はいつたいどのくらいだ？」

「——っ」

リヴェリアの質問にアルクは明確な動揺を見せた。リヴェリアの彼を見透かすような視線は、まさにその言葉の通り、アルクの何かを見透かしていたらしい。一度気持ちをおろち着かせ、アルクは問いに対する答えを探す。答えたくないと言えば彼女はおそらくそれ以上は何も聞かないだろう。しかし、リヴェリアは間違いなく確信を持ってアルクに質問してる。

(流石、オラリオ屈指の魔術師、つてどこか…)。

何気ない質問や当てずっぽうであつたのなら、アルクはきつとそれっぽく適切な答えで煙に巻いたであろう。だがそれが”質問”ではなく”確認”でしかないのなら、隠しても仕方がない。そもそも後ろめたい事ではないのである。

「魔力なら、少し前に”S”になりましたね。」

「やはりそうか。」

アルクの答えに、リヴェリアは納得という様子だった。魔力に長けた彼女はアルクの魔力が高い事に気付いていたのだ。

「いつ気付いたか、は聞くまでもないですね。最初からでしょ?」

「ああ、ダンジョンの入り口で君を見た時に大きな魔力を感じた。二級以上であれば気にすることはなかっただろうが、三級とあつては少し気になってしまつてな。」

さらつと言っているが、そのような事に気付くのはリヴェリアくらいのものである。単に魔力が大きいか小さいかではなく「レベル2にしては大きい」とまで言われてしまえばアルクとしてはお見事としか言い様がない。

「気になってた事は、解消しましたか？」

「……。」

次はアルクがリヴェリアへと質問を投げかける。しかし、彼女は肯定しない。

「……」からは只のお節介だ。 先程も言ったが答えたくなければそれで構わない。 ∴

君は、何故ランクアップしないんだ？」

アルクは驚かなかった。魔力が“S”に到達している事からアルクが既にランクアップ可能であると思ひ至るのは決して不思議ではない。

「どうしてそんな事を気にするんですか？」

答えのないまま質問で繋ぐ妙なやり取り。それはまるで、互いの腹を探るかのよう。とはいえ探られているのはアルクのみであり、彼には拒否権も存在する。これはただ、アルクが明かすか明かさないかでしかないのだ。そのためアルクは、明かすに足るかどうかを判断すべく答えを待つ。

「リヴェリアで食人花と戦う君を見て、少し似ていると思つてな。 強さを求めて一人だけただひたすらにモンスターを狩り続けていた、あの頃のアイズに。」

「アイズに……」

今も強さを求めている事は変わらない。それは今回の階層主討伐の件で明らかである。しかし、以前のアイズは今にも増して強くなる事に執着していた。リヴェリアは食人花と対峙するアルクの様子に、その時のアイズに似た力への執着を見たのだ。

「しかし君は違った。力を求めてはいるが、先へと進もうという意志があまり感じられなかった。つい最近、以前の様に強さを求めるアイズを見たからだろうな。アイズとは似て非なる君の様子が妙に気になってしまったんだ。もし踏み込み過ぎたのであれば謝ろう。」

強くなりたいのに、強くなろうとしない。そんなアルクの歪さがリヴェリアは気になっていた。

「別にそこまで踏み入った話じゃないですよ。ただ、魔力だけじゃなくて”力”も上げておきたいってだけなんです。しっかり蓄えてランクアップしないと、後々悔いが残りそうなんです。」

条件を満たす事でランクアップは可能だが、それですぐにランクアップをするかどうかは冒険者による。それは、ランクアップ前のステータスがランクアップ後に見えないステータスとして引き継がれるからである。ステータスの平均が500の冒険者と800の冒険者では、同じレベルに上がったとしても後者の方が強くなる。ちなみにス

テータスは100ごとにIからAのアビリティとして分かれており、例外として990から999についてはアビリティSとなっている。

「それで”力”推しでの戦いをしていたという訳か。確かに多くはないが、ステータスを可能な限り上げたうえでランクアップをする冒険者もいる。」

強さに差が出ると言ってもランクアップによる上昇に比べると些細なもの。そのため多くの冒険者は強さを求めるのであればランクアップをすぐに行う。

「急がば回れ、じゃないですけど、強くなりたいからこそ手は抜きたくないですよ。」
「そうか。ならばそれで納得しておく事にしよう。」

リヴェリアの言葉に、アルクはなんとか動揺を抑えた。これ以上は語る気はない。彼女が”上つ面の理由”で納得してくれると言うなら、それで終わりにすべきだろう。アルクはやはり話すべきではなかったかと少し後悔した。

(ま、そもそもまだランクアップ出来ないんだけどな。)

ステータス上はランクアップが可能なアルク。では、彼に足りないものは……？

Recipe. 19 — 魔導書 + 思惑の交差

アルクがベルを追ってダンジョンへと向かった次の日。ベルが無事に本拠に戻ったかの確認ついでに、いや、アイズの膝枕の感想を聞きに行くついでに無事の確認をしようとするアルクはヘステイア・ファミリアの本拠へと来ていた。

そこで待っていたのは頭を抱え蹲うずくまるベルと、何故か笑顔のまま動かないヘステイア。いったいどうしたというのだろうか。とりあえず昨夜の件もあるためベルに話しかける事にしたアルク。

「おはようさん、ベル。昨日はちゃんと帰れ——」

「あ、あ——！ お、おはようございます、アルクさん！」

ベルの食い気味な挨拶に驚くアルク。何でも昨夜はこっそりと本拠を抜け出してダンジョンへと向かったため、ヘステイアには知られたくないらしい。こそこそと話す二人とは離れた場所で、ヘステイアは未だ上の空だ。

「何だつてまた夜にダンジョンなんかに行つたんだ？」

「えつと実は…、発現した魔法を試してみたくて…。」

そういえばとアルクは思い出した。ダンジョンでベルを見つけた時、彼はむやみやた

らに魔法を撃ちまくっていたのではないか。ベルの話から察するに、彼は魔法を使用していなかったのではなくここ最近、というより昨日の時点で魔法を発現したという事だろう。

「魔法が発現したって事は、もしかしてランクアップしたのか？」

「いえ、違います。 僕が魔法を発現したのはこの——」

「ぬあーつとうわー！ー！！」

ベルが何かをアルクに見せようとしたその時、離れた場所にいたはずのヘステイアが謎の叫び声と共に間に割り込み、ベルの持つていた何かを奪い去った。ゆつくりとアルクの方を向き何かを隠したままヘステイアは告げる。

「アルク君、君は何も見なかった。 いいね？」

いいねと言われても、アルクにはバツチリとその何かが見えてしまった。それは大きな本のもようであった。ベルに発現した魔法と謎の本。そのヒントによりアルクは一つの答えを導き出した。

「それって、魔法導書ですか？」

「違う！ 違うよ!? そんな高価な本がこんなところにある訳がないだろ!？」

魔法導書は読んだ者に魔法を発現させる稀少魔法道具。その価値は数千万ヴァリスとも言われており、使えばたちまちその魔法導書は白紙の本となってしまう。零細ファミリアの

主神であるヘステイアが言う事も最もかもしれないが、明らかに動揺を隠せていない。ここに魔導書がある理由は分からないが、それがベルに魔法を発現させたと見て間違いないだろう。

「で、何で魔導書がここに？」

「ボクの話は無視かいっ!？」

神であるヘステイアの抗議を聞き流し、ベルに事の経緯を聞くアルクだった。

「アホな客もいたもんだな。」

話を聞くと、どうやらベルの元に魔導書が渡ったのは偶然の事らしい。探索が休みであつたため暇を持て余して『豊穡の女主人』を訪れたベルに、客の忘れ物だった本をシルが渡したらしく、ベルはそれが魔導書と知らずに読んでしまったのだとか。おそらくシルもそれが魔導書とは知らなかったのだろう。客の忘れ物を勝手に渡すのはどうかと思うが、そんな高価な魔道具を酒場に忘れていく客も客だ。同情の余地はない。

「ぼ、僕、どうすれば…。 弁償するお金なんて…。」

「元々そんなもん忘れてった客が悪いんだ。あとはなるようになるだろ。」

現在アルクとベルは何一つ記されていない元魔導書を手に『豊穡の女主人』へと向かっている。当然ながら本の返却と事情説明のためだ。事実を闇に葬ろうとするヘスティアの抵抗はあつたが、そこは真面目なベル・クラネル。主神をなんとか説得してみせた。

「それより昨日の夜の話だろ。お前危うくモンスターにやられてたかもしれないんだぞ?」

「ぐつ。その…つい、魔法が発現したのが嬉しくて…。」

「そのせいで死んじまったら元も子もないっての。魔法を覚えたからには精神疲弊マインドダウンの恐ろしさもしっかり覚えておくことだな。」

「はい…。」

ヘスティアもいないという事で、アルクは昨夜の件について話し出した。魔導書の話聞いた後なので、ベルがダンジョンに向かった理由も見当が付いていた。しかし、如何に嬉しかろうとベルがやった事は命に関わる。リヴェリアにも言われたが、魔法を使用するにあたっての精神力マインドの扱いについてはアルクがしっかりと教えておいた方が良いだらう。

「で、どうだった?」

「どうって、魔法ですか? それはもう——」

「違う違う。 膝枕だよ、ひ・ぎ・ま・く・ら。」

「え?」

アルクの質問にいったい何の事かと思つたベルだったが、”膝枕”という単語をキーワードに、昨夜の出来事が少しずつ脳裏によみがえる。次第に赤くなつていくベルの顔に、アルクはようやく思い出したかとニヤつく。

「で、どうだったんだ? アイズと何か話したのか?」

「——— いました。」

「ん? 何だつて?」

「恥ずかしくつて、逃げちゃいました。」

「……先は長そうだな。」

初心なだけかと思つていたが、思いの外ベルはヘタレなのかもしれない。恋路どころかスタートラインに立つ事も満足に出来ないベルに、アルクは苦笑するしかない。

「そういえば、アルクさんは知り合いなんですか? その、アイズ・ヴァレンシユタインさんと。」

「まあ、ちよつと縁があつてな。 その話は追々するさ。」

アルクがアイズを呼び捨てにしている事に気が付いたベル。その経緯を話そうか考へたアルクだったが、目的地に辿り着いたためそこで話は終わりとなつた。

到着した『豊穰の女主人』はまだ開店前。事情が事情なため特に気する様子もなくアルクは何かブツブツと呟いているベルを伴い店内へと入って行く。

「なんだい、まだ開店には、…って、なんだアルクじゃないか。」

「おはようございます、ミアさん。 ちよつと用事があつたんで入らせてもらいました。」

「用事？ 珍しいねえ。 ティアなら夕方にならないと顔出さないよ。」

「ああ、用事があるのは俺じゃないんす。 こつちの彼が。」

そう言つてベルを指すアルク。 ミアもベルの事は知つているらしく「ああ、あんたかい」とベルの方へと顔を向けた。

「あら？ ベルさんと、…アルクさん？」

そしてそこに今回の事件の重要参考人であるシルが現れた。都合良く役者が揃つたといったところだろうか。…肝心の魔導書の持ち主はいないのだが。多少オドオドした様子ではあつたがなんとか魔導書についての説明をするベル。ミアは黙つてその話を聞き、シルに関しては「あらまあ」といった顔をしている。彼女も共犯なのではなかつただらうか。

「…それで、この本の弁償は…。」

話を終え、さらに怯えたようにベルが尋ねる。目を瞑り少し考えたミアは、まるで判決を待つ被告人状態の彼にジャツジを下した。

「使っちゃったもんはしょうがないさ。忘れな。」

そしてベルから渡された白紙の本をゴミ箱へと投げ入れる。彼女の性格を良く知るシルや同じ結論に至っていたアルクは特に驚く事もない。ただ一人、ベルだけが状況を呑み込めていない。

「え？ いや、でもそれは——」

「何か文句があるのかい？」

「いえ、…ないです。」

自らの主神を諭す事は出来ても酒場の女主人には何も言えないベル・クラネルだった。

「じゃあ、ベルはこれから探索か。」

「はい。アルクさんは今日はどうするんですか？」

「俺は仕事だな。午後から配達に出る予定だ。」

『豊穰の女主人』を出た2人はその日の予定について話していた。ベルについては前日が休みだったという事もあり今日は探索に向かうらしい。アルクは薬屋の仕事だ。いずれパーティーを組もうとは思ったが、思ったより予定が合わない事も多いかもしれない。そんな2人の前に、1人の男が姿を現した。

「なあ、お前。そう、白髪のお前だ。最近ちっこいサポーターと一緒にいるよな？」
「ちっこいサポーター」という言葉に話しかけられたベルはもちろん、アルクも反応した。2人がそこで思い浮かべる人物はおそらく同じであろう。

「リ、…彼女が何か？」

青い髪を一本に結ったその男を警戒し、ベルは彼女の名前を伏せた。男の目的はまだ分からないが、おそらくそれが彼女——リリにとって良くない事であろうというのが男のニヤけ顔から窺^{うかが}える。

「あのサポーター、どうやらかなり貯め込んでるらしくてな。どうだ、俺と一緒にあいつをハメてやらねえか？ 分け前は俺とお前で半々で構わねえ。」

どうやら男の話にアルクは無関係らしい。自分が持ち掛けられた話でない以上は特に口出しするつもりはないアルクだが、それにしても胸糞悪い提案である。

「そんな話に乗る気はありません。もしあなたが彼女に何かするつもりなら…。」

ベルもやはり同じ気持ちだったらしく、男に対して敵意を表す。しかし男の方はまさ

か話を断られるとは思っていなかったらしく、分かりやすく機嫌を悪くし舌打ちした。「チツ。なら勝手にしろ。あいつの本性に気付いて泣く事になっても俺は知らねえぞ。」

話は終わりだとばかりに男はベルに肩をぶつけて去っていく。その際に蚊帳の外であつたアルクを一瞥したが、ベルと同類だろうと判断したのかそれだけだった。

「あの人、いったい何なんでしょう?」

「さあな。でもリリについて俺達よりも知ってるっぽい。同じファミリアか、もしかしたらリリが以前契約した事のある冒険者とかじゃねえか?」

アルクの記憶にある限り、リリは決して貯えのあるような素振りを見せていない。装備についても使い古された様子であり、裕福か貧困かを問うのであれば間違いなく後者になるだろう。

「お待たせしました、ベル様。」

その時、2人の背後からリリがやって来た。今まさに話題にしていた本人の登場に目に見えてベルが驚く。この少年はどうしてこういうも慌てているのだろうか。

「や、やあ、リリ。今日もよろしくね。」

「こちらこそよろしくお願ひします。今日はアルク様も御一緒なのですか? お話では10階層に到達してからという事でしたが。」

「いや、俺は仕事があるからここでお別れだ。パーティについては近い内に実現しそうだから、その時は改めてよろしく頼むわ。」

「(近い内に…) はい、こちらこそ。」

アルクの話に一瞬何か考えるような素振りを見せたりりだったが、パーティの件に反対という訳でもないようで、笑顔で返した。それじゃあまたな、とアルクは2人に別れを告げ、本拠へと歩き始める。

—— 「あいつの本性に気付いて泣く事になっても俺は知らねえぞ。」
「りりの本性、ねえ。」

青髪の男の言う事を真に受ける訳ではないが、アルクはどうにも彼の言った事が気になっていった。それに彼の企みが、ベルに断られたからといって終わると思えない。今、りりの傍にはベルがいる。常人以上の成長を見せるベルが男に後れを取るとは思えない。

「どうしたもんかね。」

何を疑い、何を信じるか。考えれば考える程全てを疑ってしまう自分が嫌になり、アルクは大きくため息をついた。

—— 「あんたがそうしたいならそれで良いさ。何もしなかつた事を後悔するより全然良い。まあ、やって背負うのはあんただけだね、ハッハッハ！」

「俺はどうしたいんだろうな、セラさん。」

「ベル様。」

「ん？ 何、リリ？」

アルクと別れダンジョンへと向かう道すがら。リリはベルに質問を投げかけた。

「先程アルク様とは別の方と話をされていたようですが、何を話されていたんですか？」

「——っ。」

その質問は、間違いなく不意打ちであった。男の話はもちろん、会っていたところも見られずに済んだと安心していたため、言葉に詰まり、冷や汗が流れる。

「特に何も。 ちよ、ちよっとした世間話だよ！」

男と話していたところを見たと言うリリに、果たしてその様子が世間話をしているように見えたかどうかは分からない。しかしリリは「そうですか」とそれ以上の詮索はしなかった。彼女がどうやら納得してくれたとベルはホッと胸を撫で下ろす。

（あの人と言っていた事も気になるけど、今リリは僕の仲間なんだ。もしリリが危険な目に遭いそうだったら、僕が何とかしないと！）

そして、ベルの後方を着いて行くリリ。彼女もまた先程のやり取りを思い返していた。

(アルク様とパーティーを組まれた後ではやり難いですし、既にリリの事も知られてしまっているでしょうね。となれば、この辺が潮時かもしれません。)

やはり彼女にはベルと青髪の男の会話は世間話には見えなかつたらしい。そしてその男は、リリが少し前まで契約していた冒険者であった。彼とベルが旧知の仲であつたとは考えられない。そして、2人の共通点と言えぱリリが契約した冒険者だという事。かつてリリがサポーターを務めたその男はリリの手癖の悪さを知っている。それを根に持つ彼が、次の契約相手であるベルにそれを教えていたとしても何の不思議もない。(ベル様との契約も、もう終わりですね。)

バれてしまつては仕方がない。今の契約相手がダメなら次の契約相手を探せば良いだけ。そうやって何度も契約相手を変え稼ぎを増やして来たリリ。ただ、今回は少しだけいつもと違う気がした。

(なんで、リリは……。)

彼女の真の目的を知れば、ベルは軽蔑するだろう。彼女がやって来た事を知れば、きつと憤慨するだろう。そう考えた時、何故かリリは痛くもない胸の辺りをギュツと握り締める。

(変なの…。)

その理由を、彼女はまだ知らない。

Recipe. 20 — 報い + 救い

魔導書グリモアの一件がとりあえず片付いた日の翌日。アルクはダンジョン探索へと向かっていた。配達を前日に終わらせたため、今日は薬草採取をする予定だ。アルクが街を歩いていると、同じ方向へと向かうベルに出会った。

「よ、今日はお互いダンジョンか。どうせなら一緒に行くか?」

「おはようございます。そうですね、ダンジョンに入る前にリリと予定を確認するつもりなので、入口まで一緒に。」

並んで街を歩き始める2人。すると自然と話題は昨日の青髪の男の事となる。

「なあ、ベルは昨日の男の話、どう思う?」

「リリの本性、ですか?」

ベルもやはりその件が気になつていたらしい。計画を断られたために適当な事を言つてベル達にリリに対する不信感を抱かせようとしたとも考えられるが、残念ながらそれを完全に否定出来るほどアルクとリリの付き合いは長くはない。

「僕は、リリが困っているなら助けたいです。悩みがあるなら、相談に乗ってあげたいです。だって僕とリリは、パーティですから。」

「…そうか。」

「それに似てるんです。神様に会う前の、一人ぼっちだった頃の僕に。だから…。」

しかしベルは既に答えを出していたらしい。彼の真つ直ぐな意見に、アルクも自然と頬が緩む。

「ベルがそうしたいならそれで良い。何もせず後悔するより全然マシさ。」

「はいっ。」

どこかで聞いた台詞をベルに伝えるアルク。選択した道の先で後悔する事になって、きつとベルならそれを糧に進んで行けるような、そんな気さえしてくる。

「ベルはヒーロー気質なのかもしれないな。」

「え?」

「いや、なんでもない。」

ダンジョンの近くでは、リリが既に待つていた。予定を確認する2人と違いソコ探索となるアルクはその場で別れ、ダンジョンへと潜っていく。

途中でふと振り返り、アルクはベルと話しているリリを見据える。

1回とは言え彼女とはパーティを組んだため、多少の人となりは理解していると思う。それでもどこか拭えない懐疑心に、アルクは自分とベルの気質の違いを感じた。

「こんなもんかな。」

手早く薬草の採取を終えたアルクは、少し早い時間ではあるがダンジョンから帰還しようとしていた。採取した薬草の処理や選別もあるので早めに切り上げる事自体は決して悪い事ではない。もし早めに切り上げた帰りでベル達とばったり会ったとしてもただの偶然、そう、偶然なのだ。

「昨日の今日で気にし過ぎかね。」

しかしアルクは知らなかった。その日、リリがベルに10階層への進出を提案していた事を。そして、その予想を超えた進出ペースによりアルクとベル達は出会う事なくすれ違った事を。

ダンジョン8階層。ベル達は既にいないその階層で、アルクはのんびりと周辺を気にしながら歩いていて。9階層と同じくベル達がいる様子はないと判断したため7階層へと上がろうとしたところで、アルクは気になるものを見つけた。

「なんだ、あの大荷物。」

それは、大きな袋を背負った男だった。魔石等のアイテムを入れるための袋を所持している事は特に不思議ではないが、男が持つ袋はやけに大きい。しかも男の周辺にパーティと思われる冒険者がいないのだ。ソロでの探索に大きな袋は邪魔にしなければならない。ソロにおいてはある意味ベテランとも言えるアルクがそう思うのだから間違いない。「準備は出来たか？ そろそろ行くぞ。」

しかしどうやらソロという訳ではなかったらしい。別の男がやって来て大きな袋を背負う男に合流した。ただ、何故か合流した男も同じように大きな袋を背負っている。いったいどれだけ魔石を稼ぐ気であるのかと呆れるアルクだったが、その時男の持つ袋がモゾツと動いた。

(おいおいまさか誘拐じゃないだろうな。何なんだあいつらは。)

只ならぬ雰囲気を感じ、男達から見えぬよう身を隠すアルク。2人の男が持つ袋は、よく見ればどちらもモゾモゾと動いているように見える。

(まさか、"異端児"^{ゼノス}じゃねえよな…。)

袋の中身は分からないが、違法性については高いとみていいだろう。どこかへ向かう2人の後を追う事にしたアルク。

「へへっ、驚くだろうぜ。アーデのやつ。」

「——っ!」

どうやらこの件は、アルクにとって予想以上に無視出来ないようだ。

付かず離れず。男達の後を着けるアルクだったが、バレない距離を保っていた事もあり2人を見失ってしまった。上層の広さはそれほどないと言つても入り組んだ道がアルクの行く手を阻む。

「どつちに行きやがったんだ？ クソツ。」

『ギャア——!!』

「今のは！ こつちか!？」

突然聞えて来た叫び声に、アルクは行く方向を定める。リリの悲鳴には聞こえない野太い悲鳴だが、手掛かりがない以上「何かが起こった」と思われる場所へと向かう以外にない。アルクが駆け付けると、そこには大量のキラアントに襲われる男の姿があった。

(こいつは…。)

アルクはその男に見覚えがあつた。襲われていたのは、昨日ベルにリリを陥れる計画を持ち掛けた青髪の男だったのだ。その時に見せたニヤけ面とは打って変わって、男は

絶望を張り付けたような表情をしている。

「しゃあねえな。」

アルクとしては昨日の事もありこのまま見捨てるというのも考えたが、相手が誰であつても見殺しというのは後味が悪い。それにアルクの主神であるミアハは医神。ここで見捨てては神に合わせる顔がないというものだ。アルクは背負つた大剣を振り回し、男に群がるキラアントを蹴散らした。

「大丈夫か？」

「た、助かつたぜ。 って、お前は!？」

男もアルクを覚えていたらしい。恐怖から安堵した表情に変わったかと思えば今度は驚愕の表情。見事な顔芸と言わざるを得ない。

「お、お前も俺を、ハ、ハメるつもりか!？」

「お前、も?？」

それをしようとしていたのは彼の方ではなかったか。状況が呑み込めず困惑する。

「クソツ、あのサポーターをハメるのに手を貸すつーから雇つてやったのに、結局俺も蟻共に始末させるつもりだったんじゃねえか! ふざけんじゃねえ!」

求めてもないのにべらべらと事情を説明する青髪の男。アルクとしては助かるのだが、状況的にあまり悠長にはいられない。

「勘違いしてゐるらしいが俺はそいつらとは関係ない。それといいのか？ 話してる間にまたキラアアントが集まって来たぞ？」

「チツ。関係ないなら丁度良い、この蟻共を片付けてくれ。無事に抜け出せたら礼もする！ 悪い話じゃねえだろ!？」

「残念だが俺はこの先に用があつてな。その代わりこいつをやるよ。防虫効果のある薬だ。これを体に掛けとけばしばらくキラアアントは寄つて来ねえさ。」

アルクが取り出したのは、以前食人花との戦闘中に錬成した薬だった。当時は絶望させられた効果であつたが、今この場では何とも頼もしい薬だ。

「分かつた。それをくれ。早く！」

迫るキラアアントを前に男が急かす。アルクは出し惜しみする事無くその薬を男に渡した。男は薬を受け取るや否や、それを開け、頭から被る。するとどうだろうか、今まで押し寄せようとしていたキラアアントの動きが止まった。

「おお！ こいつはすげえ！ 今の内に逃げ…、うっ、なんだ？ この臭いは。」

安堵したと思いきや今度は謎の悪臭にしかめつ面。本当に顔芸が面白い。

「おいつ、なんだこの薬!？ なんでこんなに臭えんだ!？」

「そういう薬なんですね。それよりいいのか？ 早く行かないと、効き目が切れるぜ？」
アルクに悪態をついていた男だったが、その言葉に焦りを露にし、ようやくその場か

ら逃げ出していった。キラアアントの大群が悪臭を振り撒き逃げる男に道を開ける様子は何とも異様だった。

「異臭騒ぎになるんじゃないか、あれ。　：と、俺も早く行かねえと。」

キラアアントの大群という異常事態から考えて、既にその先で何かが起こっていると考えていいだろう。襲い来る蟻達を大剣で薙ぎ払いながらアルクはダンジョンを駆け抜ける。

「囿になってくれよ。　なあ、アード？」

獣人と思われる恰幅の良い男はリリに無情な提案を投げ掛けた。リリは身包みを剥がされた様子でいつも背負っているバックパックもない。

「そんな、約束が違——」

「約束つーのは持つてるもん寄こせば助けるってあれか？　そんなの本気で信じてたのか？　騙し取るなんてお前が良くやって来た事じゃねえか。　今日だって冒険者を騙してこいつを手に入れたんだろう？」

そう言つて獣人の男が手にしたのは柄から刀身にかけて黒色をしたナイフ。それは、リリが契約している白髪の冒険者が愛用している武器だった。

「それはっ。」

「じゃあな、アーデ。」

リリの言葉に耳も貸さず、獣人の男は仲間の2人と共にその場を去ろうとする。そこにはキラアアントの大群が集まって来ていた。しかし何故か蟻達はその敵意を男達ではなくリリへと向ける。それは、リリの近くに転がった大きな袋が原因だった。

キラアアントというモンスターには、厄介な特性がある。それは、自身に危機が迫った時、特殊な信号を出し仲間を呼ぶというものだ。しかもその体は甲殻に覆われているため、上手く関節等を狙わなければなかなか倒しきれない。その結果、瀕死のキラアアントに気を取られ、いつの間にか大群に囲まれているという事もある。そういった面から、キラアアントは“新米殺し”とも呼ばれている。

大きな袋の中身、それは正しく瀕死のキラアアントであった。しかもその数は3つ。多くの蟻達が3匹の信号に呼ばれ、リリの元へと集まろうとしている。

「いつまでもここにいちや俺達もやべえ。行くぞ。」

先程もリリを罠に嵌めるために彼等が利用した青髪の冒険者がキラアアントに驚き慌てて脱出を試みた。しかし彼は運悪く迫り来るキラアアントの群れに真正面から突っ込んでしまったらしい。その断末魔とも言える悲鳴を獣人の男達は聞いている。彼とは違いキラアアントについても計画済だった男達はリリから奪い取った荷物を手に、予め決めておいたルートを進み逃げ出した。

「なんだ、こりやどういふ状況だ？」

その直後、男達が逃げて行つた方向とは別の場所から大剣を手にしたアルクが現れた。アルクはその場を見渡し、リリの存在を確認した。

「リリ、大丈夫か？ それに、ベルは？」

「ア、アルク…様…。　ベル様は…ベル…様は…。」

アルクはリリの様子がおかしい事に気が付いた。明らかに彼女は怯えているのだ。もしその原因がキラーアントであつたのなら、アルクが来た事で多少なりとも安堵したはずだろう。しかし状況はむしろその逆。彼女はアルクに対して、何かに怯えている。

「ベルを、どうしたんだ？」

「——っ！」

アルクの言葉に大きく動揺を見せるリリ。鎌を掛けるつもりも含めての質問だったが、どうやら残念ながらアルクの推測は正しかったらしい。男達がリリを罠に嵌めたように、おそらくリリもベルを罠に嵌めたのだろう。リリが一体何を狙っていたのか、駆け出しでありそれ程高価なものを持つていなかったはずのベルの所持品でその可能性があるのは——

「狙いはあのナイフか。つまり今、ベルはまともな武器も無い状態って訳だな。」
「あ……あ……あ……。」

次々に明らかにされていく自らの罪に、リリは涙を浮かべ震え出す。その最中にも自分の元へと迫るキラアントを、アルクは大剣で薙ぎ払う。

「——んで、」

「ん？」

「なんでリリはこんな風になってしまったんですか。こんなに惨めで、情けなくて、……弱い。」

「分からん。」

キラアントはアルクの届かぬところからもリリへと迫る。しかしアルクはそれを阻止する事をしようとはしない。

「これは、当然の報いですね……。 あんなに、……あんなに優しく接してくれたベル様を裏切ったリリへの、……報い。」

「そうかもな。」

アルクはリリの言葉に淡々と返す。それを聞いているかは定かでないが、リリは諦めたように微笑んだ。

「もう、終わりなんですわね。 やっと、……やっと終われる。」

（本当に終わりか？　こんなんで終わっていいのか？　——なあ、ベル。）

彼は言っていた。彼女を助けたいと。確かに彼女は彼を騙していたかもしれない。しかし、その可能性を考えて尚、彼はそう言ったのだ。

「本当に、……終わって——」

その時、自分に微笑みかける白髪で紅い眼をした少年がリリの脳裏を過る。諦めたはずの心が再び高鳴り始める。微笑みは消え、彼女は大粒の涙を落とした。

（ここで助けるのは俺じゃねえだろ？　早く来い。　来いよ、ベル・クラネル！）

「終わってしまったんですか!？」

「【ファイア・ボルト】！」

次の瞬間、リリに押し寄せる蟻の群れが塵と化した。声のした方を確認する事もなくアルクは手にしていた発火薬の瓶をホルスターに収める。

「ほんと、ヒヤヒヤさせてくれるわ。」

その場に駆け付けリリの窮地を救ったベルは、急いで彼女の元へと向かう。リリは驚きに目を丸くし、呆けたままだ。

「リリ、大丈夫!? ケガはない!」

「…どうして?」

「どうして?」

「なんでリリを助けたんですか? リリはベル様を騙していたんですよ! ベル様の大切なナイフを盗んで、ベル様を10階層に置き去りにして! …なのになんで!」

「え、えーつと…。」

本来ならば、ベルがリリを糾弾する場面だろう。しかし何故かベルがリリに問い詰められてしどろもどろとなっている。完全に逆である。

「リリを、放っておけなかったから、かな?」

「おかしいです! 今日だけじゃありません。魔石をちよろまかした事だつて一度や二度ではありません。配分だつてベル様の経験が浅いのをいい事に、ベル様とリリで5:5ではなく4:6、いえ、2:8にした時だつてあります!」

(結構やつてんな、おい。)

「他の団員からの仕打ちの腹いせに、期限切れの食料を渡したり、モンスターもいないのに敢えてベル様のストレスのところを射つた事もあります!」

「…あ。」

（やり過ぎじゃね？　ってか心当たりあるのか、ベル？）

「それでもベル様はリリを助けるって言うんですか!？」

「うん——「なんで!」え、…つと、女の子、だから?」

「それじゃあ女の人なら誰でも助けるって言うんですか!？」　ベル様の馬鹿!　人でなし

!　女の敵!　ヘタレ、白髪頭、すけこまし!!」

（なんか違うの混ざってないか?)

堰を切った様に本音をぶちまけるリリ。ぶちまけ過ぎて少々必要のない暴露や罵倒も飛び出している気もするが、女性だから助けるといふベルの返答がどうだろうかというのはアルクも概ね同意である。

「じゃあ、”リリだから”だよ。　リリを助けたいと思っただんだ。　…理由なんて、分からないよ。　僕がそうしたいと思っただけなんだ。」

ベルの言葉にリリは大声で泣き、ベルの胸の中で何度も謝罪の言葉を繰り返した。どうしたら良いか分からないベルはアルクに助けを求めるが、残念ながらアルクは今も尚群がっているキラアアントの一掃に忙しい。というか助けて欲しいのはどちらかと言えばアルクの方なのだ。

結局リリが落ち着いたのは、アルクがキラアアントを片付けた後だった。

Recipe. 21 — 奪還 + 結成

キラアアントの群れを一掃したアルク達は、そのままダンジョン内にいる訳にもいかず、地上へと出て来た。ベルが許すとは言つたものの、リリの表情はずっと暗いままだ。こればかりは彼女自身の問題なので、口を出す事も出来ない。

「いったいリリは、どう償えば…。」

「償いなんて、僕はリリが無事ならそれで——」

「でも！ リリはベル様の大切な、神様から頂いたというナイフを盗んだ上に、それを奪われてしまったんですよ!?! せめてナイフだけでもリリが返してもらいに——」

「それはダメだよ。リリが危ない目に遭うのは、絶対に。」

リリを危険にさらすのを嫌うベルに「でも」と反論しようとしたリリだったが、そのベルの真剣なまなざしに仄かに顔を赤くし、黙り込んでしまう。

「ナイフに関しては明日考えようぜ。既に日も暮れて来てるんだ。奪つた奴も今日中にどうこうするとは思えないしな。」

「そう、ですね。」

アルクの意見に同意するベル。しかしナイフの事がやはり気がかりなのだろう、その

言葉には僅かに躊躇いが込められていた。

「それじゃ、俺は早く薬草も持って帰りたいからこの辺で。」

「はい、今日はありがとうございました！」

「あのっ！」

「ん？」

アルクがベルの礼に軽く手を上げ応え、去ろうとすると、リリがアルクを呼び止めた。

「リリも、その、…ありがとう、ございまして。」

「お礼を言われてもな。俺はむしろリリを見殺しにしようとしてたんだぞ？ 感謝される筋合いはないと思うが？」

自分が到着するまでの経緯をあまり知らないベルは「そうだったんですか!？」と驚いているが、リリはアルクの言葉に首を横に振った。

「いいえ、あれはリリにとって、当然の報いでした。それに、もしベル様が来なかったとしても、アルク様はリリを助けたのではないですか？」

「なんでそう思う？」

「分かりません。ただ、アルク様とベル様は、なんとなく似てる気がしたんです。」

ベルとの探索の中で、リリは何度かアルクとの探索を思い出していた。サポーターを自らと対等に扱う変な冒険者。そういう意味で、2人は似ていたのだ。

「俺はベル程お人好しじゃないぞ?」

「そうかもしれないね。」

そう言つてリリはほんの少しだけ微笑んだ。それに満足したアルクは、今度こそ自分のファミリアの本拠へと帰っていくのだった。

「へへつ、今日は儲かったな。」

「ほんとだぜ! 久々にいい酒飲ませてもらったわ。」

街灯が光を灯す夜のオラリオ。そこには3人の男が歩いていて、どうやら酒を飲んだらしく男達の顔は赤らみ上機嫌の様子。するとその中の恰幅の良い獣人の男が、懐から何かを取り出した。

「金に魔剣まで手に入ったってのに、こんな上物の武器まで手に入るとはなあ。」

男が取り出したナイフの刀身に街灯の光を当てればそこに見えるのは“Hφαλσ
TOS”の文字。つまりそのナイフはオラリオ最高級ブランドのヘファイストス・ファ

ミリア製の武器なのだ。小振りなナイフである事を考えたとしても数百万ヴァリスは下らないだろうと男は考えていた。

「アーデの奴、どうなったでしょうねー？」

「バカ、あれだけのキラアアントに襲われたんだ。死んでるに決まってんだろ！」

「アーデにしても、あの冒険者にしても、馬鹿は使い易くて助かるぜ。」

「じゃあアーデに騙された冒険者はもつと馬鹿つてか!？」

その言葉に「ちげえねえ」と大笑いする男達。酒による酔いも相まって、彼等のテンションはどんどん上がっていく。

『いったい何がそんなに楽しいんだ?』

「そりゃあおめえ、……え?」

急に聞こえて来た問いかけ。獣人の男がそれに答えようとしたが、声のした方向には誰もいない。右を見ても左を見ても、そこにいるのは男達3人だけだ。

「おい、どうしたんだー?」

「今、声がしなかったか?」

「なんだ、酒の飲み過ぎで幻聴でも聞こえたんじゃねえのか!？」

獣人の男以外の2人にはその声は聞こえていなかったらしい。獣人の男もきつと気のせいだったのだろうと忘れようとした。しかし、それは出来なかった。

『無視は良くないぜ？ そんなに楽しそうなんだ。理由を教えてくださいても良いだろ？』

「「——?!」」

今度は確かに3人全員がその声を聞いた。慌てて周囲を見回すが、やはり3人以外の人影は見当たらない。酒気に火照った赤ら顔は、次第に青ざめ始める。

「誰だ！ ふざけてねえで出てきやがれ！」

『出て来てるぜ？ 俺からはお前等がよく見えてる。』

恐怖をこまかす様に強気に叫ぶが、近くから返って来た言葉に再び背筋を凍らせる。薄暗いと言つてもそこは道の真ん中。近くに来たのであればその姿が街灯に照らされるはずである。しかし3対の目は、どれも未だに声の主を捉えてはいない。

「な、何だつてんだ?! 俺達に何の用だ！」

語気を強めてはいるが、既に恐怖を隠しきれてはいない。3人の男は互いに背中合わせとなつて周りを警戒する。

『ああ、お前の持つてるナイフに見覚えがあつてなあ。それはお前のか?』

「あ、ああ、俺のナイフだ。いつたいそれがどうした！」

『いやあ違つたか。それは悪いな。実はそれに似たナイフを何者かに盗まれたつて聞いてな。お前達は何か知らないか?』

「知つ……てる。知つてるぞ！　ちつこいサポーターのガキが同じようなナイフを持ってやがった！　アイツだ、アイツが盗んだにちげえねえ！」

露骨に思い付いたという顔で証言する男。人というのは追い詰められた時、無関係を装うよりも他の誰かに罪を擦り付ける事を優先してしまうのだろうか。他の2人も良く言つたという様子でその言葉に同意するが、それは完全な悪手である事を、男達は知る。

『それはもしかして、お前達が殺した“リルルカ・アーデ”の事かな？』

男達は、心臓をガシリと掴まれたように錯覚した。血の気は完全に失せ、蒼白となつていく。

「な……なんで……」

『どうして知つていのかつて？　——隠し通せるとでも、思つていたのか？』

軽い調子で話していた声が、急に低く重いものになる。恐怖に耐えられなくなったのか、男の1人が逃げようとする。しかし、

——トスツ　「ひっ!？」

男が進もうとした方向に、1本の矢が刺さつた。

『話の途中だ。逃げんじゃねえよ。』

それは紛れもない警告だつた。自分はお前達がやった事を知っている。白状するま

では決して逃がさない。声の主は男達にそう言っているのだ。

「こ、これだ！　これだよ、すまねえ！　これがそのナイフだ！　悪かった、すまねえ！　返す、返すから勘弁してくれ。　勘弁してくれよお!？」

恐怖に振り切れてしまったのか、獣人の男はナイフを両手で差し出し許しを請う。他の2人も助けてくれ、許してくれと体を震わせる。声の主はあまりに呆気ない男達の懺悔にため息を吐きつつ獣人の男の手からナイフを取った。

「き、消えた!？」

声の主同様に不可視となったナイフに驚く男達に、声の主は告げた。

『もう用は済んだ。　じゃあな。』

「か、金はいいいのか!?　い、いいんだよな!？」

恐怖から解放された反動だろう、獣人の男は再び自らの醜い欲を曝け出す。しかし声の主はもう男達に興味はない。初めから「友人の大切なナイフ」以外はどうでも良いのだ。

『好きにすれば良いさ。　俺の目的はこいつだけだ。』

「じゃ、じゃあ——」

『でもまあ、あまり目に余るような事はしないで欲しいね。俺がいつどこでお前達を見ているか、…分からないからな。』

すると、声のした方からスツと現れる黒衣。その姿に、男達は再度恐怖のどん底に叩き落される。何故なら、その黒衣から覗くのは顔ではなく、真つ白な髑髏だったのだから。

「「ギャー——!!」」

男達は叫びながら一目散に逃げて行く。彼等が去った後も、その叫びは夜の街にずっと響き渡っていたのだった。

「…で? 何やってんだよ、フェルズ。」

「いや、面白そうだったんでついね。まさかこの姿が役に立つ時が来るとは思わなかったよ。」

声の主、ではなくアルクがその姿を現す。そして、突如アドリブで参加してきた黒衣の男にある物を渡した。

「この兜は役に立ったかい?」

「ああ、おかげであっさり事が進んだよ。ありがとな。」

いやいやと白骨の手を振るフェルズと呼ばれた男。彼はアルクがオラリオに来て間もなく出来た友人である。その白骨の体は決して作り物ではない。どうにも彼はかつ

て”賢者”と呼ばれていたらしく、不死の力を得たのだとか。しかし不死の力は魂を留める事しか出来ず、その身は朽ちて骨だけとなってしまったらしい。自分を”愚者”^{フェルズ}と名乗る彼はあまり昔の話をしようとしなない。アルクとしても難しい話は困るので、”賢者の教え”を請おうとは思わない。フェルズもそんな距離感を気に入っていた。

「にしても、凄いいアイテムだな。ハデスヘルム、だっけか？」

「ハデスヘッドだよ。姿が見えなくなるというのはこの姿の私にとつてはとても嬉しい効果だ。私の作ったマントと違い、これなら嵩張らないしね。製作者の”稀代のアイテムメイカー”には本当に感謝しているよ。」

アルクがフェルズに渡したのは小型の兜だった。もちろんただの兜という訳ではない。それは、被ると姿が透明になるという稀少魔道具^{レアアイテム}なのだ。元々はフェルズが姿を隠すために常用していたのだが、ヘステイア・ナイフを取り返す算段をしていたアルクの元をたまたまフェルズが訪れたため、彼に頼み、一時的に借りていた。

「どうやらここまでみたいだね。じゃあまた。困った事があつたらまた言ってくれ。」

「ああ、こつちも俺なんかで手伝える事があつたら遠慮なく言ってくれ。」
 そう言つてフェルズはハデスヘッドを被り姿を消した。

「アルク、ナイフは無事取り返せた？」

「この通りだよ。悪いな姉さん、こんな事を手伝わせて。」

「構わない。弟のお願いに応えるのも、姉の務めだから。」

フェルズと入れ替わりでやって来たのはナアーザだった。彼女には男達が逃げ出さないように屋根の家から矢での牽制をお願いしていたのだ。

「アルクの姿が見えないから、アルクを射つてしまわないか心配だった。確か、知り合いから透明になれるアイテムを一時的に借りてるって話だったけど、そのアイテムは？」

「あー、それなら姉さんが来てる間にその知り合いがやって来てな。もう返しちまつた。」

「そうなの？ 挨拶くらいしたかった。」

「まあ、その内機会もあるかもな。」

ナアーザが来る前にフェルズが去った事からも分かるように、2人に面識はない。フェルズは立場上秘密裏に動く事が多いため、必要以上に人脈を増やそうとはしない。それに加えてアルクがフェルズとの関係を語るにあたり決して口外出来ない秘密が関わってくるため、アルクとフェルズの関係も極一部の者しか知らないのだ。

「じゃ、帰りますか。」

「うん、ミアハ様も待ってる。」

彼女に秘密を語れない事を後ろめたく感じながら、アルクはナーザと共に本拠へと帰って行くのだった。

次の日、アルクはヘスティア・ナイフを手にベルの元を訪れていた。

「ここ、これ、どこで見つけたんですか!? リリは奪われたって!」

「もしかしたらと思つてギルドに行つてみたら、落とし物として届けられてな。どうやら奪つた奴等が途中で落としていったらしい。」

愛刀との思わぬ再会に興奮するベルに、息をするように嘘をつくアルク。本当の事と言うといろいろと面倒なのでそれっぽいな理由でごまかしたが、ベルはそれを何の疑いもなく受け入れた。彼の純粋さは美徳ではあるのだが、今回の件もあつて少々不安要素でもある。多少なりとも世間の黒い部分を知つてもらふべきかもしれない。その時はあ
る意味その道のプロとも言えるリリにも助力を願おうかとアルクは考えていた。

「ベル。いろいろあったが、昨日はついに10階層に足を踏み入れたんだよな？」

「…はい。 まだまだ僕の方じゃ厳しい事を実感しました。 でも、辿り着きました。 アルクさんの言っていた、10階層に。」

それは、アルクの予想より遥かに早く訪れた。 かつて自らの弱さに涙し強さを求めた冒険者が今、大きく成長し、アルクの目の前に立っている。

「改めて聞きたい。 俺と、パーティを組んでくれないか？」

「はい！ 僕で良ければ、よろしくお願いします！」

力一杯お辞儀をするベルにやれやれと苦笑するアルク。 パーティを組んでもこれではむず痒くて仕方がない。

「アルクでいい。 敬語もいらねえよ。 仲間なんだから、もつと気楽にいきましょう？」

「はいっ、じゃなかった。 …分かった。 これからよろしく、”アルク”。」

どうにもすぐには敬語が抜けきらないベルだが、今はそれでも十分だろう。 それより今は、まだやるべき事が残っているのだ。

「それじゃあまず、”もう1人のメンバー”を誘いに行きますかね。」

「…あ。 そうだね、行こう！」

彼等の誘いに、彼女は一体どのような顔をするだろうか。

そんな事を考えながら、アルクは待ちきれないといった様子で駆けて行くベルを追う

のだった。

そしてその日オラリオで、人知れず小さな3人のパーティーが結成された。

5章：『錬金術師、小さき英雄を見る』

Recipe. 22 — 落とし物 + 変身魔法

「パーティを組んだんだね。 うん、私もそれが良いと思う。」

ここはミアハ・ファミリアの本拠『青の薬舗』。ベル達とパーティを組む事になったアルクは、主神のミアハやナーザにそれを話していた。ベルについては良く知る仲であるため納得といった様子。リリに聞かしては以前サポーターとして雇った際に話をしていたため、少し驚いたようであった。

「なるほど。 ヘステイアの言っていたベルと一緒にいた女性というのはそのサポーターの子だったという訳か。」

「みたいですね。 今日にはベルと一緒に本拠でヘステイア様に会って、自己紹介やらパーティを組むまでの経緯の説明やらするらしいですよ。」

「確かにファミリアの異なる冒険者同士でパーティを組むなら、主神には話を通しておくべきかもしれない。 アルクとベルだったら必要ないと思うけど。」

リリがヘステイアに会うという話だが、アルクの言う“経緯”にはもちろん先日のヘステイア・ナイフ強奪事件についても含まれている。全てを話したうえでヘステイアに

ベルとパーティを組む事を許可してもらおうのが目的なのだ。

(ナイフについては手元に戻ってきた訳だし、ベルも許してるとみただったから問題ないと思うんだが、あの女神様がベルの傍に女性がいるのを許すかどうか……。)

もしかするとヘステイアからお目付け役を頼まれる事になるかもしれない。そう考えると少しばかり気が滅入ってしまうアルクなのだった。

「それじゃ、配達行つてきます。まあ、量的に昼前には終わるだろうけど。」

「いつてらっしゃい、アルク。というか、パーティを組んだのなら店の仕事はもつと滅らした方が良くんじゃない?」

「その辺はちゃんと話してるから問題ない。今まで通り仕事も採取もやるさ。」

「そう。分かった。じゃあ改めて、いつてらっしゃい。」

「おう!」

アルクにとっては薬屋の仕事も大切な日常の一つ。それを疎かにする気はない。しかしパーティを組んだ以上探索はより先へと進む事になるだろう。そうなれば当然日帰りとはいかない場面も増えるはず。どうやって探索と仕事を両立させようか考えつつ、アルクは配達の仕事に勤しむのであった。

「ん？ ベルじゃねえか。 1人か？」

「あ、アルク。 うん、ちよつとギルドに用事があつて。」

配達の帰り、アルクが何か食べる物でも買って帰ろうかと思つていたら、ベルと出会つた。 てつきりまだ本拠で話をしてると思つていたが、そうではなかつたらしい。

「リリはどうしたんだ？ 一度別れたのか？」

「あ、いや。 それが…。」

ベルの話ではリリは無事ヘステシアに許しを得られたとの事。 その後何故かりりとヘステシアでベルを奪い合う事態に発展したようで、2人に挟まれた状況に耐えられなくなつたベルは本拠から逃げ出して来たらしい。 今日も今日とて脱兎なベル・クラネルであつた。

「んで？ ギルドに用事つてのは？」

「実は、あの日の一件で10階層に腕に着けてたプロテクターを落としたらしいんだ。

もしかしたらナイフと同じようにギルドに届いてるんじゃないか、つて。」

ベルが腕に着けていたナイフを格納できるプロテクター。 それは、通常の冒険者以上

のスピードで探索範囲を広げるベルにアドバイザーのエイナが個人的にプレゼントした物だった。リリに置き去りにされた10階層での乱戦の中、それを落としてしまったらしい。

「あー、…そうだな。あるかもしれないな。」

アルクの歯切れが悪いのはナイフ奪還についてベルに話していないためである。面倒を避けるためにギルドに届けられていた事にしたナイフだったが、それを純粹に信じたベルはプロテクターについても同様の可能性があると考えたのだ。そんな律儀な冒険者が本当にいるだろうかと自らの嘘に罪悪感を覚えたアルクは、ベルに付いて行く事にした。

「残念ながらそのような落し物は届いていないみたいです。」
「そうですか…。分かりました、ありがとうございます。」

ギルドにやって来たベルは受付で落とし物について尋ねたが、やはりと言うべきか、ベルのプロテクターは届いていなかった。目に見えて落ち込むベルに罪悪感の膨らむアルク。午後にごっそりと探しに行こうかと考えていると、ギルドの一角で知っている

顔が目に入った。彼女もこちらに気付いたらしく、手を振り呼び掛ける。

「あ、ベル君。それにアルク君も。ちょうど良かった、実はヴァレンシュタイン氏が

——」

こちらに気付いて話し掛けるエイナ。それについては問題ない。しかし、彼女と話をしていた女性、アイズ・ヴァレンシュタインについてはそうではなかった。彼女を確認するや否やベルは踵を返しその場から逃げ出そうとする。しかし、

「流石にそれはどうかと思うぞ、ベル？」

見兼ねたアルクがベルを掴み逃がさない。膝枕についてはアルクとしてもドツキリの意味もあつたので強くは言わないが、今回は単に出会っただけだ。それで逃げてしまうのはアイズに対して失礼というものである。

「いや、あの、だって！」

「だってじゃない。折角だからこの前の事も説明してきたらどうだ？」

「この前の事」と言われて膝枕の時を思い出したのだろう。ベルは赤面しさらにパニックに陥る。そんな事をしていると、2人の上空を何かが通過した。いったい何だとそれを目で追えば、そこにはベルの行く手を阻むようにスタツと着地したアイズがいた。

「これで逃げ場はないぞ？　ベル。」

「う……。」

こうしてようやくベルとアイズは言葉を交わす機会を得たのであった。

「で、アイズの用事って何だったんですか?」

ギルドの受付近くでアルクはエイナに尋ねた。どうせなのでベルとアイズの2人きりで話をさせようと、2人は少し離れた場所からそれを見守っていた。

「ヴァレンシユタイン氏がベル君の落とし物を拾ったらしくてね。それを自分の手で返したいんだけど、って相談を受けていたの。」

「落とし物ってもしかして、エイナさんがベルに送ったっていう?」

「うん、私がベル君に……って何でそれを知ってるの!?!」

「まさか本当に届いているとは……。」

嘘から出た誠、とは少し違うがベルの落とし物は無事アイズという律儀な冒険者によつてギルドに届けられたようである。しかもアイズと話せる特典付きで、だ。

ただ彼女がそれを拾ったのは完全なる偶然という訳でもないらしい。実はベルが10階層に置き去りとなったその日、ソーマ・ファミアの持つ性質に危険を感じたエイナはソーマ・ファミアの団員であるリリとパーティを組んだベルの事を心配し、アイズに彼の事を頼んでいた。エイナの予想通り10階層で危機に陥っていたベルは、アイ

ズの参戦により窮地を救われたのだ。

しかし立ち込める霧にアイズの姿を確認出来ず、突然モンスター姿が消えた事に疑問を感じながらもリリを追い上の階へと進むベル。取り残されてしまったアイズはベルと話す機会を得られず落ち込むが、そこでベルが身に着けていたと思われるプロテクターが落ちてくる事に気が付いた、という訳だ。

そうこうしている内にベルとアイズの話も終わったらしく、アイズと別れたベルがこちらへとやって来た。その顔には満面の笑み。

「——守りたい、この笑顔。」

「え、何？」

「いや、何でもない。で、結構話し込んでたみたいだが、何を話してたんだ？」

2人きりにしたものの、話の内容についてはやはり気になるアルク。最初の内はベルがヘコヘコしていたためお礼や謝罪をしているのだろうと分かったが、途中から別の話をしていたように思える。もしかしたらデートの約束くらいはして来たのかもしれないと少し期待するアルク。憤怒のヘステイアが脳裏に浮かぶが今日はベルを応援したい気分なので仕方がない。

「これまで助けてもらったお礼と、それから実は今度アイズさんに戦い方を教えてもらえる事になったんだ！」

(色気がないなあ…。しかし、…アイズさん、ね。)

名前で呼べるようになった事にも驚きだが、『劍姫』直々に戦闘の指南をしてもらえらというのは最早破格と言えるだろう。そもそも他のフアミリアの団員から教えを受ける事自体が珍しいのだ。そう考えればベルがアイズの指南を受ける事が如何に規格外なのか分かる。

「いっどこでやるんだ？」

「お互いフアミリアの事もあるから早朝に、場所は市壁しへきの上で、つて事になったよ。」

「なるほどな。それなら人目にもつかないな。あ、でもリリには特訓の事は黙っておいた方がいいかもな。もちろん、ヘステイア様にも。」

「え？　なんで？」

自分の主神と、共に探索に出る事になるリリには説明が必要だろうと考えていたベルだったが、それにアルクが待ったをかけた。

「もし2人が特訓の場に来たらわざわざ人目を忍んだ意味がないだろ？　それに、こういう時は裏でこっそり力をつけていざって時にそれを見せつけた方が格好良いつてもんだ。」

「んー、確かに、…そうかも。」

単に2人にバレたらいろいろと厄介だろうというだけなのだが、それは言わない。そ

んなアルクの本心には気付かず、ベルはその意見に同意したのだった。

「遅いですね、ベル様。」

「そーだなー…。」

ベルがアイズとデート、ではなく特訓の約束をしてから数日後、アルクとリリはダンジョン前でベルの到着を待っていた。しかし予定の時間になってもベルの姿はない。彼が遅刻する事は珍しいためリリは心配な様子。

（まあ、理由は何となく分かるんだけどな。）

アルクにはベルの遅刻の理由はおそらくアイズとの特訓だろうと予想出来ているため暢気なものである。特訓自体を見に行った訳ではないが、ベルからかなりハードな特訓である事は聞いている。何でも実戦形式でその身に叩き込むタイプなのだとか。第一級冒険者と駆け出し冒険者の間で実戦形式が成り立つのかは定かではないが、ベルはやる気なので問題ないだろう。

「どこかで質の悪い冒険者に絡まれていなければ良いのですが…。」

「お前がそれを言うのか？」

アルクの言葉に「うっ…」と冷や汗を垂らすリリ。その心情を表す様に頭に付いた耳がダラリと垂れている。

「にしても、便利な魔法だよな。変身魔法って。」

「はい、この魔法のおかげで窮地を何度も切り抜けましたから。」

今現在シアンスローフ犬人の姿であるリリだが、実はそれは彼女が身を隠すために魔法を使った仮の姿。本当の彼女は小人族だ。つまりアルクがリリに初めて会った時の姿は覚え違いではなく確かに小人族であり、それが彼女の本当の姿だったのである。

「ただ、この魔法も万能ではありません。変身出来ると言っても体格が似通っている必要があります。つまり、アルク様に変身する事は出来ない、という訳ですね。」

小人族であるリリにとつては多少厳しい使用条件ではあるが、それでもその身を偽れるその魔法は十分に稀少魔法レアマジックだろう。窃盗等でなんとか生計を立てて来たリリにとつて変身魔法は命綱とも言えた。

「まあ何にしてもパーティとしては心強い魔法だつて事だ。いざとなつたらアルミラージにでも変身してモンスターを攪乱かくらんしてくれよ。」

「アルミラージでしたら、ベル様の方が適任かもしれませんね。」

そうかもなど笑うアルクにつられ、リリも微笑む。変身魔法について考えるうえで過去の事を思い出したのかりりの表情が曇りかけているように感じたアルクだったが、な

んとか方向転換は上手くいったらしい。

「おーい、リリ！ アルク！ 遅れてごめん！」

そしてようやく最後の1人が到着する。探索前だというのに彼は何故か生い茂る森林でも抜けて来たのかというように擦り傷だらけで息も絶え絶えだった。

「どうして最近ベル様はダンジョンに向かう前からあんなに傷だらけなんですか？」

「いよいよ本拠が崩れ始めたんじゃないか？ 結構ボロかったし。」

アイズとの特訓はリリには秘密であるため知らない体で嘘をつくアルク。なんだか最近嘘をつくのが板に付いて来ている気がするが、気にしたら負けだろう。

「よっ、ベル。別にそこまで遅れてないから気にすんなよ。」

「うん、ありがとう。リリも、ごめんね。」

「いえ、リリはベル様とご一緒出来るのなら何時までもお待ちします！」

「あ、あはは……」

ベルに救われた日から心を入れ替えた、というよりベル一筋なりりは今日も絶好調だ。その勢いに若干引き気味のベルだが、決して拒む様子はない。

「ところでベル様？ 何でそんなに傷だらけなんですか？」

先程アルクに聞いた質問をベル本人に尋ねるリリ。

「え、あ、えーつと、…い、犬に追いかけれちゃって。」
「……。」

アルクは自分がベルに嘘つきの指南をするべきなのだろうかと本気で思うのだった。

Recipe. 23 — 焦り + 白巫女

「この辺で白髪のパューマンを見ませんでしたか!? アルクさん!」

「……。」

いったいどうしてこうなったのか、アルクは考えていた。元々ベルの特訓の様子を一度見てみようと思つて朝早くから街の中を歩いていたのだが、そこで街中を駆け回るレフィーヤに出会つた。彼女は何か故かとする少年を探しているのだと言う。朝早くに本拠から姿を消したアイズの事を知っているらしい白髪の少年、その人物にアルクは心当たりがある。むしろ心当たりしかない。

(下手に誤魔化してもこのままだと行き着くだろうしなあ。)

ここで知らないと言えばレフィーヤはアイズと白髪の少年——というかベルを再び探し始めるだろう。今日見つからなくとも明日にでもどちらかの後をこつそりと尾行すれば結局見つかつてしまう。それならいつそ、とアルクは特訓について話す事にした。最近嘘で誤魔化す事も多かつたせいでアルクも少々辟易していたのだ。

「見ちゃいないが、今いる場所には見当がついてる。」

「本当ですか!? どこですか、どこなんですか!」

アルクの知る彼女はこんなキャラだっただろうか。前のめりに聞いてくるレフイーヤを落ち着かせ、アルクは彼女を伴い特訓の場である市壁へと向かった。

「あ、…あのヒューマン、なん、なんて羨ま、う、…羨ましい事を!」

動揺し過ぎて本心を上手く言い繕えていないレフイーヤ。そしてアルクは、市壁の影から見えるその光景に既視感を覚えた。いったい何故特訓をしているはずのベルは、アイズに膝枕をされているのだろうか。特訓というのは嘘で、実は早朝デートしてましたとでも言うのだろうか。様子見のために今にも飛び出しそうなレフイーヤをアルクが抑えていると、ベルが目を覚ました。

「うわぁー……! ん、ごめんなさい!」

そして状況を把握するや否や飛び起きアイズに平謝り。予想を裏切るその行動にアルクもレフイーヤも、ついでにアイズもポカンとしている。

その後の特訓の様子を見て分かったのだが、どうやらベルは単にアイズの膝を借りて寝ていた訳ではなく、特訓中に気絶したためにアイズが膝枕をしてあげていたらしい。彼女のその行動はおそらくベルが精神疲弊マインドダウンによりダンジョンで倒れていたのを見つけた際にリヴェリアが吹き込んだ方法を真に受けたためだろう。しかし、

——バキッ

「ぐはっ！」

——メキッ

「ぶほっ！」

あれは特訓として成り立っているのだろうか。実戦形式とは聞いていたが、やはりと言うべきかベルはアイズに手も足も出さず一撃の下気絶させられている。ベルを吹っ飛ばした後のアイズの「あ」という顔から彼女も意図して気絶させている訳ではなさそうだ。しかしベルは、何度も立ち向かい、何度も気絶し、何度も膝まく：何度も起き上がる。

「……私だって。」

しばらくその様子を見ていたアルクとレフィーヤだったが、レフィーヤは特訓中の2人に背を向け市壁を後にする。出会った時の勢いからてつきり特訓に割り込むのではないかと思っていたアルクだったが、彼女は彼女で思うところがあつたようだ。

「頑張れ、ベル。」

2人の邪魔をしてはいけなさとアルクもその場から立ち去る。最後にふと振り返り、決して聞こえない声援を送ると、そこにはアイズの膝枕に気絶しながらもニヤけ顔のベルがいた。

「殴りたい、あの笑顔。」
ちよつとイラつとした。

「レベル……6……。」

ギルドに張り出された紙面により告げられたのは『剣姫』アイズ・ヴァレンシユタインのランクアップだった。多くの冒険者達はその情報に沸く中、ベル・クラネルはただ茫然としていた。

（大丈夫だ、焦るな、お前ならきつと……。ダメだな、どの言葉も安っぽいわ。）

その姿を隣で窺うアルクはベルにかける言葉を探していた。しかし、彼の内心を理解出来るからこそそれがどうしても言葉にならない。それだけではない。ベルにかけて言葉が、そのまま自分に返って来そうな気がして仕方がないのだ。

「そろそろ行くこう、アルク、リリ。」

アルクが迷う中、ベルはただ黙ってダンジョンへと向かう。リリがそれを慌てて追いついて、アルクものんびりと、その後を着いて行くのだった。

探索は順調に進んでいた。レベル2のアルクもいるため1階層までやって来た3人は、天然ラントフォームの武器庫によりダンジョンのあらゆるものを武器とするモンスター達にも後れを取ることなく戦闘を繰り広げている。

「うし、今日はこんなもんか？ ベルもかなりこの地形に慣れて来たみたいだな。」

「流石ベル様です！ 先程インプの群れを相手にした時の立ち回りは素晴らしかったです！」

アルクとリリの言葉にベルは無反応。どうしたのかとアルクが尋ねようとした時、ベルはその口を開いた。

「そろそろ、中層に行っても良いんじゃないかな？」

「え、ち、中層ですか!？」

ベルの唐突な提案にリリは驚き慌てる。しかしアルクはそれに動じる事なく黙ったままだ。

「うん。今パーティにはレベル2のアルクがいるから中層への進出は許可してもらえらるはずだよ。だから「ダメだ。」——っ!？」

ベルの言葉を遮るようにアルクはそれを却下した。

「どうして？ アルクは何度も中層に潜った事があるんだよね？ だったら…。」

「残念ながら俺もそこまで中層には行った事はない。薬草採取も上層でやってたから

な。それに上層と中層じゃ難度はまるで違うんだ。そのための知識や準備も必要になる。」

アルクの言い分に反論も出来ず項垂れるベル。当然ながらアルクもベルのやる気を邪魔したい訳ではない。一般論としての理由以外にも、彼には無視出来ない理由があるのだ。

「それに、焦って先に進んだって、何も良い事はないんだぜ？」

「——っ！」

アルクの言葉にベルの肩がビクンと跳ねる。そう、ベルは焦っているのだ。自らが追い付きたいと願うアイズが次のステージへと進んでしまった。彼女よりもずっと早く強くならなければいけないのに、その距離はどんどん離れてしまう。

（強くなりたいなら、いや、強くなりたいからこそ焦っちゃダメなんだ。ベルやリリに、俺のような目に遭わせる訳にはいかない…。）

しかし、かつて中層の脅威に直面した冒険者がそこにいた。

「間違いなくお前は強くなってる。俺よりも、そしてあの『劍姫』よりも早く。だから、一步一步しっかり進めば良い。無茶して格好悪いところは見られたくないだろ？」

「あ…。」

——「やらなくて良い無茶をする時は大抵格好悪いんだよ。」

それは、ベルがアルクと初めて会った時に聞いた言葉。その時彼は言っていた。

——「避けられない冒険つてのは絶対にあるんだ。その時にはきつとベルも、強く、

そして格好良くなれるさ。」

「今はいずれ来る冒険に備えときな。特訓だつてその一環さ。」

「…うんっ!」

アルクの言いたい事はベルに伝わったらしい。ベルの表情は焦りの色が薄れ、以前へスティアの前で決意を告げた時と同じような顔になっていた。

「特訓…?」

「え!? ああ、たまーにベルとな。組手やってんだよ、組手!」

アイズとの特訓を知らないリリがいた事に気付き慌てて誤魔化すアルク。彼は今日も嘘を重ねてしまうのだった。

「そうね。それで良いのよベル。あなたには中層に進む前に試練を受けてもらわなくてはならないのだから。」

ダンジョンに蓋をするようにそびえる白亜の塔バベルの遙か上空。オラリオの誰よ

り高い位置に鎮座する美の神フレイヤは、ダンジョン探索から帰還するあるパーティーを、いや正確には、その内の1人の少年を見ていた。

「オツタル。準備の方は進んでいるかしら？」

「はっ。恙つつが無く進んでおります。」

彼女の傍らに控えるのはオラリオにおいて唯一のレベル7である猪人ポアズ、オツタル。頂点と言われる彼に与えられた二つ名は、『猛者おうじや』だ。

「それにしても、彼女にも少し忠告が必要かもしれないわね。ベルの心を掻き乱すあの娘。…アレン、いるかしら？」

「はっ！ ここのに。」

「ガリバー兄弟を呼んで来てくれるかしら。あなたと彼等に少し頼みたい事があるの。」

「分かりました。」

そう言うのと次の瞬間にはアレンと呼ばれた男は既にそこにはいなかった。そんなやり取りの間にもフレイヤはずっと、1人の少年を微笑み見つけているのだった。

「…なんでこうなった？」

「…私に聞くな。」

翌日アルクはその日も特訓らしいベルの成長を見に市壁へと向かおうとしていた。しかし、その途中で彼は再びレフイーヤに呼び止められてしまった。今度はいつたいたいだろうと彼女の元に向かえば、そこにはレフイーヤの他に白い服に身を包んだ黒髪のエルフがいた。彼女は何故かアルクと目を合わせようとはしない。

「あ、あの、この方はアルクさんですね、錬金術を使える冒険者さんなんです。ポーションが作れて私もお世話になったんですけど、あ、アルクさんは“マズポのアルク”と呼ばれていて——」

アルクの残念なプロフィールを矢継ぎ早に語るレフイーヤ。彼女の目的は分からな
いが、アルクとしてはやめていたいただきたい限りである。

「本当になんでこうなったんだ…。」

「だから私に聞くなと言っている。」

とは言えレフイーヤは依然としてアルクの紹介に忙しい様子。アルクが説明を求められるのはそこにいる黒髪のエルフだけなのだ。

「まあ…、おそらくは私のためなのだろうな…。」

「え？」

「……死妖精バンシーと呼ばれる存在を、知っているか？」

「いや、知らない。」

「パーティを組んだ者が悉く全滅する冒険者。それが不幸を呼ぶ死妖精バンシーと呼ばれる存在であり、私なのだ。」

「違います！」

黒髪のエルフの発言を、それまでアルクについてあれやこれやと語っていたレフィーヤが力強く否定した。

「フィルヴィスさんはそんな人じゃありません！ 死妖精なんて、勝手に周りがそう呼んでいるだけじゃないですか！ それに、フィルヴィスさんには白巫女マイナデスっていう素晴らしい二つ名がちゃんとあります！」

「分かった。分かったから落ち着け、ウイリデイス。別に誰がどう呼ぼうと私は構わない。お前がそう言ってくれただけで私は嬉しい。」

「…フィルヴィスさん…。」

（え、何？ もう行つて良いのか？）

妙な雰囲気になりつつあるその場から早く逃げ出したくなって来たアルク。しかし、それを知る由もないレフィーヤは次に黒髪のエルフの紹介を始めた。

「彼女はフィルヴィス・シャリアさん。ディオニユス・ファミアリア所属の冒険者で

す。」

「デュオニユシヨス……ファミリア？」

「ディオニユソス・ファミリアだ。」

言い難いものだから仕方がない。アルクの言い間違いは即座にフィルヴィスが訂正した。

「にしても残念だな。折角”不名誉な二つ名”仲間が出来たと思つたんだが。」

「不名誉な二つ名？」

「レフィーヤの紹介に入つてただけだな。俺の二つ名は災禍の薬箱パンドラつて書いて

災禍の薬箱だ。どうだ、不名誉だろ？」

開き直つたかのように自慢気に語るアルクにフィルヴィスは微かに目を見開く。そしてほんの少しではあるが、その顔を綻ばせた。

「フツ…、それは確かに、不名誉だな。」

「つ！ ですよねですよね！ 私も本当にそう思います！」

フィルヴィスが笑つた事でテンションが上がつて来たレフィーヤは彼女の意見に全面的に肯定を示す。そこまで言わんでもというアルクの心情などやはり知る由もない。

「ロキ・ファミリアのレフィーヤとディオニユソス「ディオニユソスだ」…ディオニユソス・ファミリアのフィルヴィスさんが何でまた一緒に？ 同郷のエルフとか？」

「いえ、先日フィルヴィスさんとは任務で一緒にさせてもらったんです。」
「ウィリデイス、その話は——」

「大丈夫です。アルクさんも食人花の事件に既に2度も巻き込まれていますから。」
「何? ……お前、レベルは?」

「2です。」

「…良く生き残る事が出来たな。」

「俺もそう思います。ほんとに。」

そしてアルクはレフィーヤから、24階層の食糧庫^{パントリー}で起こった出来事を聞いた。食人花や、それを操るその身に極彩色の魔石を埋め込んだ怪人^{クリーチャー}と呼ばれる存在。やはり何かが起こり始めているのは間違いないらしい。しかし、それよりもアルクには聞き逃す事の出来ない名前がそこには含まれていた。

「死を恐れず自爆覚悟で向かって来た眷属から、もしかしたらこの一件にはタナトス・ファミリアが関わっているんじゃないか、って。」

「タナトス・ファミリア、…か。」

——「オラリオに戻んぞ! タナトス様が新しいアジトで待ってる!」

それは、
今も恩師の仇が身を置いているかもしれないファミリアの名であった。

Recipe. 24 | 強襲 + とある受難

食人花に関する話を一通り聞いたアルク。

その話と思うところはあるが、現時点では何も出来ない。その一件で犠牲となった冒険者達の事を思い出したのかレフィーヤの表情に陰りが見えたため、話題を変える事にした。

「それで、今日は2人揃って何を？」

「え、…あ、実はフィルヴイスさんから、並行詠唱について教えてもらおうと思いましたが。」

「並行詠唱、ねえ。」

本来魔術師はその場で詠唱を行い魔法を行使するが、その詠唱を戦闘中に敵の攻撃を掻い潜り、避けながら行うのが並行詠唱である。それを会得すれば多くの魔術師にとつてネックとなる詠唱中の敵の攻撃への対処が可能になる。しかし詠唱しながらの行動は簡単ではない。短文詠唱であれば難易度は高くないが、レフィーヤは魔力特化の魔術師。魔法の威力に伴いその詠唱もかなり長い。

「俺はあまり関係ないなあ。前提魔法は必要だが、そもそも戦闘中には向かねえし。」

アルクの魔法『錬金混成』^{アルケミックサ}はその行使のために『結合』^{コネクト}という前提魔法を必要とする。戦闘中に使うのであれば、手にした魔石や血晶に意識を集中させるなどの行程があるため攻撃を受ける危険性はあるだろう。

しかしそもそもアルクの魔法は薬の錬成である。つまり、行使するのは戦闘中というよりもその前準備の段階となるのだ。18階層での戦いではイチかバチかで戦闘中に使ったが、基本的には事前に錬成した薬を戦闘中に使うのがアルクのスタイルなのである。

「そういうえば、ベルの魔法も詠唱してなかったなあ。」

「——っ。」

何の気なしのアルクの眩きに、レフィーヤの長い耳がピクリと動く。

「私は必ず” 並行詠唱 ” を出来るようになってみせます！ 行きましょう、フィルヴィスさん！」

「ん、ああ。それは良いが、…どうしたんだウィリデイス？」

何故か急にやる気を見せるレフィーヤに首をかしげるフィルヴィス。アルクにとってもそれは同じだった。

「アルクさん、あのヒューマンに伝えてください。 ” 私はあなたには絶対負けない ” と！」

「え？ ヒューマンって…ベルの事か？ まあそれは構わないが。」

アルクに伝言を頼んだレフィーヤは「それでは」とダンジョンへ向かう。流れに着いて行けず呆けていたフィルヴィスも「ではな」と先を行く彼女を追って行った。

「……ま、いいか。伝言も出来た事だしさっさと向かおう。」

アルクは気を取り直し、市壁へと向かった。

「結構様になってきたな。この調子なら終わるまでに一撃入れられるんじゃないか？」

「いや、流石にそれは。今日だってほとんど気絶しちゃってたし。」

「私も、ベルの戦い方は良くなってると思うよ。」

「え！ あの、その、…ありがとうございます。」

「なーに顔を赤くしてるんだい、ベル君！」

日が沈む頃、特訓を終えたベルは本拠へ帰るところだった。そこにはアイズはもちろんアルクと、何故かヘスティアまでいる。どうやらアイズとの特訓はヘスティアにバレてしまったらしく、ロキ・ファミリアの遠征までならと許可をもらったらしい。

ちなみにだが、ベルが気絶をしている間、折角なのでアルクもアイズに手合わせを

してもらっている。ベルの特訓を見ていたので覚悟はしていたが、やはりというか、アルクも一撃でノックアウトとなった。なんとか気絶こそ免れたものの、そこから反撃に移る事は出来なかつた。

ほんの数回それを繰り返したただけでは得られるものはなく、ただ自分に被虐趣味がない事を理解したアルクだった。何度も気絶しながらも諦めず立ち向かうベルには素直に賞賛だ。

少し賑やかなその一団が路地を進んでいる時だった。目の前に、スツと一人の男が現れる。急に眩しくなりアルクが目を細めると、男が顔に着けた黒いバイザーに日が反射しているのが分かつた。

——キンツ 「え——」

それは、一瞬だった。

金属音の後にベルの目に映つたのは、剣を構えたアイズだった。ベルも、そしてヘスティアやアルクも何が起つたのか理解出来ない。

「チツ。」

しかし何が起つたのかを物語るようにバイザーの男はその手に槍を構えている。ベルを狙つた彼の一撃をアイズが弾いた。それが分かるのに時間はかからなかつた。突然の襲撃に戸惑うアルクだったが、ふと足元に影が差している事に気付く。

「上だ！」

言うが早いか両腕にベルとヘステイアを抱え地を蹴るアルク。次の瞬間、3人のいた場所に4つの人影が落下した。

「子供…いや、小人族か！」

現れた4人の小人族はそれぞれ剣、斧、槍、槌を手にしていた。一糸乱れぬ動きで地面を抉った彼等は更なる追撃を狙う。

「炎金の四戦士…。じゃあ、あなたはまさか…女神の戦車！」

「……。」

バイザーの男は答えない。無言で突き出された槍を、アイズは剣で受け止めた。

「これ以上余計な真似はするな。さもなければ、——殺す。」

「余計な…真似？」

敵意ではなく明確な殺意をぶつける男。彼の言っている意味が一体何であるのかアイズには理解する事が出来ない。

「大人しくダンジョンに潜ってろって事だ。 ”人形姫”。」

(こいつ等は間違いなく俺より格上。しかも4人つてのはズルくないか!?)

一方アルク達は4人の襲撃者を前に打つ手を失っていた。ただでさえ自分よりも強

いと思われる冒険者が、数までも勝っている状況。完全に詰みだ。

(それにしても、女神の戦車……。何処かで聞いた気がするんだが……。)

アイズの言葉に何か引っかけかきかりを覚えたアルク。すると、4人の小人族の向こう。ア

イズと対峙するバイザーの男が猫キャットピープル人である事に気付く。

(猫キャットピープル人、バイザー……。あ。)

その時、アルクの中で何かがつながった。何故か小人族達バルウムにすぐに仕掛けて来る様子はない。アルクは意を決してバイザーの男へ言葉を投げ掛ける。

「知ってるぜあんた。そのバイザー、間違いねえ！」

「一体何だ？」

意に介していなかったアルクの呼び掛けに反応したバイザーの男だったが、興味はないとばかりにすぐにアイズに向き直る。ただし、次の瞬間彼の予想外の口撃が放たれる。

「あんたのバイザー、実は主神の顔をまともに見れな——「やめろ——!!」」

寡黙と思われたバイザーの男は急に慌ててアルクの言葉を遮る。その行動に、対峙するアイズはもちろん、ベル、ヘスティア、さらには仲間と思われる小人族達バルウムまでポカんとしている。

「お前、それを一体何処で！」

「まだあるぜ？ 駆け出しの頃に速さを自慢しようとしたら段差に躓いてあろうことか主神の胸に突っ込んだとか。」

「な、——な——。」

「あと実は××歳まで妹と一緒に風呂に入っ——」

「アアーニヤアアーニヤ!!」

情報の出所を悟ったバイザーの男、アレン・フロームルの絶叫が木霊した。

「にやつくしゅ!」

「うわっ、料理が!」

「にや!?! ご、ごめんにやさいにや!?!」

「何やってんだいアアーニヤ! 風邪ならとっとと上がって暖かくして寝な!!」

ちようどその頃、『豊穰の女主人』ではいつものようにアアーニヤ・フロームルが怒られていた。

「コイツ!」

予想外にアレンの動揺を誘ったアルク。その行動に彼が任務の障害になると判断した小人族達バルムムが襲い掛かる。しかしその攻撃は、アルクに届かない。

——キンツ — キンツ — キンツ — キンツ

4つの攻撃を全て弾き返したアイズ。アレンが隙を見せた事で彼女はアルク達の元へ駆け付ける事が出来た。

「この野郎……予定外だがてめえはここで『ファイア・ボルト』！——くっ！」

動揺を抑え今度はアルクに牙を剥くアレンにベルの魔法が放たれる。しかし、その一撃は多少の不意こそついたものの、難なく槍に弾かれる。

「人が集まって来たか……。少し騒ぎを大きくし過ぎたらしいな。」

一番騒いでいたのはお前だろう、とは誰も言わない。思っけていても、言わない。

「今日は引いておく。だが、忠告は忘れるなよ。」

その言葉を最後に襲撃者達は姿を消した。残されたアルク達は戦闘の痕から犯人扱いされる事を危惧し、すぐにその場から離れて行った。

「無詠唱の魔法か……。フレイヤ様にお伝えせねばな。」

任務を終え、本拠へと戻るアレン達。アイズへの忠告とベルの成長の確認という目的は果たしているため、敬愛する主神にもきつと満足してもらえらるだろう。

「フレイヤ様の胸に突っ込んだという話、後でじっくり聞かせてもらおうぞ。」
「……………」

彼の受難は終わらない。

「何だっただんどうな、さつきの奴等。」

「襲われたのは多分、私のせい。彼等は口キ・ファミリア達と敵対関係にあるから……」

「にしたって物騒過ぎやしないかい？ 街の中で襲って来るなんてさ。もしベル君が巻き込まれてケガでもしたらどうするつもりなんだ！」

「ま、まあ皆無事だったんですし、良かったじゃないですか、神様。」

路地から抜け出したアルク達は、先程の襲撃について話していた。

敵対派閥であるアイズに対する襲撃という結論になり、ベル達を巻き込んだ事を申し訳なく思うアイズと、ベルが危険に晒された事に憤慨するヘスティア、そしてそれを宥なだめるベルと、多種多様である。そしてアルクはというと、

（んー、……………今日の飯は何かね？）

特訓に参加した事でいつにも増して空腹を感じたのか、夕食について考えていた。

「そう、彼がそんな魔法を、ね。」

さらに場所は変わりフレイヤ・ファミリアの本拠。アレンから報告を受けたフレイヤは、満足そうな笑みを浮かべていた。

「その魔法を彼が試練の中でどう使うのか、見物ね。　試練については任せたわよ、オツタル。」

「はっ。」

「ところでアレン。　あなた、どうしてそんなにポロポロなのかしら？」

主神の指摘にアレンの肩がビクリと跳ねる。彼の傷は嫉妬に駆られた4人の小人族バルウム達によるものなのだが、その情けない事実を敬愛する神に話す訳にもいかない。「なんでもありません」という苦しい言い逃れに、フレイヤは「そう」と呟いた。

「今日はもう休む事にするわ。　ふふっ、試練の日が楽しみね。」

そう言うのとフレイヤは寝室へと消えて行った。その場に残されたのは、オツタルとアレンのみ。

——ポソッ

すると、アレンの肩に手が置かれた。誰の手かは考えるまでもない。アレンの横にはガツシリとした体格のオラリオ最強の冒険者が佇んでいる。

「な、何か……用か？」

「ガリバー兄弟から聞いた。フレイヤ様に、不埒な行いをしたそうだな。」

「……。」

まだ冒険者としては未熟な若かりし頃に背負ったその罪に、時効は存在しないらしい。彼の受難は、まだ終わってはいなかった。

約1週間のアイズによるベルの特訓が終わった次の日。アルク達はダンジョン探索へと来ていた。特訓の甲斐もあってか以前よりもスムーズに進んでいる。とはいえまだそこは上層。特訓の成果が本当に発揮されるのはやはり10階層以降となるだろう。「今日は何だが静かだね。」

「そうですね。他の冒険者も全然見当たりませんし。」

いつもならば他の冒険者と擦れ違ったり戦闘音が聞こえてきたりもするのだが、その日は何故か何も聞こえない。地上で怪物祭のような催しがあるとは聞いていないため、

その奇妙な状況に3人は首をかしげる。

——ガリリツ　ガリリツ

「——っ！」

そんな静寂の中で聞こえて来たのは、何かを引き摺るような音。地面、あるいは壁面に金属のような硬いものを擦り付けるような、そんな音。

「……そ、そんな。」

「なんで……」

音はアルク達の元へと迷った様子もなく近づいて来た。まるで、彼等を探していたのだと言わんばかりに。そして、獲物を見つけたそれは、引き摺って来た大剣を振り上げ咆哮を上げる。

〈ブオー——！〉

「なんでこんなところに、ミノタウロスが!?!」

それは、一方の角を失いその体は血に濡れたように赤く染まる、アルクも見た事の無い姿となったミノタウロスであった。

「なんで大剣なんて担いでんだよ。あの色といい、もしかして他の冒険者から魔石や武器を奪ったつてのか? 異常事態が過ぎるだろ!」

以前アルクが上層で戦ったミノタウロスも魔石により強化されていた。しかし、その

ミノタウロスは今日の前にいる赤い猛牛とは違い通常種と変わらぬ茶色い毛並みであった。アルクの戦った猛牛が強化種に至っていないなかったため毛色も変わらなかつたとするならば、今にもこちらへ襲い掛かつて来そうなその猛牛は…。

「固まったままだとマズい！ 二手に分かれるぞ。ベルとリリは右に！」

「分かつた！」「はいっ！」

相手が1体であるのならば、挟み込みは有効な一手だ。しかし相手が相手だ。ベルとリリの方が標的となるのは避けるべきだろう。アルクは自分へと注目を向けさせるために赤い猛牛へと駆ける。

しかし、その時アルクの体が弾けるように猛牛から離れていく。

アルクはそのまま宙を舞い、地を転がる。ベル達がいる部屋から退場させられるまで転がって行つた彼が起き上がると、驚くべき光景が広がっていた。

「な、…天井が…。」

天井が崩れ、アルクが転がって来た道を塞いでいく。岩はあつと言う間に部屋への侵入を拒む壁へと変わってしまった。何故そうなったのかは分からない。しかし、それが最悪の状況を意味しているのだけはすぐに分かつた。

「おい…ベル達はまだあのミノタウロスと同じ部屋中だぞ!? 何だつてんだよ！」

すぐに壁の破壊を試みるアルクだったが、ホルスターに爆薬の在庫がない事に気付

く。別の道からのアプローチの方が早いと判断し、道を進もうするが、そこには1人の男がいた。

「よお、また会ったな。」

口元に微かに笑みを浮かべる男の黒いバイザーが、怪しく光る。

Recipe. 25 | 痛し痒し + 震撼

「なんであんたがここにいるんだ？」

ベル達の元へ駆け付けようとするアルクの前に立ち塞がった男の名は、アレン・フローメル。

オラリオ最速のレベル6。フレイヤの眷属である彼の二つ名は、『ヴァナ・フレイヤ女神の戦車』だ。

「冒険者がダンジョンにいるのがそんなにおかしいか？」

如何いかにレベルの高い冒険者であっても下層や深層に直接向かえる訳でない。ロキ・ファミリアの面々と遭遇したように、上層でレベルの違う冒険者が出会う事は珍しくないのだ。

「そうだな、おかしくない。じゃあ、俺は急いでるんだ。通してもらうぜ。」

そう言つてアレンの横を通り過ぎようとするアルク。しかしその擦れ違う瞬間に、アレンはアルクに対し、顔の向きも変えずに小声で呟いた。

「そう言えば、この前の礼をしなきゃな。」

「——っ」

瞬間、アルクはアレンの傍から飛び退く。アレンは決して動いてはいない。ただ彼の

放った一言、たった一言がアルクに危機を感じさせた。まるで瞬間的に首元に刃を突き付けられたような感覚、いや、最速と言われる彼ならば、実際にそれを為したとしてもおかしくない。

「あんたに感謝される謂れはないと思うんだが？」

「そうだな。今回の件については先にアーニヤ元をどうにかすべきなんだろうが、折角ここで会ったんだ。付き合えよ、アルク・サルマン。」

アルクは何も言い返す事が出来なかつた。何故なら彼の顔の真横にアレンの持つ槍が突き刺さっていたからだ。

(まるで見えない……)

「お前が俺の視界から逃れられたら行っても構わねえぜ。それが出来ればの話だな。」

それは暗に”逃がさない”と言っているのと同義。いったいどうして彼はそこまでしてアルクの行く手を阻むのか。私怨というにはお膳立てが整い過ぎている。では彼の目的はいったい……。

「とにかく急いでるんだ。あんたに構ってる暇はない！」

そうしてアルクが走り出す。しかし、

「遅えよ。」

アルクの目の前に現れたアレンが彼を振り出しへ蹴り戻す。再度試すも結果は同じ。アルクはアレンという攻略不可能な鉄壁に為す術がない。

(早くベル達の元に行かなきゃいけないのに！ くそつ、何だつてんだよ！)

諦めず繰り返すが結果は変わらない。ただその繰り返しの中で、アルクが少しずつ傷を負っていくだけのジリ貧。アレンはその間、バイザーに隠れた顔色一つ変わらない。彼にとってこれは、迫って来るノロマなアルク[※]を打ち返すだけの退屈なゲームでしかない。

「どうした、もうへばったのか？」

(どうする、どうすれば良い。 副作用度外視でホルスターのポジションを使ってステータスを上げたとしてもアイツを抜けられるとは思えない。 なんとか中層で使える程度の薬じゃレベル6の冒険者になんて………待てよ、…冒険者?)

知恵を振り絞り何とか打開策を探すアルク。打つ手はないと諦めかけた時、相手が冒険者であるという状況から、1つの可能性を見出す。

(こゝろなりや何でもやってみるしかねえよな！)

そして、何度目になるかも分からないアルクの疾走。当然アレンは同じようにアルクの前に立ち塞がる。アレンの攻撃を受ける瞬間に、アルクは何かを投擲した。

——パリンツ

「なんだこれは。ポーションか？　チツ、悪あがきしやがって。」

アルクの投げた瓶はいとも容易くアレンの槍に碎かれた。しかしアレンも油断していたのだろう、その中に入っていた薬は碎かれた瓶から放たれ彼を濡らした。

「油でも掛けて火をつける気かと思つたが、違うらしいな。」

「なるほどな。それは良いアイデアだ。参考にさせてもらうわ。」

「フンツ、口の減らねえ奴だ。このつまらねえゲームも飽きて来たな。もう面倒だ、

ここで眠つてもらうか。どうせお前は死のうが構わないんだからな。」

「お前は、ねえ。じゃあいつたい誰に死なれちや困るつてんだ？」

「さあな」とアレンはつまらなさそうに吐き捨てた。どうやら彼にとつてはあまり面白い話ではないらしい。

「思い出したらイライラして来たな。しょうがねえ、お前で少し発散させてもらうか。」

そう言つて笑みを浮かべアルクの元へと歩み出すアレン。絶望的な状況にアルクがどんな顔をしているのか確かめようとした彼だったが、その表情は彼の予想していたものではなかった。

「お前、なんで笑つて——ぐっ」

次の瞬間、アレンの体に異変が起こる。体の至るところを駆け巡る感覚。急に前触れ

もなく襲い来るその感覚を、彼は知っている。

「な、なんだ……。体が……。体が……。痒い！」

彼を襲う感覚の正体は“痒み”だった。体中がムズムズとし始めたかと思えばそれは強烈な痒みとなってアレンに襲い掛かる。

「お前、いったい何をした！」

「さっきの薬な、俺の薬にしちゃ珍しく散布効果があるんだわ。飲んだ場合の効果は

”力” 上昇効果の小。そして散布時の効果は、”力” 上昇効果の大に、しばらくの激しい痒みつつー副作用。」

「痒みを発生させる薬だど!? 何だそれは、聞いた事ないぞ！」

「ま、錬金術師なんぞね。割りと何でもありなのさ。」

話す間にも痒みは治まるどころか増す一方。アレンがいくら抗おうとしても本能が掻け、掻き筆れと訴えて来る。とうとうアレンは衝動に逆らう事が出来ず、自らの体を爪で掻いた。

「ぐあー！ いてえー！ いてえー！！」

彼は現在薬の効果により”力”が大きく上がっている状態。そう、”耐久”は変わらずに”力”のみが、である。その状態で自らの体に爪を突き立てればどうなるか、それは痛みの余り叫ぶアレンの姿を見れば一目瞭然だろう。

「モンスタ―にはあんまり効果はなかったんだが人の肌なら、と思つてな。」

おそらく他にはないであろう”痒み”効果を与える薬。この効果、実はほとんどのモンスタ―には効かない。甲殻や毛皮に覆われたモンスタ―はもちろん、皮膚が厚いのかオークに対しても効果がない。効果があるとすればゴブリンやインプといった細身の小型モンスタ―くらい。服用時の効果があるとはいへ、決して零れぬように細心の注意を払い飲まなくてはならないため面倒である。

「いてえー！でも、…痒い！痒…いつてえー！！」

「予想以上の効果だな。俺はヤバイ薬を作っちゃまったらしい。」

痒みと痛みの狭間で悶え苦しむアレンをそのままにし、アルクはようやくその場を離れる事に成功したのだった。

「覚えときやがれ！このサル野郎ー！！」

「だからサルじゃねえつての。」

アレンの妨害を突破しベル達がいるはずの場所へと急ぐアルク。妨害が大きなタイムロスとなったため、どれだけ振り払おうとも最悪の状況を考えてしまう。

「間に合え、間に合えよ！ 頼むから無事でいてくれ、ベル、リリ！」

歩き慣れたダンジョンの道を、体の痛みに堪えながら必死に走るアルク。すると、アルクが向かう方向へと進んでいる冒険者がいた。

「リリ！」

「ア…アルク…：…様？ 良かった、た…。無事、だったん、です…ね。」

その冒険者の中にはリリがいた。彼女は血塗れであり、足元も覚束おぼつかない状態だった。

最悪の事態こそ免れてはいるが、決して喜べる状況ではないのも確か。それに何より、その場にはベルの姿がないのだ。

「彼女の事なら心配いらない。傷は既に塞がっている。」

「え？ あ…、リヴェリアさんに…フィンさん？」

「久しぶりだね、アルク・サルマン。」

リリに気を取られて気が付かなかったが、リリと一緒にいたのはアルクも知る冒険者達であった。

「白髪の冒険者…、ベル、だったかな？ 彼の救援にもアイズ達が向かっている。」

「アイズ達が…。ありがとうございます。」

「礼には及ばないさ。困っている冒険者がいれば助けるのが当然…と、言いたいんだけどね。実は白髪の冒険者が襲われていると聞いた途端にアイズが飛び出して行ってしまつてね。無視出来なくなつたという訳さ。」

アイズはベルと面識があるため、襲われているのが彼だと察し飛び出したのだろう。仕方ないという言い方をしているが、フィンもおそらく無視等しない。それは傷ついたリリを治療した事からも分かる。

「すみません。俺も早く向かいたいで、先いきます。」

「分かつた。彼女の事は任せてくれ。」

「アルク、様…。私も——」

「大丈夫だ、アイツはなんだかんだで運が良い。だから無理せずゆっくり来いよ。」

「じゃないと逆にベルから心配されちまうぜ？」

「…そう、ですね。」

リリは自分がキラーアントから助けられた時の事を思い出した。彼は自分の事よりも周りの事を心配するようなお人好し。そんな彼の身を案じて向かつた先でその彼に心配されてしまつてはなんとも格好がつかないだろう。

(アイズがいれば大丈夫だろうが、無事でいろよ、ベル！)

リリの事をフィン達に任せ、アルクは先を急ぐ。

「どう、なつてんだ…?」

ミノタウロスに襲われた部屋へと戻ったアルクの目の前には、信じられない光景が広がっていた。

その場にいたのはベル、アイズ、テイオナ、テイオネ、ベート、そして、赤いミノタウロス。

第一級冒険者がこれだけいてどうしてミノタウロスが未だ健在なのか。その理由はとも単純。第一級冒険者が誰一人として戦っていないからだ。では一体誰がミノタウロスと戦っているのか。その答えとなる選択肢は、1つしかない。

ベル・クラネルは、たった1人で猛牛と対峙していた。

いったい何故アイズ達が出さないか。他のファミリアだから?——いや、違う。獲物の横取りとなるから?——それも違う。彼女達は、ベルという駆け出しの冒険者の戦いに、惹き込まれていたのだ。そして、アルクもまたその1人となった。

猛牛は大剣を振るいベルへと襲い掛かるが、彼はそれをすんでの所で避けていく。もし当たれば間違いなく致命傷になり得る攻撃を掻い潜り、ナイフと魔法を駆使して立ち

向かう。

「あのトマト野郎……。 いったい何が起こってやがる。」

ベートはその少年に見覚えがあった。ミノタウロスの血で真っ赤に染まってしまった冒険者。モンスターに恐怖しダンジョンから逃げて行つた雑魚中の雑魚（事實はアイズを前に恥ずかしくて逃げ出したのだが）。しかし今、彼はあろうことかアイズの助けを拒み、単身で猛牛と戦っている。

「まるで、アルゴノオトみたい……。」

テイオナの眩きに、アルクは幼き日を思い出す。それは昔に読んだ一つの冒険譚。英雄に憧れる一人の少年が、周りに振り回されながらも苦難を乗り越え、そしていつしか『始まりの英雄』と呼ばれるようになる。そんなお話。

（ベル、お前いったいどこまで……。）

ナイフは通らず、魔法は力不足。打つ手はないと思われたが、ベルは猛牛が大剣を振り下ろした隙をつき、大剣を握る手にナイフを突き立て、さらに振り込む。

〈ブオーー!!〉

その痛みに耐えられず、猛牛は叫び声を上げ、大剣を手放した。ベルは猛牛の大剣を奪い、両手で構える。そう、彼に足りなかつた火力を補うために。

「あの冒険者、レベル1じゃないの!？」

テイオネの問いかけに、誰も答えない。誰もがレベル1だと確信していた。そのはずだった。しかし彼は、ミノタウロスと間違いなく渡り合っている。その姿は最早、駆け出しのそれではない。

「ベル……様……?」

アルクが声に振り向くとリリ達が到着していた。ベルの危機に助けを求めていたりりも、アルクと同様に言葉が出ない。アルクよりもベルとダンジョンを共にしたりりですら、今の彼の姿に驚きを隠せないでいる。

ベルと猛牛は距離を取る。それは、最後の一撃を前にした、一時の静寂。手を付き突進の態勢に入る猛牛。飛び出すために態勢を低く構えるベル。睨み合う両者は一気に駆けだした。

徐々に縮まる相手との距離。このままぶつかるか、それともどちらかが別の手を繰り出すか。

先に動いたのはベルだった。彼は地を蹴り猛牛へ向けて飛び出す。

「若い。」「馬鹿がつ。」

猛牛の突進を真正面から受けようとするベルにリヴェリアとベートは彼の敗北を悟る。しかし、

「まだ(だ)！」

ベルを知る2人の冒険者は信じていた。彼の、次の一手を。

——ガキーン！

聞こえたのは、猛牛の角がベルを貫く音ではなかった。ベルは猛牛の武器であるその角に、大剣を叩きつけていたのだ。角に与えられた衝撃に、猛牛がグラリとよろめく。その機を逃さずベルは猛牛の腹を切りつけた。

〈ブモォー——!!〉

大剣という武器を得た事で、遂に猛牛の体に大きな傷が出来た。苦しむ猛牛に、さすがベルは2撃目を与える。しかしそこで大剣が砕ける。猛牛は次は自分の番だと言わんばかりにベルへ向け、拳を振り上げる。今度こそ打つ手なしかと思われたが彼はまだ、諦めてはいなかった。

「【ファイア・ボルト】！」

その魔法は、無詠唱故か猛牛に通用する火力ではなかった。しかし、ベルは魔法を放つ手を「猛牛の傷」に当てていた。つまり彼の攻撃は硬い皮膚を無視し、直接猛牛の内へと放たれる。

「【ファイア・ボルト】！」

そして2発目。逃げ場を探し猛牛の中を駆け巡る魔法にその体は赤く光る。次第に

膨れ上がる猛牛の体。その場の冒険者達は目を見開き、その結末を目の当たりにする。
 「【ファイア・ボルト】!!」

遂に赤き猛牛は、体内で暴れ回る魔法に耐え切れず焼き尽くされた。灰と化した後に残ったのは、赤い一本の角。おそらくドロップアイテムだろう。

「…勝っちゃった。」

テイオナの言葉に、ようやく我に返るアルク。

「ベル…。——っ！ おい、ベル、無事か!？」

アルクの呼び掛けに応えは帰って来ない。しかし、それまで猛牛であった灰が舞いあがる中、そこに確かに彼は立っている。

「精神疲弊?」
マインドダウン

ベルは既に気を失っていた。立った状態のまま、防具も剥がれ背中中のステータスを曝け出したままで。その姿は、それまでの戦いを見た者ならば神秘的にも見えただろう。

「リヴェリア、奴のステータスはどうなってる。」

「私に盗み見をしると?」

「あんなの見てくれって言うてるようなもんだろ!」

ベートの言葉に、リヴェリアは一度アルクを見た。ベルの仲間という事からアルクに判断を委ねるつもりなのだろう。少し考え、アルクは首肯を返した。本来ならベルの事

を考え止めるべきなのだろうが、あの戦いを見せられた後だ、ステータスはどうしても気になってしまふ。

（すまん、ベル。 まあここはステータスを施錠^{ロック}してないへステイア様のせいって事にしておこう。）

アルクが心中で言い訳をしている間に、リヴェリアはベルのステータスを解読する。しかし彼女は何か沈黙したまま、ただジツとその背中を見据える。

「おい、勿体ぶらずにさっさと教えろ！」
痺れを切らしたベートに急かされ、ようやくリヴェリアは口を開いた。

「アビリティ…：オール”S”。」

『!?!』

冗談ではないかと誰もが疑った。しかし、リヴェリアにその様子はない。むしろ、それまで彼女が沈黙していた事がその信じられない事実を裏付ける。

「彼は何者なんだい?」

「ベル・クラネル。 冒険者になってまだ1月の、…駆け出しの冒険者ですよ。」

アルクの答えに、フィン「ベル・クラネルか」とその名を口にする。本人の与^{あずか}り知

らぬところでベルは、大物冒険者に顔と名を覚えられてしまったらしい。

——ゾクリ

「——っ！」

急にアルクは何かを感じた。手を見れば、微かに震えている。

（やばいな。 あんなもん見ちまったら、ジツとなんてしてられねえわ。）

止まらない高揚感が、アルクの背を強く押す。

（そろそろ俺もしいとな。 ”冒険” ってやつを。）

Recipe. 26 — 魔劍鍛冶師 + 小さき新人

「本当にいいのか？ アイズ。」

「うん、構わない。」

ベルの戦いを目の当たりにしたアルク達。その戦いぶりやオール“S”というステータスにそれぞれ思うところはあろうだが、残念ながらいつまでもベル達をそのままにはしていられなかった。ベルは防具も含めボロボロの状態であり、マインドダウン精神疲弊で気絶したまま。リリの方も傷こそ治療済ではあるが体力等の消耗が激しい。2人のパーティであるアルクがすぐに地上へ連れて行こうとしたところ、待ったの聲が掛かった。「1人で2人を運ぶのは大変。だから、私も手伝う。」

アイズの提案に問題ないと返そうとしたアルクだったが、既に彼女はベルを背負っており準備万端の様子。断りづらくなつたアルクはそのままベルをアイズに任せる事にした。

(頑張ったベルへのご褒美にもなるだろ。 ∴ 気絶してるけどな。)

「それじゃ俺はリリを…、つて、リリ？」

「彼女なら気を失ってしまった。おそらく彼が無事だった事で安心したのだろう。」

見てみれば確かに気を失っているが、苦しそうな様子はない。アルクはリリの所持品であるバックパックを背負い、彼女自身はいつかの時の様にお姫様抱っこ状態にする。

「アルク・サルマン。これを彼に。」

歩いて来たフィンがアルクに差し出したのは、紅い角であった。

「彼の戦利品だ、忘れないようにね。」

「はい、ちゃんと渡しときます。」

2人の様態の事もあるため、話もそこそこにアルクとアイズは地上へと向かった。

「それにしても、女神ヴァナ・フレイアの戦車まで出て来るとはね。僕達の前に立ち塞がったオツタル

といい、とても偶然とは思えないな。」

フィンは見えなくなるその時までずっと、アイズの背で眠る少年から目を離す事はなかった。

「レベル2……!!?」

ギルドに叫び声が響く。目の前でその爆音を耳にしたベルとアルクは堪らず耳を抑

えている。

声の主はギルド職員のエイナ・チュール。彼女は今、アドバイザーを務めているベルから近況を聞いていた。しかし、話の中にはエイナも耳を疑う内容が含まれていた。

「まあ驚くよな。 たった一月でレベル2なんて。」

「は、ハハハ。」

ランクアップ情報

ベル・クラネル レベル2 所要期間1カ月

ギルドで情報を整理するためその功績が貼り出されるまで少しかかるが、大体そんな感じとなるだろう。そこに二つ名が添えられれば、ベルも一気に有名人となる。何と言っても彼はアイズ・ヴァレンシユタインの所要期間1年という記録を大幅に塗り替えた超最速の世界記録保持者となるのだから。

「そういうえば、二つ名はどうなってるんだ?」

「うん、実は今日がちょうど神会デナトウズの日らしくて、僕にピッタリの二つ名を勝ち取ってくるって神様デナトウズが朝から出掛けて行ったんだ。」

「今日神会デナトウズだったのか。ミアハ様はそういうのあんま出ないからなあ。」

ミアハ曰く、「それよりも皆のために薬を作っている方が性に合っている」らしい。ちなみにアルクの二つ名を決める際には流石のミアハも神会デナトウスに出席したのだが、結果は知つての通り。健闘虚しく災禍パシの薬箱ドラという不名誉な二つ名を持ち帰る事になった。

「マシな二つ名、もらえると良いな。」

「うん!」

『『レッド脱兎』』とかな。」

「何それ!」

ウサギのような外見と良く赤面して逃げ出すためにアルクが考えた二つ名は頗るすしこぶ不評だった。「いいと思うんだけどな、語感とか」と少し不満気なアルク。ふざけているようで、多少本気だったのかもしれない。

ギルドにランクアップ等の報告を済ませたベル。続いて訪れたのはバベルのとある武具店。ミノタウロスとの戦闘により防具が壊れてしまったため、新たな防具を買いに来たのだ。

「ベルもこの店知ってたのか。俺もここ使ってるぜ。」

「アルクも?」

その武具店は、アルクも良く利用する店であった。なんでも見習い鍛冶師の作品を販売しているらしく、その中にはヘファイストス・ファミリアの鍛冶師の作品もあるとの事。一度大剣のメンテナンスのためにヘスティア・ファミリアを訪ねた際に、主神であるヘファイストスから「中には将来有望な鍛冶師の作品もあるから、ぜひ行って見てね」と勧められたアルク。単なる宣伝だろうと思いつつもやってみて来た彼の予想は、良い意味で裏切られた。

「目の利かない俺でも分かる上等な防具もたまにあるからなあ。」

見習い鍛冶師と言えどその中にも大きな実力差がある。何とか売り物になるような小さなナイフもあれば、ブランド品と見紛うようなフルアーマーもあった。

「なんでいつもあんな隅っこなんだ！ もうちょつとマシな所で売ってくれても良いだろう!？」

受付から聞こえる不満の声。おそらく見習い鍛冶師が自分の作品の置き場に異議を唱えているのだろう。名を揚げるため、出来る限り客の目に付きやすい場所で売って欲しいと願う気持ちは分からなくもない。

「んー、ないなあ。」

アルクが掘り出し物はないかと武具を物色していると、立ち止まり何かを考えているベルに気が付いた。どうやら彼には何か買いたい防具の当てがあったらしい。

「ないって、何を探してるんだ？」

「あ、うん。実は“ヴェルフ・クロツゾ”さんが作った防具を探してて。前の防具もその人が作ったものだったんだけど、軽くて使い易かったから。」

「なるほどな。……って、“クロツゾ”？」

その名にどこか聞き覚えのあるアルクだが、どうしても思い出せない。その内思い出すだろうとアルクは気にせず物色を再開した。ベルは別の場所にあるのではないかと考え、受付へと尋ねに向かう。

「あの、すみません。ヴェルフ・クロツゾさんの防具って、売ってないんですか？」

ベルの問いに、店主の目が点となる。そして彼がベルの顔からゆっくりと視線をその隣にいる男へと向けていくと、視線を向けられた男は、突然笑い出した。ベルには何が何だか分からない。

「あ、冒険者。お前が欲しがってる防具なら、“ここ”にな！」

そう言ってニカッと笑う青年。彼の前にあるのは木箱に入れられた“ヴェルフ・クロツゾ”と刻まれた防具。そう、彼はその防具の製作者、つまり、ヴェルフ・クロツゾその人なのだ。

「まさかわざわざオレの防具を探しに来てくれる冒険者と会えるとはな。」

「僕も、クロツゾさんに直接会えるとは思ってませんでした。」

新しい防具を手に入れたベルと、アルク、ヴェルフの3人はバベルにある休憩所で話をしていった。ちなみにアルクは特に掘り出し物も見つけられなかったため何も購入していない。

「あー、出来れば名前でも呼んでもらって良いか？ そう呼ばれるのは好きじゃないんだ。」

「え？ はい、じゃあヴェルフさんで。」

”クロツゾ”と呼ばれる事を嫌うヴェルフ。ベルは疑問に思うも言及はしなかった。

その後の話でヴェルフはアルク達のパーティに加わる事が決定した。なんでもランクアップにより”鍛冶”の発展アビリティを手に入れたらしい。ヴェルフの鍛冶師としての腕が上がるのであればその顧客とも言えるベルにとってもメリットがある。その場にいないリリにも話を通す必要はあるだろうが、彼女もベルが話をすれば問題ないだろう。

「アルク、だったな。ヴェルフだ。よろしく頼む。」

「ああ、アルク・サルマン、ミアハ・ファミリア所属だ。よろしくな、ヴェルフ。」

アルク達のパーティに、1人の鍛冶師が加わった。

『リトル・ルーキー』?』

「うん、どう思う? リリ。」

「えーと…、そうですねえ………普通?」

「だよねえ…。」

リリの感想を聞きテーブルに突っ伏すベル。同じ席に着くアルクやヴェルフも苦笑気味である。

「いいじゃないですか。 私は好きですよ、『リトル・ルーキー』。」

そこに現れたのは給仕服姿のシル。彼女の言葉に「そうですね?」と少し持ち直すベルだったが、その様子にリリは不満気である。

先程から何度も出て来ている『リトル・ルーキー』という言葉。察しの良い人ならばすぐに分かるだろう。そう、それは世界最速でレベル2となったベル・クラネルの二つ名だ。

「最速も最速だったからな。 頭角を現す前にランクアップしちまったんで神様達も良い案が浮かばなかったんだろ。」

アルクの様にも前科…、もとい良し悪し問わず何か評価に値する実績があればそれに因んだ二つ名が付く。しかしベルは冒険者になってまだ一月。彼が為した事はそう多くはない。それ故に『リトル・ルーキー』という無難な結果に落ち着いたのだらう。

「良いじゃないか。どつちにしたつて誰より早くランクアップした事には変わりないんだ。今夜はそれを盛大に祝おうじゃないか。」

「そうですね。…それはいいんですが、…あなた様は？」

ベルのランクアップの話で聞くタイミングを逃していたリリは、割りと初めから気になっていた事を尋ねた。ベルのランクアップ祝いと称しているが、実は今夜集まったのはリリとヴェルフの顔合わせも兼ねているのだ。

「ああすまない。自己紹介がまだだったな。オレはヴェルフ、鍛冶師だ。」

「えっと、リリルカ・アーデです。ベル様達のサポーターをしています。それで、何故鍛冶師のヴェルフ様がここにいらつしやるのですか？」

ベルは、ヴェルフのパーティ加入についてリリに話した。最初は自分の知らないところで話が進んでいた事に不満そうなりりであったが、パーティに鍛冶師がいる利点も理解しているため反対する事はなかった。

「改めてよろしくな、リリスケ。」

「変なあだ名で呼ばないで下さい！ リリはりりです！」

抗議をするリりに「良いじゃないか」と笑うヴェルフ。そんなやり取りの中、アルクは何かを思い出そうとしていた。

（ヴェルフ……。 変なあだ名……。 んー、ヴェルフ……。ヴェル……。あ。）

「そうか、椿さんの言ってた”ヴェル吉”ってのはヴェルフの事だったのか。」

誰にも聞こえぬ声で呟くアルク。それはロキ・ファミリアのパーティに同行し、リヴィラの街を訪れたその帰り道。偶然居合わせたヘファイストス・ファミリア団長の椿と共に地上へ向かう途中で聞いた話だった。

——「お前はどこか、ヴェル吉と似ておるな。」

そのヴェル吉という青年は、魔剣を打つ事が出来る鍛冶師であるが、椿曰く”つまらない意地”で決して魔剣を打とうとしないらしい。”武器は使い手の半身であり、どんな窮地であっても決して使い手を裏切らない”、それが彼の持論。だからこそ、”使い手を残して砕け散る”魔剣を彼は打とうとはしない。

（似てる、か。俺もやっぱり意地になってるだけって事なのかね……。）

もし椿の目にヴェルフとアルクが似て見えたのだとすれば、その”ヴェル吉”に対しての彼女の意見は大なり小なりアルクにも当てはまるだろう。

「クロッゾって、あの没落した鍛冶貴族の!？」

アルクが思い耽^{ふけ}っていると、いつの間にかヴェルフの秘密はバレてしまったらしい。

没落した鍛冶貴族であるクロツゾ一族。その一族において唯一クロツゾの魔劍を打つ事が出来るにもかかわらず魔劍を打たない鍛冶師、ヴェルフ。

「ほんと、妙なメンツが集まったもんだわ。」

誰かがそれを聞けば、「お前が言うな」と返されるところだろう。しかしヴェルフの話で騒いでいるベル達にはアルクの言葉は聞こえていなかった。

「あなたがそれを言いますか。」

「——っ!?!」

否、バツチリと近くで料理を運んでいたリユーに聞かれていた。

レコードホルダー
記録保持者、ベル・クラネル。

元盗つ人の小さなサポーター、リリルカ・アーデ。

魔劍を嫌う鍛冶師、ヴェルフ・クロツゾ。

そして、マズポを生み出す錬金術師、アルク・サルマン。

（ほんとに妙なパーティだが、これなら攻略出来るかもしれないな。）

アルクは思い出す。それは、かつてのファミリアの記憶。

中堅ファミリアが零細ファミリアへと落ちる原因となったその出来事をアルクは決して忘れない。

（パーティは4人になった。そしてレベル2は俺とベルの2人。）

条件は揃った。いや、揃っていた。ベル、リリとパーティを組んだ、その瞬間に。それでも進もうとしなかったアルクに火を点けたのは、間違いなくベルだろう。

(今度こそ攻略してやる。ダンジョン……中層！)

ロキ・ファミリアという大派閥に付いて行くのではなく、正式にパーティを組んだメンバーでのダンジョン攻略。ついにアルクも、止まっていた歩を進めんとしていた。

「そういえばアーニヤの兄貴情報役に立ったぞ。ありがとな。」

「にや?」

アルクの感謝に心当たりのないアーニヤは首を傾げるのだった。

「素晴らしかったわ。やっぱり私の目に狂いはなかったみたいね。」

バベル頂上。ここでもアルク達と同じようにベルと赤いミノタウロスの戦いを見ていた神がいた。彼女の課した試練を見事乗り越えた少年。その姿に彼女はうっとり

した表情を見せる。

「申し訳ありません。我が力が足りず、彼の元に向かうロキ・ファミリアの連中を止める事が出来ませんでした。」

「構わないわ。相手が悪過ぎたもの。ロキ^彼・ファミリア^等の遠征についてもつと調べておくべきだったわね。」

如何にオラリ才最強の冒険者と言えど、レベル5、6の冒険者に一齐に仕掛けられればその対処は厳しくなる。しかも彼の塞ぐ道を通り抜けられた時点で負けという圧倒的に不利な状況だった。それについては主神であるフレイヤも理解している。

「アレンもご苦労様。レベル2の彼がいてはあの子の試練にならないものね。」

オツタルとは逆の位置に控えるアレン。彼もまたオツタルと同じように試練における邪魔者となるアルクの隔離を任されていた。

「ところでアレン。あなた、どうしてそんなにボロボロなのかしら?」

主神の指摘にアレンの肩がビクリと跳ねる。彼の傷はアルクの痒み薬により上昇した力で自らを掻き穿つたため出来たものだが、その情けない事実を敬愛する神に話す訳にもいかない。

「なんでもありません。」

「……………そう。」

少し考えたフレイヤだったが、やはり深くは追及しなかった。

Recipe. 27 — 上層の長 + 中層への道

「ついに来たぜ、11階層！」

アルクは何度も足を運んだ地であり、ベルとリリもここ最近来る事が多かった11階層。

その中で新鮮な反応を示すのはパーティの新メンバー、ヴェルフ・クロツゾだった。

「ヴェルフは初めてなんだっけ？」

「ああ、オレは…その、魔剣の事もあつてファミリアじゃ少し、な。だからこうしてパーティを組んでくれて本当に助かった。改めてありがとうな、ベル。」

「ううん、ヴェルフの”鍛冶”アビリティの獲得は僕にとつても助かるし、お互い様だよ。」

今日の目的はヴェルフを加えての初探索となるためそれぞれのポジションや動き方の確認が主である。アルクだけでなくベルもレベル2となった上にパーティの規模も4人となったので、上層の探索はこれまでになく快調だ。

基本はアルク、ベル、ヴェルフが前衛で戦い後衛のリリがボウガンで援護するスタイル。しかしベルには無詠唱の魔法『ファイア・ボルト』が、アルクには発火薬等の投擲

があるため少し距離を取って中衛的な位置から状況を把握する事も出来る。

「12階層到着、と。早かったなあ。」

「3人の時点で難なく来られていましたからね。報酬が4等分になると考えたのであれば妥当なところだと思います。」

「え、お金の話?」

上層最後の階層へと到着した一行。パーティのレベルを考えれば中層に行く事も可能ではあるのだが、今日いきなり中層へと足を踏み入れる予定はない。そのための準備が整っていないければ如何に上層を容易に攻略出来たとしてもあっさりと命を落としてしまう。中層への進出とはそれほど世界が違うのだ。

「おっと、早速モンスターの出ましたな。インプは任せろ。あいつ等ならオレでもなんとか倒せる!」

「発火薬もほとんど使っちゃったし、俺はオークの相手をするかな。ベルはヴェルフの、リリは俺の援護を頼めるか?」

「分かった!」「分かりました!」

投擲用の薬の在庫が心許ないアルクは中衛兼任から完全に前衛となる。前衛と援護でペアを組み、それぞれモンスターの群れに対抗していくアルク達。インプ達を倒した隙をつく形でヴェルフに迫るハードアーマードも、ベルが放つファイア・ボルトの前に

塵となる。

その戦闘の中で、ベルはランクアップにより強くなっている事を実感していた。

(凄い。魔法の威力が全然違う。それに、敵の動きが良く見える！)

本拠でヘスティアにランクアップをしてももらった際には強くなつたと言われても良く分からなかった。しかし今、ベルはモンスター達を相手にそれまでとは明らかに違う動きを見せている。共に戦っていたアルクとリリは感嘆し、今日初めて戦闘を共にしたヴェルフでさえも、その姿に呆けていた。

—— チリイン

「おいベル。その手、どうしたんだ？」

「え？」

ヴェルフの言葉にベルが自分の右手を見れば、そこには白い光。まるでベルの右手が光を纏まとう様に光っている。

「え？ 何、これ。」

—— チリイン

しかし、ベルにもその光に心当たりはない。しかもその手元からは微かに鈴のような

音が聞こえる。ベルとヴェルフでその不思議な光に首を傾げていると、どこからか冒険者の叫び声が聞こえた。

「逃げろー！ インファントドラゴンだあ！」

冒険者達を追っているのは大きな胴体に長い首を持つモンスター。上層最強と言われるインファントドラゴンである。その首長竜は真つ直ぐにアルク達の下を目指している。

「リリ、危ない！」

そして、一番近い位置にいるのはリリであった。大きなバックパックを持ち、ベルの様に「敏捷」が高くはないリリに逃げる暇はない。しかし、

「大丈夫か、リリ？」

「はい、ありがとうございます、アルク様。」

リリとペアを組んで行動していたアルクがいたため首長竜の脅威からの離脱は容易だった。猛進を続ける首長竜は次にベルとヴェルフの下へと向かう。

「ベル、早く逃げ——」「【ファイア・ボルト】！」：あー、まあいいか。」

避けてやり過ぎそうとしたアルクだったが、ベルは果敢に魔法で立ち向かった。こうなれば首長竜はベル達をはつきりと敵と認識し、襲い掛かって来るだろう。大剣に手を掛け再び戦闘態勢に入ろうとしたアルクだったが、そこで彼の予想外の出来事が起こつ

た。

ベルの『ファイア・ボルト』を受けたインファントドラゴンの首が吹っ飛んでいたのだ。

レベル2に上がり魔法の威力も上がったとして、ベルの『ファイア・ボルト』がインファントドラゴンを一撃で倒せるか。答えは否だろう。誰もが呆気にとられる中で、その功績が嘘ではないと言わんばかりに残った胴は塵となり、大きな魔石がゴトリと地面に落ちた。

後に分かった事なのだが、どうやら『ファイア・ボルト』の威力が上がったのはベルがランクアップ時に発現したスキル『英雄願望』アルゴノオトが原因らしい。その効果を簡単に表すならば“溜め攻撃”といったところだろう。ベルとヴェルフが見たという白い光はその蓄積した力が視覚化されたものだと思われる。ベルは無意識のうちに力を蓄積しており、それを『ファイア・ボルト』に乗せて放ったという訳だ。

「無詠唱魔法といい、ほんとベルは出鱈目だよな。」

「そ、そうかな…。」

アルクもあまり人の事は言えないだろう。

「その角を使って新しい武器を作ってやろうか？」

それは、ベルがヴェルフにランクアップの切欠となったであろうミノタウロスとの闘いについて話していた時だった。その戦利品である紅い角を見たヴェルフはそれを素材にしてベルの新たな武器を作る事を提案した。

「えっ、そんな事出来るの!？」

記念品として持つておく以外に用途のなかった紅い角。それが自分の武器になると聞いてベルは目を輝かせた。思ったが吉日とばかりに話は進み、アルクを加えた3人はヴェルフの工房へと向かった。

ちなみにリリは下宿先の主人の調子が良くないとの事で不在である。アルクも午後から仕事があるため探索は休みにする予定だったのだ。

「散らかってて悪いな。その辺でゆっくりしててくれ。」

工房に着くとヴェルフは早速準備を始めた。炉に火が入ればそこは正に工房。アルクも工房の様子を見た事がない訳ではないが、一からその工程を見た事はないためベル同様に少し興奮気味である。

しばらく経ち、ベルとアルクが工房にあるヴェルフの作品を見て回っていた時だった。

「ベル達は、オレに”魔剣を打て”とは言わないんだな。」

ヴェルフは辟易していた。魔剣の力を使って名を揚げようとする冒険者達に。数回使えば砕けてしまうその力は、決して冒険者そのものの力とはならない。砕ければ次々と求める者、さらには砕ける前提で多くの魔剣を求める者。そんな者達を前に、ヴェルフは魔剣鍛冶師としての道を閉ざした。

アルクは椿の話でヴェルフが魔剣を打たない事を知っていた。ベルもヴェルフが魔剣を打てるというのは主神ヘステイアから聞いていた。アルクは打ちたくないというのであれば無理を言うつもりはない。ベルは単純に無欲。冒険者となつてからの日の浅さと武器、魔法、スキルと恵まれている状況もあつてか魔剣が欲しいという欲がない。

「まあ、売つても良いならもうけどな。」

「え!?! いや、アルク、それは流石に…。」

「ハハッ、そんな事面と向かつて言われたのは初めてだ。もちろんそんな理由で打つ

てやるつもりはないけどな。」

アルクの冗談に、ヴェルフは愉快そうに笑う。1人真に受けてしまったベルはアルクの言葉が冗談だと気付き「なんだ、冗談か」と苦笑い。

「それじゃあそろそろ俺は行くわ。これから仕事だ。」

「あ、うん。またね、アルク。」

「折角来てもらったのに何も構ってやれなくて悪いな。アルクもし何か欲しい武器があつたら言ってくれ。素材さえあればオレが立派な武器に仕上げてるよ。」

「魔剣の素材って何だっけか？」

「喧嘩売ってるのか？」

「冗談だ。…そうだ、ちようど欲しいと思つてた武器があつたんだ。」

「そうなのか？」

「ああ、と言つてもちよつと特殊なんだがな——」

アルクは最近になつて欲しいと思ひ始めていた武器についてヴェルフに話した。話を聞くにつれてヴェルフの顔は次第に難しいものになつていく。

「その手の武器は作つた事がないんだが、まあリリスケがいればなんとかなるだろ。」

素材についてはまた今度な。」

「おう、じゃあこれで。」

武器については今後詰めていくとして、アルクはヴェルフの工房を後にするのだった。

次の日、アルク達は今後の予定について話し合っていた。

ランク、人数共に申し分ないという事で中層への進出が決まったのだがアルク以外は中層初心者のため、その準備は念入りに行う必要がある。

「まずは知識だな。ベルはもうエイナさんから講義を受けてるんだろ？」

「うん、中層の話をした次の日からミツチリ…、それはもう、ミツチリ…。」

講義を思い出したのか遠い目をするベル。エイナの講義はなかなかのスパルタであり、アルクの担当アドバイザーであるミイシャから聞いた話では、ギルドの奥にある講義室からベルがゲツソリした姿で出て来たとか。

「一緒に中層に向かう以上、リリとヴェルフにも講義を受けてもらわなくちゃいけない。個々での判断が必要になる場面もあるだろうからな。」

「確かに。」

「勉強かあ。ま、しようがないか…。」

ヴェルフは少し気が進まないようではあるが、2人共アルクの意見に同意する。中層知識の修得はアルクが言うまでもなく不可欠。特にサポーター歴が長く状況判断に長けたリリにとっては大きな意味を持つ。

「それで、装備と道具も揃えないとな。特に炎対策については必須だ。」

「炎対策……あ。」

「ベルは講義で聞いただろうが、中層最初の13階層から出て来るモンスターにヘルハウンドっていうのがある。厄介な事に奴等は炎を吐いて攻撃してくる上に群れで行動している可能性が高い。炎対策が不十分だとすぐに消し炭だ。」

「オレがどれだけ炎を前に武器を打って来たと思ってるんだ。モンスターの炎程度で怯むようなへまはしないさ。」

「炉の炎は襲い掛かつては来ないだろ?」

「うっ…。」

いつも冗談交じりに話すアルクだが、今日の様子はまるで違っていた。その真剣な眼差しに、ヴェルフはもちろんベル達も息を呑む。彼はパーティー唯一の中層経験者なのだ。その言葉の重みがズシリと伝わってくる。

「行ってみれば分かる」なんて言うけどな。中層こに関しては何行つてから分かつても遅い”んだ。ダンジョン13、14階層での冒険者の死亡率は極めて高い。その理由のほとんどは準備不足。ランクアップで勢いづいた冒険者達が半端な知識で中層へ飛び出した結果だ。」

ベルは考える。自分は浮足立っていないだろうか。エイナの講義で中層の恐ろしさは理解したつもりだった。しかし、自分はレベル2なのだから大丈夫と驕おごっていないか。アルクがいれば大丈夫と高を括くっていないか。中層進出への覚悟が、本当に出来ていたか。

「万全の準備で向かってても異常事態イレギュラー一つで状況は一転する。そうなれば求められるのはその場での対応力だ。そのためにも知識は詰めるだけ詰めといて損はない。」

「異常事態、ですか…。」

「ああ、モンスター的大量発生やダンジョンの崩落は上層より遥かに起こりやすい。いざつて時の判断が早いか遅いかで命に関わる事だつてある。」

その言葉を重く受け止めているのはアルク自身も同じであった。彼も直面した中層の脅威。それを思い出し俯うつきそうになるが、いつまでもそのままではいられない。

（今度は俺が守る側なんだ。ベル達をあんな目に遭わせはしない。絶対に！）

心中で意気込むアルクだったが、そこで妙に場の雰囲気きふきが暗い事に気が付いた。それ

もそうだろう。アルクが中層の恐ろしさを真剣に語り続けたために、ベル達は不安が募る一方なのだ。

「ま、行かないや始まらないんだ。いきなり深くまで潜る訳じゃねえんだし、13階層からゆっくり慣れて行きや何も問題ないさ。」

多少強引ではあるがパーティの士気を少しでも高めようとするアルク。先程の真剣な姿とは打って変わった様子のそんな彼にベル達は顔を綻ばせる。

「そうだな。出来る事からやってこうじゃないか。それに、オレの魔法も役に立ちそうだって事も分かったしな。」

「リリもサポーターとしてどんな場面でもベル様を援護出来るよう勉強に励みます！」
「うん、僕も、あの人に追い付くために頑張る！ もっと強くなる！」

想定とは少し違ったが、なんとかパーティの士気は上がったらしい。それぞれの思いを胸に意気込むベル達。「あの人って誰ですか？」というリリの疑問にベルが慌てているが、それはいつもの事だろう。

そしてアルクも今一度、パーティでの中層進出に覚悟を決めるのであった。

「ああ、暇だ……。折角出て来られたつてのによお。」

ダンジョンのとある場所で、1人の男が佇んでいた。

「目立つ行動は避けるつつつてもよお……。こうも暇じゃあ鈍ちちまうぜ。」

「ん？ おいあんた、こんなところで何してんだ？」

1人でボソボソ呟く男に気付いた冒険者がどうしたのかと問いかける。

——ザシユツ 「……え？」

次の瞬間、問いかけた冒険者の体は斜めに切り裂かれていた。彼は最期まで自分の身に何が起こったのか理解する事が出来ずに逝った。

「ああ、やっちまった。まあ1人くらいなら大丈夫だろ。とりあえず移動しねえとなあ。このまま突っ立ってたら死体の山が出来上がっちゃうぜ、ヒヒッ。」

男はダンジョンの奥へと姿を消した。

残されたのは誰とも知らない冒険者の亡骸だけであった。

6章：【過去偏】『錬金術師、弟になる』

Recipe. 28 — 手伝い + 恐竜 + 射手

ヴェルフがパーティに加わり、いよいよアルク達は中層の攻略へ向かう事となった。

しかしアルク以外は中層についての知識があまりない。そのため、数日の準備期間を設けた。やるべきことはアドバイザーの指導の下で中層の知識を得る事と、それに応じたアイテムや装備を入手する事だ。10階層に足を踏み入れた時とは違う。強さも数も、上層とは桁違いなのだ。

「使える薬がもつと欲しいな。ちよつとダンジョンで作つて来るかな。」

アルクも中層攻略に向けて準備をしているのだが、中層での戦いにおける準備は普段から出来ているため焦る事はなかった。アルクが薬作りにダンジョンへ向かうとした時、店の奥からナーザが現れた。

「あれ？ アルク、どうしたの？」

「ああ姉さん。ちよつとダンジョンで錬成でもして来ようかと思つてな。」

「え？ アルク、忘れたの？ 今日卵を取りに行く日だよ。」

「……あ。」

彼女の言葉に固まるアルク。どうやら完全に忘れていたらしい。

「準備も大切だけど、今日はこっちの手伝いをお願いね。納品にも関わるから。」

「分かってるよ。もう出発するの？」

「もう少し待って。」

そう言つてナアーザは再び店の奥へと消えて行く。アルクも仕事に必要な最低限の準備をし、ナアーザを待つ。すると、急に店のドアが開いた。

「すみません。今日は休業…、ってベルじゃないか。」

「あ、アルク。おはよう。」

ベルの挨拶にアルクも「おはよう」と返す。今は各々準備を進めているため、ベルも例外ではない。しかし『青の薬舗』を訪れた彼は今からダンジョンへ向かわんばかりの装備だった。

「どうしたんだ？ まだ準備期間だったと思うが。」

「うん、実は準備するのにお金もつと必要かなって思つて。もしアルクの都合が良

ければ一緒にダンジョンに行こうかと思つただけ…。」

「ああ、悪いな。今日は街の外まで仕事で出る予定なんだ。」

しつかりとした準備をするならば、やはり出費は嵩むもの。ポーションや対策アイテムを揃えていく内に、ベルの懐はかなり寂しくなっていた。資金稼ぎに力を貸したいア

ルクだったがその日の仕事はどうしても抜けられない。どうしたものかと考えたアルクはベルにある提案を持ち掛けた。

「そうだ、うちの仕事を手伝ってくれないか？ もちろん給金は出すぜ？」

「え？ 店の、仕事を？」

「いやあ、楽しみだねえ、ベル君♪」

「あ、あの…神様？ これは仕事であって遊びに行くんじや…。」

「分かってるさ。でも2人で一緒にオラリオの郊外に出るなんて初めてなんだ。

ちよつとくらいはしやいだって構わないだろ？」

「ちよつとヘステイア様！ あまりベル様にくつつ付かないください！ ベル様も何ニ

ヤニヤしてるんですか!? やっぱり胸ですか？ 胸なんですか!?!」

「……うるさい。」

「良いではないか。たまにはこのように賑やかなのも悪くない。」

オラリオの街から離れていく馬車の中。そこには2人の神と4人の眷属というなんとも奇妙なパーティの姿があった。アルクの予定ではナーアザとミアハ以外には臨時バイトという事でベルのみが同行する予定だったのだが、その事を伝えに行つた際にハスティアが参加となり、次いでベルと探索に向けて準備するものの擦り合わせをしようとして来たリリが加わつた。

「別に手伝いは必要なかつただけど…。」

「まあまあそう言わずに。ベルを騙してた分の清算つて事でさ。」

「ぐっ…。痛いところを…。」

アルクの言葉にぐぬぬと言ひ淀むナーアザ。すると、それを聞いていたリリが反応した。

「ベル様を騙してたつて、ナーアザ様は一体何をなさつたのですか?」

「リリ、その事はもう済んだ話だから、ね?」

「いえ、同じくベル様を騙した者同士として、聞かない訳にはいきません!」

「何だよその使命感…。」

ナーアザは以前、ベルが駆け出しであるのをいい事に薄めたポーシオンを通常の値段で売り付けていた。『調合』という発展アビリティをフル活用し、薄まった味を様々な調味料で誤魔化したナーアザであつたが、その作業は通常の仕事とは異なる。製薬はほと

んど行わないアルクではあるが、ナアーザの製薬作業を見慣れていれば、その違いに気付かない訳がない。早々に罪は露呈する事となった。

無償でポーシオンを配るミアハへの不満やそれにより火の車状態を抜け出せないファミリアの現状といった貯め込まれていたものを吐き出すナアーザであったがそれとこれは別問題。”自身の武器のメンテや錬金^{アルケミック}混成の材料のために消えていくアルクの稼ぎ”も必要経費という事で勘弁していただきたい。

——「ちやんとベルには謝って下さいね、——ナアーザさん。」

他人行儀なアルクのその言葉がトドメとなり、ナアーザはベルに謝罪する事となった。

「着いたぞ。ここがセオロの森だ。」

一行が到着した目的地は、見渡す限り木々の生い茂る森林地帯であった。今回のミッションはそこにあるとある素材の入手だ。

「そういえば、何の素材が必要なの？」

「ああ、言つてなかつたな。 ”ブラッド・サウルスの卵” が今回の目的だ。」

「ブラッド…サウルス？」

「ベルはまだ日が浅いから知らないか。 ダンジョンだと深層のモンスターだしな。」

「え…、”深層”のモンスター…？ つて、無理無理無理！ 僕じゃ死んじゃうよ！」

深層域のモンスターを相手にするのであれば、おそらくレベル3であつても厳しいだろう。つまりその場にいるメンバーでは束になつても敵うはずがないのである。しかし当然ながらそれをアルク達が理解していないはずもない。

「地上で繁殖してきたモンスターは魔石が小さいせいも、強さもダンジョンの奴と比べてかなり落ちてるんだよ。 もちろん得られる素材の質も下がるが、まあ今回は気にしなくて良いさ。」

ダンジョンがバベルにより蓋をされるより昔、地上の各地へ散つて行つたモンスター達は繁殖によりその数を増やしたが、それに反して体内に持つ魔石は小さくなつていった。同じモンスターであつてもその力は魔石の大きさに比例する。地上のブラッド・サウルスであれば、レベル2の冒険者ならば倒す事も可能なのだ。

「それじゃあ、アルクとベルはモンスターの気を引いて。 私達はその間に卵を巣から取ってくるから。」

「わ、分かりました。」

倒す事が可能だという話を聞いても相手はダンジョンにおいて深層に生息するモンスター。ベルの顔には心配という様子が窺える。

「じゃ、これな。下手に狩り過ぎると次回の卵採取に影響するからな。なるべく注目を集めたうえで逃げてくれ。大丈夫、ベルの速さなら問題ないさ。」

そう言つてアルクはベルに小さな袋を渡す。その袋から漂う嫌な臭いにベルは覚えがあつた。「あれは」と呟いたのはリリだつた。それもそうだろう。その臭いはリリがベルを10階層に置き去りにする際に、彼にモンスターの注意を集めるため使つたアイテムが放つていたものと同じなのだから。

——べちより

「……………え?」

ベルの肩に落ちて来た粘性のある液体。ベルが恐る恐る振り返ると、そこには口を開いた大きな恐竜の姿があつた。

「行くぞ、ベル! 喰われるなよ!」

「ええーっ!?!」

ベルと同様にモンスターを誘い寄せるアイテムをぶら下げ走り出すアルク。ベルも

すんでのところまでブラッド・サウルスの牙を避け、逃走を開始する。

しかしアイテムの効果は抜群らしく、臭いに惹かれてベルの前方から別のブラッド・サウルスが現れる。挟み撃ちとなったベルは突然の状況に反応できず、足を止めてしまった。その時、

——ピューーッ！

2匹のブラッド・サウルスの頭の真横を大きな音を立て何かよが過る。一瞬そちらに気が逸れた隙にベルは2匹の間から抜け出した。

「いったい何が——」

「姉さんだよ。『かぶらや鎗矢』って言ってな、射った矢から音が出るんだ。」

「え、ナアーザさんが？ 結構距離が離れてたと思うんだけど……」

「姉さんの弓矢の腕前は一流だからな。これくらいの距離なら狙い通りさ。」

卵採取のメンバーから遠ざけるために走ったため、ベルからは既にナアーザ達はほとんど視認出来ない。しかしその距離を物ともせず狙った通りに矢を射ったというナアーザの技に、ベルは驚きを隠せなかった。

「だいぶ集まって来たな。一度あの木の上で休もう。もちろん袋はぶら下げたまなまな。」

周辺の恐竜達の注意がアルクとベルに向いていると判断したため、その状態を保ちな

がら大木の上で少し休憩を取る事にした。幹の太いしつかりとした大木のため、仮に恐竜達がアルク達を落とそうと攻撃をしたとしても簡単に折れはしないだろう。

「んー、向こうにブラッド・サウルスはいないみたいだな、よしよし。」

囿としての役目をしつかりと果たしている事を確認したアルクは比較的太い枝の付け根に腰を下ろした。ベルも木の下に集まる恐竜達に怯えながらも同様に腰掛ける。

「いきなりで悪かったな。ほんとは来る途中で説明するつもりだったんだが、やたらと賑やかになったんでつい話しそびれちゃった。」

「びつくりしたけど、アルクが言ってた通り僕でも十分逃げられたし、それにナーザさんも助けてくれたから大丈夫、かな。」

まともな説明も無しに危険な囿を押し付けられたにもかかわらずそれを責めようとはしないベル。

アルクはそんなベルの頭をクシャッと撫でた。

「えっ？ な、何？」

「別に。何でもねえよ。」

もし弟がいたらこんな感じなんだろうかとアルクはふと考えた。

（もしかしたら姉さん達から見た俺は、こんな感じだったのかね。……いや、ないわ。）

フアミリアに入団して間もないアルクをナーザやテイルニアは弟の様に可愛がっ

ていた。しかし、アルクは決してベルの様な「聞き分けの良い弟」ではなく「手のかかる弟」だったに違いない。

「そういえばさっきの、…鏑矢、だっけ。 凄かったね！」

「ん？ 鏑矢がか？」

「音が出る矢つていうのも凄いけど、それを射ったナアーズさんだよ！ あんなに離れているところからブラッド・サウルス達の注意をまとめて惹いちやうなんて。」

ほとんど視認出来ない場所からベルと恐竜達の位置を把握し、最も恐竜達の注意を集められる場所に射る。そんな芸当が出来る冒険者はそれほど多くはないだろう。

「あんなに凄いのに、なんで冒険者を止めちゃったの？」

「……。」

ベルの質問に、アルクが沈黙する。その様子に自分が触れてはならない話を聞いてしまったのではないかと慌て始めるベル。

「あ、ご、ごめん！ 他のファミリアの事情に首を突っ込むなんて——」

「いや、丁度良いかもしれないな。」

「……え？」

アルクの真剣な声色に動きが止まるベル。ベルを見るアルクの視線は、どこか覚悟を窺^{うかが}わせるそんな真つ直ぐなものだった。

「これから俺達は中層に向かうんだ。この話はきつとベルにとつても良い勉強になる。だから、聞いてくれるか？ ダンジョンという生き物を前に崩れて行った、とあるファミリアの話をさ。」

「とある……ファミリア——」

それは、とある中堅ファミリアの没落物語。

Recipe. 29 — 激マズ + 忠犬 + 獣好き

—— 約2年前 『青の薬舗』

「おいつ、また犠牲者が出たぞ！」

「あーあ、だから止めた方が良いつて言ったのに。」

薬舗の中では、ちよつとした騒ぎが起こつていた。そこが薬舗である事から急病人がやつて来たという可能性もあるのだが、実際は少しばかり違う。急病人はそこへとやつて来た訳ではない。薬舗の中で急病人が生まれたのである。

「ロキスなら大丈夫と思つただけだな。ほら、耐異常のアビリティもあるしさ。」

騒ぎを起こした張本人であるはずの彼は地に伏した狸人ラッの男を心配した様子もなく想定と異なる結果に考え込んでいた。

「アンタのまつずい薬を単なるステータス異常と一緒にしないでくれる、アルク？」

「良薬は口に苦しつて言うだろ、アネット。」

「青ざめて倒れるのを”苦し”の一言で片づけようっての?」

現実是他——アルクが思っているほど優しくはないらしい。とりあえず青ざめ変な汗が噴き出しているロキスを主神であるミアハの下へと連れて行かなくてはいけないため、「またか」という顔をされるのは承知の上でロキスを背負い店の奥にあるドアをノックし、アルクは中へと入っていく。

「またか、アルク。」

顔どころかしっかりと言われてしまった。やれやれと頭を抱える主神を前に何も言えないアルク。

「医療系ファミリアの団員が率先して病人を出してどうするのだ。先日も探索へ向かう団員に自前のポーションを渡して大変な騒ぎになったであろう。」

「いやあ、耐異常のアビリテイがあればいけるかなあ、なんて。」

「いけるかなあ、ではない。試してみたいのであればまずは自分でアビリテイを獲得し、自分で試してみるんだ。ロキスは実験台ではない。分かったな?」

「分かりました…。」

こうしてアルクがミアハから注意を受けるのは一度や二度ではない。アルクは自分に発現した魔法『錬金混成』アルケミックサにより錬成した薬が人が飲んで大丈夫だと判断すると、つ

い試してもらいたくなるのだ。団員に關しては全員が彼の薬の破滅的なマズさを知っている。しかし彼が錬成する薬にはステータスの一時的な上昇というなかなか魅力的な効能のものもあり、しかもそれがタダで手に入るとなれば思わず手が伸びる者もいる。

” 味さえ我慢すれば ”

そんな甘い考えは通用しない。アルクの錬成する薬は幾多のチャレンジャー達を沈めて来たある意味で最恐の兵器なのである。ちなみに誰かが「この薬ならばオラリオ最強の冒険者に膝を着かせる事が出来るかもしれない」と言っていた。目指すところが明らかにおかしい。扱いは偉業というよりは完全に災害に近いだろう。

「まあたミアハ様に怒られてたの？ 懲りないねえ、アルクは。」

「別にいいだろ。俺は真面目に薬作ってたんだよ。」

ロキスをミアハに任せ部屋を出ると、柵の整理をしていたヒューマン——ティルニアに声を掛けられた。レベル2でありミアハ・ファミアでも指折りの冒険者であるティルニアはファミアに入って間もないアルクの事も何かと気に掛けていた。やたらと

からかって来るのはあれだが彼もその点は感謝している。

「真面目に、つて言っても魔法で作った薬でしょ？ ナアちゃんみたいに本で勉強したりする訳でもないし、真面目さは伝わらないかなあ。」

「ぐっ…。」

痛いところをつかれてしまった。彼の魔法『錬金混成』アルケミックサは魔石や発現者専用アイテムである血晶を媒体に薬を錬成するというものだ。ただし、出来上がる薬の効果はランダム。しかも効果だけでなく色、味、匂いも様々だ。例え薬の効果が抜群であっても味や臭いのせいで飲む事が出来ずに廃棄を余儀なくされる薬は数知れない。

正当な製法により薬を作ろうとした事もある。しかし素材の種類やらその配分やらと覚える事が多く、しかもそこに精度が要求されるのが製薬。頭を動かすより体を動かす性質たちであったアルクは早々にギブアップした。

そういう意味で、魔法一つで薬を錬成出来るというのは“ちょうど良い逃げ道”だった。魔法であれば冒険者として成長すればきつと薬の質も上がるだろう。そう思っていたのはいつだっただろうか。かれこれ一年半は優に経っているかもしれない。アルクはちよつと憂鬱になって来た。

「何の話をしているの？」

「おお、ナアちゃん！ 今ちようどナアちゃんの話をしてたんだよ。」

「私の?」

アルクがティルニアと話していると、話に出て来たナーザ本人がやって来た。
シアンスローブ
 犬 人である彼女もティルニアと同じくレベル2。やはりファミリア屈指の冒険者だ。ティルニアの様にアルクの面倒をよく見てくれるのだが、手を引き導くのがティルニアであれば、ナーザはそつと背中を押す感じだろう。それとなくフォローをしてくれるのが彼女なのだ。

「ナーちゃんは薬の勉強頑張ってるけどアルクは頑張ってるねえ、って話。」
 「いろいろと省き過ぎだろ、それは。」

人の事を怠け者みたいに言うティルニアに抗議するアルク。

「まあ、アルクには錬金術があるからね。それでしっかりした薬が作れるなら、別に問題は無いと思うよ。」

「つまり現状は問題ありって訳だね。」

背中を押してくれてると思いきや背後からグサリといかれてしまった。人並み以上に勉強し、しかもランクアップにより『調合』という調薬向けの発展アビリティを得たナーザに言われてしまえば何も言い返す事など出来ようはずもない。

「まあナーちゃんの必死の勉強っぷりに比べたら私だってやってないようなもんだけどね。」

「そんなに凄かったっけ？ 俺は自分の魔法について知るので精一杯だったから勉強してる様子はあんまり記憶にないんだよなあ。」

「アルクが来てからは結構落ち着いたんだけどね。その前のナアちゃんと云ったら医学薬学といろんな本を読んでミアハ様に報告してさあ。ミアハ様に褒められた時のナアちゃんの浮かれ様と言つ「ちよ、ちよつと待つて！ そ、そんなんじゃないから！」……そんなんじゃないって言つてもねえ。」

顔を赤くして抗議するナアザ。彼女は普段落ち着いた様子のためアルクには必死で勉強しているイメージが浮かばない。ただ、ミアハに褒められた時については彼にも割とすんなりとイメージ出来た。きつと今の様に顔を赤くし犬シアンスローブの特徴である犬尾をブンブンと振っていただろう、間違いない。何せ彼女の二つ名は、ミィヤル・ハウンド医神の忠犬なのだから。

「いやあ、必死に否定するナアちゃんも可愛いなあ。」

「あ、ちよ、抱き着かないで。」

照れるナアザの様子に耐えられなくなつたのかテイルニアが彼女に抱き着いた。決して強い力で抱きしめている訳ではないのだが、ナアザはどうにも抜け出せない。その理由はテイルニアのスキルにある。冒険者に発現する『スキル』ではなくその人が独自に身に着けた技の方だ。相手を拘束しつつも決して苦しくないよう配慮されたそ

の技に捕らえられた獣人は多い。

そう、テイルニア・ヴィスキーは無類の動物好きなのだ。

目の前に猫がいればそちらに気を取られ、散歩をする犬を見かければそちらに心を奪われる。

そんな彼女の動物愛は獣人にまで及ぶ事が多々ある。普段であれば流石に彼女も自制し誰彼構わず撫で練り回したりなどしないのだが、精神的な疲労状態であったり長期に渡り彼女の言うところの“獣成分”を補給していなかったりすると本能が理性に勝りそこ行く獣人に抱き着きそうになる。

否、ぶつちやけ何度か抱き着いた前科がある。

そんなテイルニアにとって身近な“獣成分”補給の役を担うのがナーザーだ。無闇に抱き着かれるのはナーザーも好きではないようだが、テイルニアの拘束は優しいながらも決して解けないし、何より補給をしなかった場合にどうなるかも知っているため強くは反発しない。

「……そろそろ解いてもらえない？」

「んー、もうちよつと。」

それにティルニアの獣人、というより動物の扱いはかなり上手いらしい。以前抱き着き撫でられた感想をアルクがナーアザに聞いてみると、「不思議と心が落ち着くのが悔しい」との事。彼女の無差別獣人抱き着き事件が大事にならなかったのはそういったテクニクもあつての事だろう。

大事にはならなかったが、その奇行は娯楽に飢える神達の耳に入った。そして訪れるティルニア・ヴィスキーのランクアップ報告。デナトツス神会における彼女の二つ名候補には、そのほとんどに「獣」という字が含まれていた。ギルドのランクアップ情報を公開処刑へと変えるような二つ名もある中でミアハはなんとか落としどころを見極め、『ケモナー獣愛者』というティルニア本人も納得の二つ名を勝ち取った。

「で、いつまでやってるんだよ。」

「おやおや？ アルクもやって欲しいのかい？」

「いや、勘弁してくれ。」

ティルニアのテクによって撫で回されボーっとした様子のナーアザ。獣人でないアルクにそのテクが通用するかどうかは分からないが、撫で回されるのは御免であるため即座に断る。

「遠慮しなくて良いのにい。ドーンとティアお姉さんの胸の飛び込んでおいで！」

「ドーンで、今の身長じゃ絵面的にただ抱き合つてるようにしか見えないだろ。」

テイルニアとアルクは3歳違いである。しかし、アルクの身体は人並み以上の成長を見せており、14歳にしてテイルニアを追い越さんとしていた。まだその成長の勢いは止まつておらず、1年も経てば完全に彼女を追い抜くだろうと思われる。

「んー、弟が成長したのを喜ぶべきか、それとも反抗期を憂うべきか…。」

「誰が弟だ。姉が抱き着き魔つてのは勘弁願いたいね。」

「く、それを言われちゃお終いね。」

アルクにバツサリと言い捨てられ「負けたぜ」と言わんばかりの姿で項垂れるテイルニア。

「何をしてるの?」

「ナアちゃん! アルクがいじめるー!」

夢心地から戻って来たナアーザに慰めてもらおうと再度抱き着くテイルニア。戻ったばかりにも関わらず再び夢心地の世界へと旅立つナアーザであった。

「やっぱり、ランクアップが必要なんじゃないかな。」

2度目の帰還を果たしたナアーザにアルクの薬について話すと、そんな答えが返って来た。

「やっぱりそうなるよなあ。でもまだ冒険者になって2年も経ってないんだぜ？ ナアーザさんで4年かかったのに、俺じや何年かかるか分かんねえよ。」

「でも、アルクの成長速度は私より早い。それに『劍姫』は1年でレベル2になったって話だから、アルクもいつランクアップしてもおかしくないと思う。」

「世界記録と比べられてもなあ…。」

行き着く結論はアルクと同じ。やはりランクアップだった。しかしそれはやろうと思つて出来るものではない。ナアーザは4年、それよりも早いティルニアでも3年はやはりかかっている。

「ステータスだけじゃなくてランクアップするに見合うだけの功績が必要、だったか？

2人はどんな功績を上げたんだ？」

冒険者がランクアップをする上で必ずと言って良いほどぶち当たる壁、それが”偉業”だ。どれだけステータスを上げようともその冒険者が偉業を達成していなければいつまでもランクアップをする事は叶わない。アルクもステータスだけであればレベル2になる事も可能なのだが、彼自身に偉業を達成したという記憶はない。現状ではアルクも他の冒険者同様に壁に阻まれている状態と言つて良いだろう。

「功績かあ。あたしは中層でモンスター達の猛攻から仲間を守つたつてのが偉業として認められたんだよねえ。正直無我夢中でその時の事はあんまり覚えてないんだけ

「どせい。」

「へえ。 ナアーザさんは？」

「私は、12階層でインファントドラゴンを狩った事だね。仲間とはぐれて1人で戦わなくちやいけなかったけど、なんとか上手く魔石を打ち抜いて倒せた。敵が増えたり少しでも立ち回りを誤ってたら命を落としたかもしれない。」

「それを言ったらあたしもいつ死んでもおかしくない状況だったよ。」

”偉業”の種類もいろいろあるが、多くの冒険者にとつての偉業とは死と限りなく近い状況を乗り越える事かもしれない。上層を適正探索域とするレベル1であれば上層最強ともされるインファントドラゴンや中層モンスターとの戦いは間違いなく命がけ。つまり”偉業”の生まれる可能性も大きく高まるのである。

「上層で格下を狩ってるばっかじゃダメって事か。でもレベル1じゃ中層には行けないし。」

「そういう時のためにあたし達がいるんですよ。あたしだってロキス達に連れてつてもらったんだからさ。中層に行きたかったらいつでも誘ってよね！」

「そーいや俺も前に連れて行ってもらおうとしたんだつた。ただナアーザさんが——

——

「ダメ。アルクにはまだ中層は早い。」

「……つて言つて許してくれなくてな。」

「ナアちゃん？ 心配なのは分かるけど、過保護なものかどうかと思うよ？」

ナアーザもレベル2へのランクアップのためには中層への進出が近道である事は知っている。しかし同時に、レベル1にとつて中層が如何に恐ろしい場所かも理解している。入団以来実の弟の様に面倒を見て来たアルクが危険な目に遭うのをナアーザはどうしても許容出来ない。

「アルクのステータスがもうランクアップ可能範囲と言つても”魔力”によるところが大きい。でも、アルクが使える魔法はアイテム作成の錬金術だけ。今の”力”と”耐久”に加えて戦闘向けの魔法なしとなると、やっぱり不安。」

「ぐはっ」

「いやあ、流石ナアちゃん。的確に痛いところをついて来るねえ。」

ナアーザの見事な正論にアルクは項垂れ、テイルニアは苦笑い。アルクの中層への道はまだ開けそうになかった。

「ああ、くそ。強くなりてえなあ…。」